

白糸の 亂れの文字を呼び出だ
 人の身のあだなりけりと云々
 人相のまじり死を尋む身の上
 又思ひつらぬ物思の憂め
 死に思ひつらぬ死なれぬと
 思ひつらぬ死なれぬと云々
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか
 うき身の何と云々 此身いか

後シテ詞「是なる童部ども何を笑ふぞ。何物に狂ふがをかしいとや。うたてやな心あらん人は。訪ひてこそたぶべけれ。うれをいかにといふに。夫には死して別れ。唯ひとり念れ形見とも思ふべき。子の行方をも白糸の。地「亂れ心や狂ふらん。シテサシ」實にや人の身のあだなりけりと。誰かいひけん空言や。又思ひには死なれざりけりと。讀みしもことわりや。今身の上知られたり。是もひとへに夫や子の。故と思へば恨めしや。地「うき身は何と櫛の葉の。柏崎をば狂ひ出で。越後の國府に着きしかば。人目も分かね我姿。いつまで草のいつまでと。知らぬ心は麻衣。浦はるくと行くほどに。松風遠くさびしきは。常磐の里の夕べかや。我にたぐへてあはれなるは此里。子故に身をこがしゝの。野邊のきしまの里とかや。降れどもつもらぬ淡雪の。淺野といふは是かとよ。桐の花咲く井の上の。山を東に見

野邊のきしまの 櫻野の井が
 子愛の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が
 地名の井が 櫻野の井が

聖なるを念ふ 念佛の聲こそ極
 樂にひとしき内陣に入る案内が
 釋迦のやうに 釋迦如來の現世の
 衆生を來世に送り届けん説法の
 彌陀の導く 阿彌陀如來の來世
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十
 方世界を照らすの 彌陀の光が十

なして。西に向へば善光寺。正身の彌陀如來。わが狂亂へさておきぬ。死して別れし。夫を導きおはしませ。
 僧詞「いかん狂女。御堂の内陣へは叶ふまじきや。急いで出で候へ。シテ「極重惡人無他方便。唯稱彌陀得生極樂ところ見えたり。僧「是は不思議の物狂ひかな。そも左様の事をば誰が教へけるぞ。シテ「教へは本來みだ如來の。御誓ひにてはまじきや。唯心の淨土と聞く時は。此善光寺の如來堂の。内陣こそは極樂の。九品上生の臺なるに。女人の參るまじきとの御制戒とはうもされば。如來の仰せありけるか。よし人々は何ともいへ。聲こするべ南無阿彌陀佛。地「頼もしや。シテ「釋迦はやり。地「彌陀の導く一筋に。こゝを去ること遠からず。是ぞ西方極樂の。上品上生の。内陣にいざや參らん。光明遍照十方の。誓ひぞしるき此寺の。常の燈影頼む。夜念佛申せ人々よ。夜念

常の燈 善光寺の常燈を云ふ。... 佛いざや申さん。... シテ詞「いかに申し候ふ。如來へ參らせ物の候ふ。此鳥帽子直垂は。別れし夫の形見なれども。形見こそ今はあだなれ是なくへ。念るゝひまもあらまじ物をど。讀みしも思ひ知られたり。是を如來に參らせて。夫の後生善所をも。祈らばやと思ひ候ふ。あらいとほまや此鳥帽子直垂の主は。よろづ何事につきても聞からず。弓は三物とやらんを射うろへ。歌連歌の道も達者なりし上。又酒盛などの折節は。いで人々に亂舞まうて見せんとして。鐵直垂とりいだし。衣紋うつくしく着ないて。へりぬりとつてうちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつ取り。鳴るは瀧の水。

佛いざや申さん。
シテ詞「いかに申し候ふ。如來へ參らせ物の候ふ。此鳥帽子直垂は。別れし夫の形見なれども。形見こそ今はあだなれ是なくへ。念るゝひまもあらまじ物をど。讀みしも思ひ知られたり。是を如來に參らせて。夫の後生善所をも。祈らばやと思ひ候ふ。あらいとほまや此鳥帽子直垂の主は。よろづ何事につきても聞からず。弓は三物とやらんを射うろへ。歌連歌の道も達者なりし上。又酒盛などの折節は。いで人々に亂舞まうて見せんとして。鐵直垂とりいだし。衣紋うつくしく着ないて。へりぬりとつてうちかづき。手拍子人に囃させて。扇おつ取り。鳴るは瀧の水。

白虹地に満ちて 周書異記云... 白虹二十道あり南北に通貫して... 飛花落葉の風の前には。有爲の轉變をさと... 電光石火の影の中には。生死の去來を見る事。始めて驚くべきにはあらねども。幾世の夢とまどはりし。假の親子の今をだに。添ひはてもせぬ道芝の。露のうき身の置き處。シテ「誰に問はまじ旅の道。地。是もうき世の習ひかや。シテ「悲しみの涙眼にさへきり。思ひの煙脚に満つ。つらく之を案するに。三界に流轉して猶人間の姿執の。晴れがたき雲の端の。月の御影や明らけき。眞如平等の臺に。至らんとだにも歎かずして。煩惱のきづなに。結ばれぬる悲しき。罪障の山高く。生死の海ふかし。如何にとしてか此生に。此身を淨へんと。實に歎けども人間の。身三口四意三の。十の道おほかりき。シテ「されば初めの御法にも。地「三界一心なり。心外無別法。心佛及衆生と

人に薫じ。白虹地に満ちてつらなれり。シテサシ「つらく世間の幻相を觀するに。飛花落葉の風の前には。有爲の轉變をさとり。電光石火の影の中には。生死の去來を見る事。始めて驚くべきにはあらねども。幾世の夢とまどはりし。假の親子の今をだに。添ひはてもせぬ道芝の。露のうき身の置き處。シテ「誰に問はまじ旅の道。地。是もうき世の習ひかや。シテ「悲しみの涙眼にさへきり。思ひの煙脚に満つ。つらく之を案するに。三界に流轉して猶人間の姿執の。晴れがたき雲の端の。月の御影や明らけき。眞如平等の臺に。至らんとだにも歎かずして。煩惱のきづなに。結ばれぬる悲しき。罪障の山高く。生死の海ふかし。如何にとしてか此生に。此身を淨へんと。實に歎けども人間の。身三口四意三の。十の道おほかりき。シテ「されば初めの御法にも。地「三界一心なり。心外無別法。心佛及衆生と

のかせき。繋げども留まらず
 などあるより。招きたり
 も引きとめられぬ。響ふ用ひた
 り。
 さしは煩悩の云々。前引ける
 文の前後を用ふ。打たるいとも
 一度つきたる執心の難れがたき
 を云へり。
 深草の少将。履歴は分ちらぬ人
 なり。四位なりし故に四位少将
 とも呼ぶ。本居内達翁の説
 へ。僧正通昭の在俗の時かく呼
 べしにやと云へり。されど是
 一家の考證なり。詳ならず
 として密くべし。
 車の物見。始め引きたる
 文みて大方に分かるべし。車
 積ふ百夜まで通ひ来ては。獨
 しを云ふ。積の車のながえを
 せなう。今なうで。昔の有様
 を今こゝみて。學んでの意。有
 極ふゆけ。云へ。繁く通ふ事
 けたり。
 車。物見。車に乗る人目立
 ちて。車と車となり。いろく
 輿。乗物の趣向を替ふる事。
 山城の云々。此熊森の心ひつ
 か止むべきと云ひかけたり。拾
 遺集九の歌。山崎(城)も作
 る。木橋の里。山崎(城)も作
 る。歩より来る君を思ふ。ハハと
 るを用ふ。故につくと云ひかけた
 目見。鬼一口。古今集の
 序。一目見。鬼神もあられ
 と思はせ。伊勢物語。小鬼はや
 り口。食ひてけり。とあるをツマ

レ「扱其姿は。シテ」笠に簀。ツレ「身の浮世とや竹の杖。シテ」月に
 へ行くも暗からず。ツレ「扱雪にハ。シテ」袖を打ち拂ひ。ツレ「扱
 雨の夜は。シテ」目に見ぬ鬼一口も恐ろしや。ツレ「たましく曇
 らぬ時だにも。シテ」身一人に降る涙の雨か。あら暗の夜や。ツ
 レ「夕暮は。一方ならぬ思ひかな。シテ」夕暮は何と。地「一方なら
 ぬ思ひかな。シテ」月は待つらん我をば待たじ。虚言や。地「曉は。
 數々多き思ひかな。シテ」我爲めならば。地「鳥もよし鳴け鐘も唯
 鳴れ。夜も明けよたゞ。一人寐ならばつらからじ。シテ」かやうに
 心を盡しくして。地「かやうに心を盡しくして。榻の數々よみて
 見たれば。九十九夜なり。今は一夜ようれしやとて。待つ日に
 なりぬ。急ぎて行かん。姿は如何に。シテ」笠も見苦し。地「風折
 烏帽子。シテ」簀をもぬぎ捨て。地「花摺衣の。シテ」色重ね。地「裏
 紫の。シテ」藤袴。地「待つらん物を。シテ」あら急がしやすは早今

夕暮ハ云々。草根集。夕暮ハ
 心ふちらぬ思ひかな。とり身を
 かく宿の松陰。などあり。こゝ
 へいつより夕暮の思ひのま
 を云ふ。
 月ハ待つらん云々。小町ハ今夜
 月の出づるを待つらん。され
 ど我を待つちもすまじと恨むな
 ら。こゝにや。我ふ來れと云ひし
 へ。傷りぞとなり。
 我爲めならば。少將故ハハ。鶴も
 一人寐ならばつらからじ。いつそ
 花摺衣。色を重ねて。花摺衣。色
 色を重ねて。花摺衣。色を重ねて。
 月ハ待つらん云々。前ハ。我を
 待つらん。月ハ。我を待つらん。
 唯一念の。小町の爲めハ。飲酒戒
 を保たんとする心。佛法の戒も。叶ひて成佛の願となりたるを云ふ。

日も。地「紅の狩衣の。衣紋けたかく引きつくりひ。飲酒は如何
 に。月の盃なりとて。戒めならば保たんど。唯一念の悟にて
 多くの罪を滅して。小野の小町も少將も。共に佛道成りにけ
 り。
 夜の明くるを小町待つらん。と邪推するなり。
 一人寐ならばつらからじ。と云ふ。小町のも。と通ひ来て上の事ゆゑ恨めしとなり。

當麻

元清作

ワキ次第「教へうれしき法の門。開くる道に出でうよ。詞「是は念
 佛の行者にて候ふ。我此度三熊野に参り。下向道に趣きて候
 ふ。又是より大和路にかゝり。當麻の御寺に参らばやと思ひ候

願帝天皇 天平實字八年曆せし
 淡路縣公と爲され給ひし故に
 皇の御事。御深澤仁天
 積風の右大臣 帝王編年記
 天平實字九年十一月二十七日
 右大臣從一位藤原朝臣藤原成
 實。春秋六十二。淡路公の嫡孫
 武智麻呂の男なり。後人眞波の
 大臣と稱し。また横瀬の大吏と
 稱す。此大臣の女も中將姫と號
 す。當麻の受胎を續りし時の
 願主なり」とあり。
 稱淨土經 經文の名。唐の代
 ん玄奘三藏と云ふ僧の譯す所
 れと譯者ふよりて名を異し物な
 限としての意。死するまで決し
 念佛三昧の定む 念佛して定念
 忘れ去り野中の水を云ふ。經に
 て又見ゆる故なり。
 摩訶般若經 摩訶して心中定念の
 經を掃ひたる事。四月の後の
 文の經に於て云ふ。此の後の
 草庵に給ひし。正中の朝院來迎
 草庵の命を期とせんとて念佛三
 昧に入り。忽々たる密の前の三
 人來り給ふ。あやしきかたを
 人來り給ふ。あやしきかたを
 中將姫の御事。南無あみだ佛を
 のみそ呼子鳥かな。みつづけて云
 の山。尼かへし。二上の果
 時正の歌を古今集の「遠近のた

ロンギ地「實にや貴き物語。即ち彌陀の教へずと。思ふに付けて
 有り難や。二人「今宵しも。二月中の五日にて。しかも時正の時
 節なり。法事をなさん爲め。今此寺に來りたり。地「法事の爲め
 に來るとは。そもや如何なる御事ぞ。二人「今は何をか包むべ
 き。其いにしへの化尼化女の。地「夢中に現じ來れりと。二人「言
 ひもあへねば。地「光さして。花降り異香薫じ。音樂の聲すなり。
 恥づかしや族人よ。暇申して歸る山の。二上の嶽とは二上の。
 山とこそ人はいへど。誠は此尼が。上りし山なる故に。尼上の
 嶽とは申すなり。老の坂を登り登る。雲に乗りて上りけり。紫
 雲に乗りて上りけり。
 ワキ詞「かく有り難き御事なれば。重ねて奇特を拜まんど。歌「い
 ひもあへねば不思議やな。妙音聞こへ光さし。歌舞の菩薩の目
 のあたり。顯はれ給ふ不思議さよ。

つぎも知らぬ山中おほつかり
 くも呼子鳥かな「みつづけて云
 それこそ 南無阿彌陀佛こそな
 擊してさへ念佛の聲を室内
 綺羅衣 美しき衣を云ふ歸命頂
 禮を略して。歸命さしをいひ
 云ひかけたるおもあるべし。
 時正 彼岸の中日を云ふ。此日
 の大陽が真西へ入るとして。淨土
 を拜む用の日なり。
 いひもあへねば いひもあへぬ
 微妙安樂の樂の衆となり 壯
 嚴美樂安樂愉快なる清淨世界の
 本覺如の圓月お座せり 誠の
 情を極めて圓滿なる心を月お時
 へて云ふ。極樂お住みたる事を
 云ふ。思なれや座せりと云へるな
 り。
 法身却來の法味 もと極樂より
 來れる身が又よたつ極樂より
 するの意。法味の佛法の眞味を悟
 る事。
 虚空界の云々 往生樂集ふ
 虚空界の莊嚴眼迷三昧。とあり
 法輪之音聲 法輪の廣大無邊なる
 法。法輪は結縛立派なる事。眼迷
 法。法輪を見とれて眼も迷ふ。眼迷
 法の聲を云ひ。法輪の音聲の彌陀十
 方佛土お開えわたるを云ふ。空
 光陰の心 導かる、彌陀の光明
 みかけて云ふ。

後シテ「唯今夢中に顯へれたるは。中將姫の精魂なり。我沙婆に
 在りし時。稱讚淨土經。朝々時々、念らす。信心誠なりし故に。
 微妙安樂の潔界の衆となり。本覺眞如の圓月に座せり。然れど
 もこゝを去る事遠からずして。法身却來の法味をなせり。地「有
 り難や。盡虚空界の莊嚴は。眼は雲路にかゝやき。シテ「轉妙法
 輪の音聲は。聽寶刹の耳に充てり。地「蕭然とある曉の心。シテ
 誠に涼しき。道に引かる、光陰の心。地「惜まむべしやな。時は
 人をも待たざる物を。すなはちこゝぞ。唯心の淨土經。いたゞ
 きまつれや攝取不捨。シテ「爲一切世間。説此難信。地「之法是爲
 甚難。シテ「實にも此法甚しければ。地「信する事も難かるべしと
 や。シテ「唯頼め。地「頼めや頼め。シテ「慈悲加祐。地「令心不亂。
 シテ「亂るなよ。地「亂るなよ。シテ「十聲も。地「一聲ぞ有り難や。
 シテ「後夜の鐘の音。地「後夜の鐘の音。鐘の響き。稱名の妙音の。

唯心の浄土經 心中の浄土のあり
見取と云ふを經文の名をかきけり
爲一切世間此維信之法是爲甚難
法を説くは是を甚だ難しと爲す
ハ念佛するは苦ありと思ふ
ゆゑ念佛の法と云ふ
慈恵加護の心不亂 淨土經の文句。彌陀の慈恵もて加護して心を亂れざらしむるの意。
後夜 今宵の夜二時 往生禮讚「名號を稱ふること下り十聲一聲等お至りても定めて往生を得る」とあり。
光顯 照十方世界無量無邊 彌陀の光の十方世界ふまはしく照りわたるの意。
水馴 舟を渡す道具。古歌「何事も思ひ捨てたる身ぞ安んじをなぐるまの夢の世なれば」とあるを用ふ。「ま」の矢の事にて矢を投ぐる間の如く感するを云へり。但し「ま」は「ま」の字に似るもの故に「ま」なりとも云ふ説あり。

見佛聞法の色々の法事。實にも普ねき光明遍照。十方の衆生を唯西方に迎へ行く。御法の舟の水馴棹。御法の舟のさをなぐるまの。夢の夜はほのくどぞなりける。

調伏曾我

てうぶくろが

宮増作

前シテ 工藤祐經
子方 源頼朝
ツレキ 箱根別當
前ハ曾我五郎また箱根の
寺ありける日。親の敵工藤祐
經に逢ひて討ちかちんせし
を。別當とめられて泣く
思ひ止まる事を作り。後ハ別當
の所より不動明王を
給ふ事を作り。前ハ我物語
み依り。後の作者の趣向と知る
べし。
海山かけて云々 箱根の遠景も
て起し。雲の端と續けて地名を

一同次第 海山かけて行く雲の。箱根の寺に参らん。頼朝詞「抑是は兵衛の佐頼朝とは我事なり。一同」夫れ治まれる御代のしるし。東南に雲をさまつて西北に風静かなり。頼朝「ことさら當時一統の。道も直れる文武の二つ。一同」何れも叶ふ時代とて。頼朝

呼び出だす。鎌倉幕府の代のみなり
當時一統と云ふ。昔大和の朝廷の
國見も是か。天皇御自身國內の
權を御覽せんとて。時々香具山
などの如き山に御幸ありしを云
ふ。
坂崎 箱根山の事。
箱根詣で 箱根権現を參詣する
事。
星月夜 鎌倉の枕詞。
まだ有明の 明方の月の空を殘
るなり。
雲こそ匂へ 雲み紅色のうづり
雲て日の出づる事。
西に向ひて 朝日がおひくと
西方向ふの意を要ふかけたり。
富士の高根の程を知る 雲の如
かるをもて富士の高きを思ひ知
かるの意。其富士の足もとの意に
かけて足柄とつげたり。
梢を浪を 森の中より箱根の湖
水を見いだしたる意。
是を物見とせん 御參詣の行装
を見物せんとてなり。

「國見も是か坂峯や。一同」箱根詣での御爲め。頼朝「明くるを待つや星月夜。一同道行」鎌倉山を朝立ちて。まだ有明の影殘る。雲こそ匂へ朝日影。西に向ひて行く雲の。富士の高根の程を知る。足柄山を分けすぎて。梢に浪を湖や。箱根山にも着きにけり。シテ詞「やがて御社参あらうするに候ふ。ワキサシ」此程の日數待たれて今日まで。鎌倉殿の御參詣。是を物見と此寺の。老若の衆徒兒童。教をつくして我もくど。皆面々に誘へば。子「人なみくに箱王も。かたへの兒にこそはれて。講堂の庭に立ちいづる。詞」如何に申すべき事の候ふ。ワキ詞「何事にて候ふぞ。子」鎌倉殿の御參詣。たまさかの御事に候ふ。御供の人々の名を知らず候ふ。教へて賜はり候へ。ワキ「易き間の事御尋ね候へ教へ申さう。子」先づ一番に風折召され。念誦け高く見え給ふは。鎌倉殿にて御座候ふか。ワキ「あれこそ

左の座 左側の正座を云ふ。

左巴右巴 松川 いづれも定紋の名。

桐原父子 長時景季の二人。

香の直垂 香の染色の名。藤紅み黄を掛けたる色。和田の左衛門 筑盛なり。突き出たしたる 前の方へ編をさすなり。

髭 髭を剃るを制する。髭を剃るを制する。髭を剃るを制する。

赤澤山 伊豆あり。符 符を指す。山 一つ越して飛び来る矢の意。

鎌倉殿候ふよ。なんぼういみじき御威光にて候ふぞ。子「扱御供の人々の。二行に列座せられたり。先づ左の座上をば誰と申し候ふぞ。ワキ「あれは鎌倉殿の御舅北條殿候ふよ。子「左巴は。ワキ「宇都の宮の彌三郎。子「右巴は。ワキ「小山の判官。子「松川は。ワキ「小笠原。子「扱又中座の一番は。ワキ「諸司の別當梶原父子。子「香の直垂二人はたそ。ワキ「一人の大男は和田の左衛門。今一人は秩父の庄司重忠。子「扱其次につき出たしたる扇づかひ。ワキ「今此方を見候ふや。子「あれをば誰と申し候ふぞ。ワキ「あれこそ工藤一郎。子「祐經候ふか。ワキ「暫く。かやうの所に久しくは御座なき物にて候ふ。此方へ御入り候へ。シテ詞「あらめづらしや箱王殿。御身の父河津殿は。赤澤山の狩くられて。おこしの矢にあたりて空しくなり給ひたるを。某がしわざとばつと風聞仕り候ふ。弓矢八幡箱根権現も照覽あれ。某は存

夏引の糸 夏引の糸は夏引を取らぬ故云ふ。歎の無き意につけて筋の文字を呼び出たす。かまひて 吃度の意。もちひはせずと 世間を語り傳ふべしとの意。世の語も云ふの意とを兼ぬ。

同宿 同坊を寄宿する兒童たちを云ふ。駒の蹄ふ 若し仕指せ馬の下みなりとも敷かれん意。

せず候ふ。子「扱みづからが敵をば誰と申し候ふぞ。シテ「いや敵とは夏引の糸。筋なき人のいひごとを。かまひて用ひ給ふなよ。子「もちひはせずと世がたりの。天に口なし人の言ひ事。シテ詞「うれをも承引し給ふなど。子「彼古武者の祐經に。シテ「泣いつ笑うつすかされて。子「さばかりたけき。シテ「箱王も。地「幼き身のかなしさは。誠しやかに云ひなされて。心もよわくと。あきれはてたる氣色かな。地「扱頼朝は御座を立ち。早御下向有りしかば。御供の侍面々。門前さして出でければ。子「箱王は只一人。地「講堂の庭にイミテ。敵の跡を見送りて。泣くより外の事はなし。子詞「よくく物を接するに。げに我ながら後れたり。今此時の折を得て。祐經が手にかゝらんと。同宿の太刀を盗みどり。地「敵の跡を慕ひつゝ。駒の蹄にかゝらんと。門前さして追うて

聊爾 意忽ふ同じ。

敵の前のたふれ 敵の笑者とな
るの意。

このハの行者 是こそと撰びぬ
きたるの意ふや。

護摩の壇座 火を焚きて祈禱を
執行する場所。

刃の験徳 不動の刃もてして
しをあらはす事。

五智の如來 一法界体性智。
二大圓鏡智。三平等性智。
四妙觀察智。五成所作智の
五つを圓滿せる佛を云ふ。

水牛の角に命をかけ 命を佛前
み差し出しての意。

藥師の眞言 藥師如來の前ふ申
すべし咒文。

千手の陀羅尼 千手觀音ふ申す
べし咒文。

行く。ワキ詞「言語道斷。かゝる聊爾なる御事にて候ふ。さやう
の御心中有るならば。敵の前のたふれなるべし。只先づ歸りた
まへとて。地「手とり足とりいさなひ。別當の坊に歸りけり。
ワキ「抑佛陀の御誓願。本より衆生の所願を満て。ッレ「是も年
月思ひふかき。ワキ「箱根の海の恨をなす。ッレ「敵を亡ぼしたび
給は。ワキ「惡魔降伏の御誓ひ。ッレ「惡しきを平らげよきを助
くる。ワキ「其御威光を頼まんど。ッレ「こゝはの行者。ワキ「十餘
人。地「護摩の壇上をかまへつ。凡ろ飛ぶ鳥をも。れとすばか
りと面々に。刃の験徳を顯はして。地「年頃九のみをかくる大聖
不動明王の。火燄に愚老が其身をこがし。五智の如來に五体を
投げ。大威徳の乗り給ふ。水牛の角に命をかけ。かうべをかた
むけ數珠をもみ。藥師の眞言千手の陀羅尼。妙音聲を高くあげ。
後シテ「抑是は。中央に立つて惡魔を降伏し衆生を守る。大聖不

東方 東方降三世明王と祈るべ
きたる。云ひかけてあごとを尋し
たり。

中央に立つて 五大明王の眞中
ふ祭らるるを云ふ。

不動の火燄 光明赫奕として。地
へば。シテ「護摩の煙。地「不動の火燄。シテ「光明赫奕として。地

五壇の下ふ 東方降三世。南
北方軍荼利夜叉。西方大威徳

北方の五大明王を祭るふ。明王
の五大明王を祭るふ。明王

形代 祜經の形を作りて佛前ふ
す事。

調伏 祈り伏する事。

海山の御法 深き佛法の力を海
山の御法へ云ふ。

自性の月 本性の曇らぬを月ふ
譬ふ。

青蓮のまなじり 青色の蓮華ふ
似たる眼を云ふ。

寒風の鐵雨 鐵の如き雨を寒風
と共にふらす事。

大紅蓮の地 地獄の内ふ紅蓮地獄
と云ふありて。苦しみたるを

閉ぢつけらるる。苦しみをなせば。
引きて云ふ。

さつくの繩 索の文字なり。不
動の手ふ持つ繩の事。

動明王。こんがらせいたかを始めとし。地「五壇の上はれ給
へば。シテ「護摩の煙。地「不動の火燄。シテ「光明赫奕として。地
「氣色もあらたに五大尊の。四面の佛前に顯はれ給ひて。かの形
代を調伏し給ふ。あら有りがたや怖ろしや。
地「山河草木震動して。箱根の海山の。御法もおのづから。實相
の色を顯はし。自性の月の光を添へて。護摩の煙の上も隈なき。
鈴の聲耳に通じて。明々とすみやかなり。シテ「東方の降三世明
王は。地「降三世明王は。青蓮のまなじりに惡魔を降伏して。壇
上に翔り給へば。南方の軍荼利夜叉は。火燄のほのほを吹きか
け給へば。大威徳は水牛の。角振りたてゝ顯はれ給へば。北方
の金剛夜叉は。寒風の鐵雨をふらして。大紅蓮の責めをなせば。
中央の大聖不動は。さつくの繩にて祜經が。形代を巻き縛り。
護摩の壇上に引き伏せて。利劍を振りあげ刺し通して。猶嚴重

利劍。これも不動の持つ劍を云
つなぬき。つらぬきも同じ。刺
扱より終ふ事。此祈願の功德も
至れるの意。

トモ 曾我十郎祐成
シテ 箱根別當
ワキ 箱根別當
トモ 箱根別當
シテ 箱根別當
ワキ 箱根別當
トモ 箱根別當
シテ 箱根別當
ワキ 箱根別當
トモ 箱根別當
シテ 箱根別當
ワキ 箱根別當

の奇特を見せんと。形代が首を切りて。劍を先につなぬき給へ
ば。身の毛もよだちて面々に。目をおどろかす有様なり。扱こ
そ終には箱王も。其本望をば遂げにけれ。

元服曾我 げんぶくそが 官増作

二人次第 携つを限りの秋衣。恨みをいつか晴らさん。シテ詞「是は
曾我の十郎祐成にて候ふ。扱も弟にて候ふ箱王は。箱根寺に登
せ置きて候ふ。あまりに某たよりなく候ふ程に。箱根に参り箱
王を別當に申し受け。元服させばやと存じ候ふ。道行「月影は。
雪にて明くる箱根山。嶺も二つの影添ひて。ほのくぐと。うつ
ろふ富士を湖の。波の雪も時知らで。春夏秋冬をば送れども。い
つか思ひの末通る。心ばかりの頼みにや。つれなき命惜しむら
ん。

波の雪も時知らで。伊勢物語
て「時知ら山は富士の嶺いつと
らん」とあるより。雪のよるら
らぬの湖水にうつる富士のみな
らぬ。波の雪までも常お立つと
なり。春夏秋冬の波の雪の事を箱王
心ばかりの云々。つらぬきの命を
惜しむも終ふ敵を討たんとの一
存ある故ならん意。

御登山の由申して候へば。シテ
トモ 曾我十郎祐成

唯今の御登山なふよりめでたう候
よ。シテの入り来るを見て云

大方殿 大足様と云ふ程の意。
箱王の母の事。

シテ詞「急ぎ候ふ程に。箱根山に着きて候ふ。如何に團三郎。トモ
「御前に候ふ。シテ「急ぎ別當に参り。某が登山したる由申し候
へ。トモ「畏つて候ふ。如何に案内申し候ふ。狂言「シカく。
トモ「唯今祐成の御登山にて候ふ。其由御申し候へ。
狂言「シカく。ワキ詞「何と祐成の御登山にて有ると申すか。ワキ
「やがて御目に懸からうするにて有るぞ。此方へと申し候へ。
狂言「シカく。トモ「心得申し候ふ。御登山の由申して候へば。
此方へ御通りあれどの御事にて候ふ。

ワキ「唯今の御登山なふよりめでたう候ふ。扱唯今は何の爲めの
御登山にて候ふぞ。シテ「さん候ふ唯今参る事餘の儀に非ず。某
一人にてあまりに便りなく候ふ程に。箱王を元服の爲め罷り登
りて候ふ。ワキ「是は思ひもよらぬ事を承り候ふものかな。箱王
殿の御事は。大方殿より仰せ合はさるゝ子細候へば。思ひもよ

よく弟子云々 講ずるならん
出家させて弟子ふせよ。不滿意
ならん何ゆても存慮次第にして
の意。

男ふなし 元服して大人の姿み
する事。

御扶持あれ 祐成を助け救ひ給
への意。

胸の煙も 敵の爲め胸を焦が
したる其煙をもの意。
兄弟が其亡き跡と 此の兄弟
の敵討ちたる遺跡をとして、後人
み所らばるゝ身も早くならんの
意。

らぬ事にて候ふ。シテ「いやそれは女のはからひにて。筋なき事
を申し候ふ。ワキ」いや大方殿御一人にても御座なく候ふ。父河
津殿別當を召され。此子よくは弟子。悪しくは兎も角もと仰せ
候ふ程に。扱ころ師弟の契約をなし申して候へ。祐成は御存じ
有るまじく候ふ。シテ「御意尤にて候ふさりながら。我等が親の
敵の事。心に隙なく思へども。敵は猛勢力なし。唯別當の御慈
悲にて。箱王殿を男になし。父の恨みの敵をも。共に討たせて
賜はらば。出家の功德に劣るまじ。唯祐成に御扶持あれと。地
「かきくどきつゝ云ひければ。是非の言葉もあらばこそ。理なれ
や痛はしやと。別當も列座の人も。殊に袖をしをりけり。夢の
世にながらへて。有るもかひなき身の行方。命を限りなる。惜
しまずながらならへて。思ひはいつかは末遂げて。胸の煙も
其名をも。富士の嶺に上げて。兄弟が其亡き跡と吊はれん。

銀奉 承請も同じ。

ともかくも ともかくも段意を察
しての意。

ワキ詞「祐成にくどかれ申し。別當も落涙仕りて候ふ。此上は力
及ばぬ事。別當は早領掌申し候ふさりながら。箱王殿の御心中
を存せず候ふ程に。箱王殿を呼び出だし尋ね申さうするにて候
ふ。如何に誰かある。狂言「シカく。ワキ「箱王殿此方へと申し
候へ。狂言「シカく。ワキ「いかに箱王殿。唯今祐成の御登山は
餘の儀にあらず。箱王殿を男になし申し。本望を達したき由仰
せられ候ふ間。愚僧は早領掌申して候ふが。扱御心にはいかゞ
思し召され候ふぞ。箱王「ともかくも師匠の御はからひにてこそ
候ふべけれさりながら。我等が親の敵の事。世に隠れなき事ぞ
かし。たどひ出家になりたりとも。恠るゝ隙はよもあらじ。と
もく御はからひ候へ。ワキ「扱は箱王殿も同じ御心にて候ふ。
如何に祐成。御心を静めて聞こし召され候へ。箱王殿生まれと
せ給ひし時。故河津殿別當を召され。此子よくは弟子とも定め。

箱根の海山 心の深き處。
 猶成人を 箱王が早く大きくな
 れかしと祈りつるの意。
 ともよ蔭高き 祐成と箱王とな
 り。
 月の盃 月を盃と稱へ。また盃
 を月と稱ふ。此「暮方の月」の
 文字より次の「時刻も今」の
 句を出だす。

悪しくはともかくも別當がはからひたるべしと仰せられし程
 也。権現の社官の別當なれば。箱根を家り御名をも。箱王殿と
 つけ申し。今元服のをりまでも。師弟の契約淺からず。同じく
 は出家をも遂げさせ申し。一寺を繼がせ申したくは候へども。
 御身の心もさすがなり。祐成の御事も痛はるゝ。よし俗体にな
 り給ふども。内には慈悲の心中をなし。外には仁義を旨として。
 祐成の影身になり給へど。別當自ら酌を取り。地「行く末を。祈る
 師弟子や兄弟の。心は共に淺からぬ。深き箱根の海山の。たど
 へは同じ心にて。年々月日を迎へても。猶成人を急ぎつる。其
 かひ有りて今は早。ともに蔭高き。花の若枝ぞめでたき。かく
 て此日も暮方の。月の盃急げつゝ。
 ロンギシテ「時刻も今は移るなり。暇申して歸らん。ワキ「花を吹く。
 嵐につるゝ梅が香を。留めてもいかに有明の。盡きぬや名残な

ありましの 殿を討たんとする
 想を云ふ。

曾我の里 伊豆の國加茂郡。

髪をはやして 元服する事。
 なはち長き髪を切る事。切る
 「の文字を忘けてはやす」と云
 へるなり。

此一宿り 其あたり宿の一
 つある處を指す。

烏帽子を持ちて 元服すれば烏
 帽子を着るなり。

るかん。シテ「名残もさぞなあらましの。末頼みある中なれば。
 ワキ「又登山も有るべしや。シテ「とらばといひて兄弟は。ワキ「早
 門前を。シテ「出で行けば。地「さすがに別當も。年月馴れしな
 みをば。いつか念れん其跡を。見やれば伴なひ兄弟は。曾我の
 里にぞ歸りける。
 箱王詞「如何に祐成に申すべき事の候ふ。シテ詞「何事にて候ふぞ。
 箱王「此まゝ髪を下り故郷へ歸らば。母上又寺へ登れと仰せ候ふ
 べし。是にて髪をはやして賜はり候へ。シテ「是は思ひもよらぬ
 事を申す物かな。いかに團三郎何と有るべきぞ。トモ「箱王殿の
 御錠の如く。御元服然るべう存じ候ふ。シテ「さあらば此一宿り
 へ來り候へ。如何に團三郎汝はやし候へ。トモ「是はかりうめな
 がら御祝言にて候ふ程に。祐成御はやし候へ。シテ「さあらば烏
 帽子を持ちて來り候へ。トモ「畏つて候ふ。

シテサシ「實にや我等程悲しき者よもあらじ。幼くして父を討たせ。其本望をも遂げずして。猶有りがひなき身となりぬ。よしよしそれも命を限り。終には恨みを晴るべきなり。唯元服ころうれしけれと。兄弟主従すこくと。髪おしはやし千代までと。言葉ばかりは祝へども。そらろにせきあへぬ。涙や袖をしをるらん。

地クリ「それ生死の道さまぐれにして輪廻の迷ひ多し。因果を離れぬ絆も皆。親子兄弟の宿縁ぞかし。迷ふ事。まことの闇にはあらねども。子を思ふ道にはたどると云へり。雲井の鶴は月影の。さやけき空と思へども。うれも子をのみ思ひの闇に。聲をかはして鳴くとかや。我等は又親の跡に。残りて物を思ひの露の。雨とも降り涙とも過ぎ。いつかは晴れん心の闇の。名をや埋まん苔の下。地盡くる

輪廻の迷ひ 心の迷ひよりて六道と云ふ地獄。若生などの六つの世界を。生きたり死んだりして常の理のめりめりする事。因果 宿因宿縁因より善果惡果を得る事。束縛する縛の事。宿縁 前世よりの縁。子を思ふ道 後集集「人の子を思ふ道は暗みあらねども子を思ふ道は迷ひぬるかな」とあるを引く。雲井の鶴 白氏文集の。夜蘭は子鶴中鳴などより出て。翻ハ常み暗夜み子を思ひて迷ふ例を引く。

龍門原上の云々 白氏文集ふ。龍門原上土。埋骨不埋名とあるを引く。龍門ハ蓬萊の地名。

弓取 武士の事。

明經 經書の教を守るの意。

電光朝露石の火 いづれも忽ち見え忽ち消ゆる譬。

初元結云々 源氏物語「いとけなき初元結ふ長き代を契る心の結ひこめつや」と光源氏の君の元服を祝ひたる歌あれ。其意を引けるなるべし。

能力 法師の下人。

は憂き世の習ひなる。龍門原上の土に身はなるとも。屍の跡を思へたゞ。惜しみても惜しむべきは後名の嘲り。されば大國に千里を翔る虎は。一毛を惜しんで吹き來る風を含みて。其身をかへて死すとかや。日本の弓取は。其名を末代の家に惜しみ。一命輕するも。是れ皆明經に本文を思ふ心なり。身は一代名は末代。理や世の中は。電光朝露石の火の。あるにも有らぬ草の露。消ゆる境は夢なれや。今の我等が有様を。思ふも憂き命の。惜しからぬ身なれども。本望を遂ぐるまでと。頼む便や兄弟主従。ともにすこくと。髪をはやして祝言の。言の葉添ふる初元結。行方はめでたかるべしや。親孝行もかくばかり。さこそは草の陰に。我等を守り給ふらん。

ワキ詞 「如何に能力。祐成に申すべき事の候ひしをはたと忘れてある間。追付き申さうするにて有るぞ。汝は先へ行きて。何方

まで御出で候ふぞ留め申し候へ。
 狂言「シカク」。トモ詞「如何に申し候ふ。別當の是まで御出でにて候ふ。シテ詞「何別當の是まで御出でと申すか。此方へ御入りあれと申し候へ。トモ」畏つて候ふ。此方へ御入り候へ。シテ「扱是までは何の爲めに御出で候ふぞ。ワキ」さん候ふ是まで参る事餘の儀にあらず。箱王殿の御髪を。愚僧はやし申さん爲めに参りて候ふ。シテ「さん候ふ箱王元服したき由申し候ふ程に。是にて元服させて候ふ。ワキ」何と元服と候ふや。いでく元服祝はんと。別當に傳はる重代の太刀。伊豆權現の力を添へ。思ふ本望遂げ給へと。箱王殿に奉り。地「やがて祝ひの御酒一つ。すゝめ申せや人々と。同じく共に圓居し。酒宴をころゝ始めけれ。シテ「咲く頃の。梢時めく折に來て。地「烏帽子櫻の花を見ん。ワキ詞「如何に祐成。めでたき折りなれば一指御舞ひ候へ。地「烏

伊豆權現の兄弟の生まれし土地の神なれば云ふ。箱根權現の神力の上み之を添ふるの意。

咲く頃の云々。酒宴の興と云ふ歌。元服を祝ふ心なり。

是はしきり。標の名。元服の菊の名の云々。當時云ひつたへたる古歌なるべし。

前シテ 藤原 藤原 藤原 藤原
 合浦の玉と較人の玉との古事を取
 一後漢の孟嘗合浦の太守み遊
 る郡發賣を産せし海珠を
 を出た。交趾と境を比べ常
 商販を通じ糧食を賣羅す。先時
 の守なり。多し。合浦の
 知らず。珠やうやく求め。郡
 り谷者ハ道小銀死す。管官み
 未だ歳を踏えずしを求めしか。民
 病(苦)を踏えずしを求めしか。民
 未だ歳を踏えずしを求めしか。民
 通す。稱して神助と爲す」と見

帽子櫻の花を見ん。シテ「菊の名の。曾我の昔の秋の暮。地「萬代祝ふ心ころあれ。シテ「心言葉は人の情。地「徒に。朽ちぬる身は惜しむべし。名は残り有る代の跡の世語り。夢ならば覺めなん。現とも白眞弓。引きは返さじ富士の高嶺に。かならず名を上げて。跡の世語りと思し召さるべし。是ころ名殘の酒宴の戯むれ。師弟の情ぞ有り難き。

合 浦

作者未詳

ワキ詞「是ハ唐土合浦と申す所に住居する者にて候ふ。今日は日もうららに候ふ程に。浦に出で釣するを詠めばやと存じ候ふ。シテ一聲「わたづみの。うこどもいとや白波の。龍の都を出づるなり。詞「いかに此屋の内に主やまします。一夜の宿をかこし給へ。ワキ詞「日もはや暮れてとぎつるに。宿とは誰にてまよ

ね。吳都賦に「俗に傳ふ。鮫人水中より出で。曾て人家を穿て。鮫人走入りて。日給を穿る。鮫人走入りて。珠を出して。盤を満たす」と見えたり。海のもの。そこもいさや。龍宮のうこなり。水鶏の鳴聲の戸を敲くやうに聞ゆれ云ふ。この水鶏は比喩。事を却りて。そとより久方の。戸の明の意。生の小屋。睡し家を云ふ。床さぬれば。寐床の寒く空ゆ。我妹子が云々。龍馬樂み「妹が門を背ながり。行き過ぎかねて。我行かたの。雨やどりの空を。たりして。まかちらん。我をさし。とあるを用ふ。我妹子の。思ふ女を云ふ。ひち笠雨は。膝まげて。空の代り。又ひさか。此雨の詭言なり。又ひさか。此世ならぬ契なり。現世ばかり。うろく。魚を云ふ。こみ。など。命恩の。命を救はれし。思ふ。鮫人として。忘れし。思ひ。人家より。我れし。思ふ。を。禮拜する。意みかけて云ふ。

すぞ。シテ「よし誰なりとも其情に。一村雨の雨宿り。一夜の宿をかじ給へ。ワキ「たゞく水鶏の外面に立つや久方の。埴生の小屋に小雨ふる。シテ「床さぬれば。ワキ「我妹子が。地「ひち笠の。雨は降り來ぬ雨宿りの。頼む木陰かや。一樹の陰のやどりも。此世ならぬ契なり。一河の流れを汲みて知る。合浦の浦の江のほとり。鱗もなどや命恩の。其情をば知らざらん。ワキ詞「何と見申せども更には人間とは見に給はず候ふ。名を御なのり候へ。シテ「今は何をかつゝむべき。我は鮫人といへる魚の精なり。命をつがれまわらせし。報謝の爲めに來りたり。我泣く涙の露の玉。絶に鮫となるべきなり。地「鮫人涙に玉をなし。命恩を寶珠をなほも捧げて。合浦にも入らせ給へと。前なる渚の波の上に。入るよと見につるが。白魚となつて其まゝに。ひれふして失せにけり。あとひれふして失せにけり。

龍女の云々 八才の龍女の。寶珠を釋尊に奉りて成佛せし事法華經あり。身成就。其功徳によりて女子の身が男子に成就する事。奈落。地獄の事。うたかた。水の泡の事。

真如の玉の緒の。真如の心の明らかなる玉を譬へ。玉の緒の命の緒につなげたり。玉の緒の命の緒。未來の世を云ふ。玉はふたゝび。かの菩薩の古

後シテ「龍女は如意の寶珠を釋尊に捧げ。變成就の法をなし。地「奈落や奈落の底の白魚なれども。など命恩を報せざらんと。波立ちさわぎ汐うづまいて。うたかたの上を顯はれたる。シテ「是こそ真如の玉の緒の。地「是こそ真如の玉の緒の。壽命長遠息災延命の寶の玉は。當來までの二世の願ひも成就なるべし。是までなりや。織りつる綾の浦は合浦。玉はふたゝび歸る波の千秋萬歳の寶の玉は。合浦の浦に身をさまりける。

増補 謡曲通解 第六卷

大和田建樹 編

龍田 たつた

氏信作

前シテ 龍田姫
 後ハキテ 大和
 龍田の社由来と神徳とを述ぶる
 ために作れり。そもく龍田明
 神ハ男女二体ふて龍田龍田明
 と名づけ。風をつかさどり春ハ
 神なるを。奈良の都の頃。春ハ
 東より來ると云ふより。其
 東山子鎮座と給ふ保姫を春ハ
 神とし其西山子保姫を龍
 田姫とし其山子保姫を春ハ
 秋ハ紅葉の時節なれば。又紅葉
 をつかさどり給ふやうも云へ
 るなり。
 教への道も 佛の教へも明らか
 にお行へるの意。あきつ國ハ我
 國の異名なり。
 數ある法 佛教の説きかたハ經
 文ふより種々分れたれば云
 ふ。
 御經を納むる聖 國々の寺々ハ
 法華經を納めたる事。廻國修
 行の所作なれば云ふ。聖ハ僧の
 尊稱。
 南都 奈良の事。
 靈佛靈社 靈驗ある神社佛閣を
 云ふ。
 龍田越 奈良より河内へ越すむ

ワキ次第 教への道も秋津國。數ある法を納めん。詞 是は六十餘州
 に御經を納むる聖にて候ふ。我此程ハ南都に候ひて。靈佛靈社
 残りなく拜み廻りて候ふ。又是より龍田越にかゝり。河内の國
 へと急ぎ候ふ。道行 一ふるき名の。奈良の都を立ち出で。有明
 残る雲間の。西の大寺をよろよ見て。早暮れ過ぎし秋篠や。外
 山の紅葉名に残る。龍田の川に着きにけり。詞 急ぎ候ふ程に。
 是は早龍田川に着きて候ふ。此川を渡り明神に參らばやと思ひ
 候ふ。

和光同塵の云々 止る。和光同塵結縁之始。八相成道以前。神と云ふ。先づ佛の光を和光と云ふ。交へる衆生結縁のはじめ。八相の事。前卷の白雲を見るべし。此度の幣とりあへぬ。古今集の歌なり。今度の旅の君の御供。意せざりしかば。此手向山のもみぢの糸を御隨意みめし給へとの意。次の句も「もみぢをぬさの神心」とある。其意を云へる。同いかざしの紅葉は此明神のかさして舞ひ給ふものなれば。それみおして舞も同じかざしとなり。此文句より能の時。後シテの天冠ふ紅葉の枝を挿す事あり。幣をはへて。器を長く引く事なり。前のかんなぎのさまを云ふ。官廻りの度敷の重

淋しき社頭の御垣に。盛なる紅葉一本見えたり。是の御神木にて候ふか。シテ「さん候ふ當國三輪の明神の神木は杉なり。當社は紅色にめで給ふにより。紅葉を神木と崇め參らせ候ふ。ワキ「有り難や我國々を廻り。今日は又此御神に參る事の有り難さよ。和光同塵は結縁の始め。八相成道は利物の終り。地「下紅葉。塵に交はる神心。和光の影の色添へて。我等を守り給へや。殊更に此度は。幣取りあへぬ折なるに。心して吹け嵐。紅葉を幣の神心。神さび心も燈み渡る。龍田の嶺のほのかれて。川音も猶さえ増さる夕暮。いざ官廻り始めんとて。名におふ龍田山。同じかざしの神葉を。取りぐに少女子が。裳裾をはへて袖をかざし。運ぶ歩みの數々に。度重なると見る程に。不思議やな今までは。たゞ現と見につるが。我は誠は此神の。龍田姫は我なりと。名乗りもあへず御身より。光りを放ちて。紅の袖をうち

なるかたよ。

劫初 世界の始を云ふ。神代と云ふ同じ。劫の事。前卷白雲。紅葉の色も八葉の葉。紅葉を極。紅葉なる八葉の葉。比し。葉を刃を云ひかけて。その葉先の尖り。刃先の事。云ひなせるなり。御の座僧。平家物語み文。上人の事を「刃の座」と云へり。劫もて物を断ち切る如く行法の効。夜半の神燈。おのづから神の照。瀧祭の御神。伊勢の國あり。後世記み「瀧祭の神。官殿。葉字類抄み「瀧祭神社。大神宮の北の川邊あり。但し御殿な

神の非禮を受け給はず。論語朱子の註。神不と非禮。とあるを引く。神官を云ふ。

かつき。社壇の扉を押し開き。御殿に入らせ給ひけり。ワキ歌「神の御前に通夜をして。有りつる告を待たんとて。袖をかたしき臥しにけり。後シテ「神は非禮を受け給はず。水上清しや龍田の川。地「御殿しきりに鳴動して。宜禰が鼓も聲々に。シテ「有明の月燈の光り。地「和光同塵おのづから。光りも朱の玉垣かゝやきて。あらたに御神体顯はれたり。シテ「我劫初よりこのかた。此秋津洲に地をこめて。御代を守りて御矛を守護し。紅葉の色も八葉の葉。即ち矛の刃先なるべし。劍の験僧の法味に引かれて。夜半に神燈明らかなり。地「クリ「うもく瀧祭の御神とは。即ち當社の御事なり。シテ「昔し天祖の詔。地「末明らかなる御國とかや。シテサシ「然れば當國寶山に至り。地「天地治まる御代のためし。民安全に豊なるも。

謠曲通解

第六卷 龍田

五

の跡用事を含めて云へり。

矢橋の浦 豊後川の東岸なり。

憂き身を積む 柴を舟に積む
焚かぬ前より 柴の火を焦がれ
意の内 柴舟の波に漕がるの
山田 矢橋となりたり。

如渡得船 法華經の樂土品より
佛の慈悲を蒙る事
波場ふて船を得たる事
云ふ。

やと思ひ。唯今粟津が原へと急ぎ候ふ。道行「信濃路や。木曾の棧名にしろふ。其跡とふや道のへの。草の陰野の假枕。夜を重ねつゝ日を添へて。行けば程なく近江路や。矢橋の浦に着きにけり。

シテ一聲「世の業の。憂きを身に積む柴舟や。焚かぬ前より漕がるらん。ワキ詞「のうく其船に便船申さうのう。シテ詞「是は山田

矢橋の渡舟にてもなし。御覽候へ柴積みたる舟にて候ふ程に。便船は叶ひ候ふまじ。ワキ「此方も柴舟と見申して候へども。折

節渡りに舟もなし。出家の事にて候へば別の御利益に。舟を渡してたび給へ。シテ「實にもく出家の御身なれば。餘の人には

かはり給ふべし。實に御經にも如渡得船。ワキ「船待ち得たる旅行の暮。シテ「かゝるをりにも近江の海の。二人「矢橋を渡る船な

らば。うれは旅人の渡舟なり。地「是は又。浮世を渡る柴舟の。

みなれを 水に馴る、棹の意
拾遺集「大井川くだす後のみ
なれを、見馴れぬ人も、懐しかり
けり」とあり。

隨山王二十一社 比叡山の東
近江の滋賀郡にあり。二十一
社、境内なる大宮。二宮。三宮。
下八王子宮。客人。十神師。三宮。
事。聖女。新行。牛。小神師。
聖王子。岩。劍。大龍。
八王子 上の二十一社の内の一
戸津坂本 比叡山の東西の地。
王城の鬼門の守り。うしろの
方角(東北)へ鬼神懸置の集會す
る處なりとて。忌むことなれ
其地を山王とて。忌むことなれ
京都を守護し給ふ由なり。ゆ
て此方角を鬼の向ふ門口なり
かくみ。頭を虎の皮をまとい
み似せ。腰に虎の皮をまとい

ほされぬ袖も水馴棹の。見馴れぬ人なれど。法の人にてまじま
せば。船をばいかで惜しむべき。とくく召され候へ。

ワキ詞「如何に船頭殿に申すべき事の候ふ。見に渡りたる浦山は
皆名所にて候ふらん御教へ候へ。シテ詞「さん候ふ皆名所にて

候ふ。御尋ね候へ教へ申し候ふべし。ワキ「まづ向ひに當つて大
山の見にて候ふは比叡山候ふか。シテ「さん候ふあれこら比叡山

にて候へ。麓に山王二十一社。茂りたる峯は八王子。戸津坂本
の人家まで残りなく見にて候ふ。ワキ「扱あの比叡山は。王城よ

り良に當つて候ふよのう。シテ「中々の事うれ我山は。王城の鬼
門を守り。惡魔を拂ふのみならず。一佛乗の嶺と申すは。傳へ

聞く驚の御山を象れり。又天台山と號するは。震旦の四明の洞
をうつせり。傳教大師桓武天皇と御心を一つにして。延暦年中
の御草創。我立つ袖と詠し給ひし。根本中堂の山上まで。残り

内兜 ぬいぶとの裏面を云ふ。

平が。行方如何にと遠方の。跡を見返り給へば。何處より
来りけん。今ぞ命は櫛弓の。矢一つ来つて。内兜にからりと
入る。痛手にてまじませば。たまりもあへず馬上より。遠近の
土となる。處はこゝぞ我よりも。主君の御跡を。まづ吊らひて
たび給へ。

「實に痛はしき物語り。兼平の御最期は。何とかならせ給
ひける。兼平はかくうとも。知らで戦ふ其隙にも。御最期
の御供を。心にかくるばかりなり。扱其後に思はずも。敵の
方に聲立て。木曾殿討たれ給ひぬと。呼ばる聲を聞
きしより。今は何をか期すべきと。思ひ定めて兼平へ。

「是が最期の高言と。鑑ふんばり。大音上げ。木曾殿
の御内に今井の四郎。兼平と名乗りかけて。大勢に割つて入
れば。本より一騎當千の。秘術を顯はし大勢を。栗津の汀に追

まくり切り 蜘蛛手 十文字
いづれも劍注の名。

つなぬかれ つかぬかれも同じ
劍首を貫きとほす事。

前シテ 里女 和泉式部
一選上人 熊野権現の御示現みより
時願寺 和泉式部の御禮あらはれて
事 當寺の縁起み本づきて作
れり。一筋の道も一聲の念
佛の事みかけて云ふ。一聲の念
一選時宗と云ふ宗旨を起し。相
州藤澤の遊行寺を開きし人な
り。正應二年寂す。
三熊野 紀州の熊野権現。
證誠殿 熊野本宮の名。阿彌陀
六十萬人 此事の國阿彌陀
と云ふ。一選上人の後宇多
院の御宇建治二年丙子三月廿五日
日。熊野證誠殿に詣り。三七日
念佛す。衆生利益の結縁を普く
弘通せん事を祈り給ひし。普く
現表冠正しく上人み對して七百

つつめて。磯打つ波のまくり切り。蜘蛛手十文字よ。打ち破りか
け通つて。其後自害の手本よとて。太刀をくはへつ。逆さま
に落ちて。つなぬかれ失せにけり。兼平が最後の仕儀。目を驚
かす有様なり。

誓願寺

せいがんじ

元清作

ワキ次第 教への道も一聲の。御法を四方に弘めん。是は念佛の
行者一遍と申す聖にて候ふ。我此度三熊野に参り。一七日参籠
申し。證誠殿に通夜申して候へば。あらたに靈夢を蒙りて候ふ。
六十萬人決定往生の御札を。普く國土に弘めよとの靈夢にまか
せ。まづ都へと志して候ふ。道行 彌陀頼む。願ひも三つの御山
を。今日立ち出づる旅衣。紀の關守が手束弓。出で入る日數重
なりて。時もこそあれ春の頃。花の都に着きにけり。

人の歌なり。至誠心深心廻向。之を浄土の三心と云ふ。觀經云「若し衆生ありて彼(浄土)國に生まれんと願ふものハ、三種の心を發生せしめ、即ち往生せん。一ハ至誠心、二ハ深心、三ハ廻向發願心」とあり。發願の鉢とつづけたるハ、佛が祈願する時打ち鳴らすを云ふなり。

五障の雲 女ハ五箇條の障有るを云ふ。佛ならぬも其障の二つなれば雲を穿てて云へり。
二世安樂の國 來世生まるべき浄土を云ふ。

涼しき道 地獄ハ火中の地。極樂浄土ハ水中の地なれば云ふ。
利益無量罪 念佛の功德にて無量の罪ある身をも救ひあげ利益するの意。
餘經の後の世 末の世なりて一切の經文みな盡きはつたけれど、阿彌陀經一つハいつまでも残り居らんとす。無量壽八萬諸聖教皆阿彌陀佛 釋迦

かりけり。南無阿彌陀佛の聲ばかり。至誠心深心廻向。發願の鉦の聲耳に染みて。有り難や誠に妙なる此の教へ十聲一聲數わかで。悟りをも迷ひをも。迎へ給ふ有り難き。さる程に夕陽雲にうつろひて。西にかげろふ夕月の。夜の念佛を急がん。夜念佛をいざや急がん。
ロソギ地 早更け行くや夜念佛の。聽候の眠り覺まさんと。鉦うち鳴らし念佛す。シテ「有り難や五障の雲のかゝる身を。助け給はば此世より。二世安樂の國に早。生まれ行かんうれしき。地實に安樂の國なれや。安く生まるゝ蓮葉の臺の縁うまことなる。シテ「有り難や。さぞなはじめて彌陀の國。涼しき道う頼もしき。地」頼むうまこと此教へ。或は利益無量罪。シテ「又ハ餘經の後の世も。地」彌陀一教と。シテ「聞く物を。地」有り難や。八萬諸聖教。皆是阿彌陀佛なるべし。此御本尊も上人も。唯同じ御誓願寺う

一代中の説教ハ數多くあれども、皆念佛の一聲ふくもるとの意。唯同じ御誓願寺と。本尊の阿彌陀も一週上人も。共に衆生を浄土に導かんとの同じ誓ひと云ふ寺の名にかけて云ふ。

和泉式部 是れゆゑ和泉守道貞の妻のちハ藤原保昌の妻なり。長和三年に死す。上東門院の女官にて歌の名譽高し。直遇ハ出家なればと云ふ程の意。式部尼身なり。此寺に云々。此寺と名づけて此寺に住み。專意と名づけて此寺に終り。春の音の候も「音も秋や通ふた文字より非ぬか。春も秋や通ふた文字より非ぬか。あしき。秋の通ふた云々。聞かえがたけれ中務の歌ハ「下くする水も秋こそ通ふた」とあり。

和泉式部 是れゆゑ和泉守道貞の妻のちハ藤原保昌の妻なり。長和三年に死す。上東門院の女官にて歌の名譽高し。直遇ハ出家なればと云ふ程の意。式部尼身なり。此寺に云々。此寺と名づけて此寺に住み。專意と名づけて此寺に終り。春の音の候も「音も秋や通ふた文字より非ぬか。春も秋や通ふた文字より非ぬか。あしき。秋の通ふた云々。聞かえがたけれ中務の歌ハ「下くする水も秋こそ通ふた」とあり。

ど。佛と上人を。一体に拜み申すなり。
シテ詞「いかに申し候ふ。誓願寺と打ちたる額をのけ。上人の御手跡にて。六字の名號になして賜はり候へ。ワキ」是は不思議なる事を承り候ふ物かな。昔より誓願寺と打ちたる額をのけ。六字の名號になすべき事。思ひもよらぬ事にて候ふ。シテ「いや是も御本尊の御告と思し召せ。ワキ」そも御本尊の御告とは。御身は何處に住む人ぞ。シテ「妾が住家はあの石塔にて候ふ。ワキ」不思議やなあの石塔は。和泉式部の御墓どころ聞きつるに。御住家とは不審なり。シテ「さのみな不審し給ひうよ。我も昔は此寺に。値遇の有れば澄む水の。春にも秋や通ふらじ。地」結ぶ泉の自らが。名を流さんも恥づかしや。よしろれとても上人よ。わが偽りは亡き跡に。和泉式部は我うとて。石塔の石の火の。光りと共に失せにけり。

石の火の光り。石を打ちて出でたる火を云ふ。人間界のはかなきなり。

二十五の菩薩摩訶薩の十住生經云々。佛の光を和らげて神となり。人間界を和らげ給ふを云ふ。今此誓願寺の佛を春日大明神が作りに給ふより。神佛不二なる理を述ぶるなり。
一身分身。もと一神も佛も一體なるが。假んば身を兩種に分ちあらはす事。假んば身を兩種に分ちあらはす事。假んば身を兩種に分ちあらはす事。假んば身を兩種に分ちあらはす事。
来迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。
來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。
來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。

佛の光を和らげて神となり。人間界を和らげ給ふを云ふ。今此誓願寺の佛を春日大明神が作りに給ふより。神佛不二なる理を述ぶるなり。
一身分身。もと一神も佛も一體なるが。假んば身を兩種に分ちあらはす事。假んば身を兩種に分ちあらはす事。假んば身を兩種に分ちあらはす事。假んば身を兩種に分ちあらはす事。
来迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。
来迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。
来迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。來迎。此世より迎へて來る事。

ワキ詞「佛説に任せ誓願寺と打ちたる額をのけ。六字の名號を書き付けて。佛前に移し奉れば。歌「不思議や異香薫じつ」。花降り下り音楽の。聲する事のあらたさよ。是に付けても稱名の。心一つを頼みつ。鉦打ち鳴らし同音に。南無阿彌陀佛彌陀如來。後シテ「あら有り難の額の名號やな。末世の衆生濟度の爲め。佛の御名を顯はして。佛前に移す有り難さよ。我も假なる夢の世に。和泉式部といはれし身の。佛果を得るや極樂の。歌舞の菩薩となりたるなり。二十五の。地菩薩聖衆の御法に。紫雲たなびく夕日影。シテ「常の燈影清く。地」さながらこそ極樂世界に。生まれけるかど有り難さよ。

地「うもく當寺誓願寺と申し奉るは。天智天皇の御願。御本尊は慈悲萬行の大菩薩。春日の明神の御作とかや。シテサシ「神と云ひ佛と云ひ。唯是れ水波の隔てなり。地」然るに和光の影廣く。

一體分身顯はれて。衆生濟度の御本尊たり。シテ「されば毎日一度は。地」西方淨土に通ひ給ひて。來迎引攝の。誓ひを顯はしおはします。グセ「笙歌遙かに聞てゆ。孤雲の上なれや。聖衆來迎す。落日の前とかや。昔在靈山の。御名は法華一佛。今西方の彌陀如來。慈眼視衆生顯はれて。娑婆示現觀世音。三世利益同一體。有り難や我等が爲めの悲願なり。シテ「若我成佛の。光りを受くる世の人の。地」我力には行き難き。御法の御舟の水馴棹。さよでも渡る彼岸に。至りくけて樂しみを。極むる國の道なれや。十惡八邪の。迷ひの雲も空晴れ。眞如の月の西方も。こゝを去る事遠からず。唯心の淨土とは。此誓願寺を拜むなり。シテ「歌舞の菩薩もさまぐの。地」佛事をなせる心かな。シテ「ひどり猶。佛の御名を尋ね見ん。地」各歸る法の場人の。シテ「實にも妙なる稱名の數々。地」虚空に響くは。シテ「音楽の聲。地」異香

十和解して云ふ。
 邪淫。四。邪淫。五。六。七。八。九。十。十一。十二。十三。十四。十五。十六。十七。十八。十九。二十。二十一。二十二。二十三。二十四。二十五。二十六。二十七。二十八。二十九。三十。三十一。三十二。三十三。三十四。三十五。三十六。三十七。三十八。三十九。四十。四十一。四十二。四十三。四十四。四十五。四十六。四十七。四十八。四十九。五十。五十一。五十二。五十三。五十四。五十五。五十六。五十七。五十八。五十九。六十。六十一。六十二。六十三。六十四。六十五。六十六。六十七。六十八。六十九。七十。七十一。七十二。七十三。七十四。七十五。七十六。七十七。七十八。七十九。八十。八十一。八十二。八十三。八十四。八十五。八十六。八十七。八十八。八十九。九十。九十一。九十二。九十三。九十四。九十五。九十六。九十七。九十八。九十九。一百。

唯心の浄土。浄土の心の中ありとの意。
 歌の神。浄土にて歌を詠むるを業とせる菩薩を云ふ。
 ひたりなほ佛の御名をたづねんちの意。
 神をかへすや。歌の神とて廻雪の曲と云ふ名もよる。
 奇蹟。不思議なる瑞相の意。

ツレ。横川小栗山伏。
 ツレ。大臣。

源氏物語の巻。光源氏の皇方
 あり。其物のけり。六條御
 息所。怨念なるよし。昔より
 註し來りたれば。此詠もこれ
 より作られたるなり。
 朱雀院。歴史上よりあれたる
 帝。非ず。源氏物語中の御
 名と見るべし。桐葉帝の皇子に
 て光源氏の御兄にあたり。に
 ものいけ。生靈死靈また悪鬼な
 し。病のすを云ふ。人かつきて極ま
 梓の上手。神子の梓弓を鳴らし
 其上手なるを云ふ。生靈か死靈か
 生靈死靈の間を云ふ。

薰じて。シテ「花降る雪の。袖をかへすや返すくも。貴き上人の利益かなど。菩薩聖祇は面々に。御堂に打てる六字の額を。皆一同に禮し結ふは。あらたなりける奇瑞かな。」

葵上

あふひのうへ

氏信作

大臣。是の朱雀院に仕へ奉る臣下なり。扱も左大臣の御息女。葵上の御物の氣。以ての外に御座候ふ程に。貴僧高僧を請じ申され。大法秘法醫療さまくの御事にて候へども。更に其しるしなし。こゝに照日の神子とて隠れなき梓の上手の候ふを召して。生靈死靈の間を。梓に掛けさせ申せとの御事にて候ふ程に。此由申し付けばやと存じ候ふ。やがて梓に御掛け候へ。ミコ「天

天の所を判然たらしめんとての意
 句。六根とは眼耳鼻舌心意の六
 より云ふ。
 本紀と云ふ書。先代舊事詠歌
 よりが。今が。長瀬の
 鹿毛の駒の手綱ゆりかけ。一
 び寄するよし。福記。見
 三つの車。羊車。法華經の譬
 品。出でたる事。或長者の
 家。火車。出で來たれ。早く逃げ
 遊。心を染めて出でんとせむ
 羊。長者の方便も。まら。云
 羊。此。火。引。か。れて。や
 佛。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 山。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 出。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 知。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 夕。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 車。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 御。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 上。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 意。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 らん。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 爲。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 此。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 我。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 浮。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 世。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 牛。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 車。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 出。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 詞。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 因。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 果。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 應。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 報。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 謝。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 罪。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 業。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 縁。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 起。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 増。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 減。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 損。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 益。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 衰。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 榮。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 枯。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 盛。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 衰。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 榮。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 枯。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 盛。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 衰。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 榮。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 枯。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。
 盛。此。火。宅。を。出。で。た。り。と。なり。

清淨地清淨。内外清淨六根清淨。より人は。今寄りくる長濱の蘆毛の駒に手綱ゆりかけ。シテ一聲「三つの車に法の道。火宅の門をや出でぬらん。夕顔の宿の破れ車。やる方なきころ悲しけれ。次第「浮世は牛の小車の。廻るや報いなるらん。サシ「凡ろ輪廻は車の輪の如く。六趣四生を出でやらず。人間の不定芭蕉泡沫の世の習ひ。昨日の花は今日の日。驚かぬころ愚なれ。身の憂きに人の恨みの猶添ひて。念れもやらぬ我思ひ。せめてや暫し慰むと。梓の弓に怨靈の。是まで顯はれ出でたるなり。歌「あら恥づかしや今とて。忍び車の我姿。月をば詠め明かすとも。月には見じかけらふの。梓の月の末弭に。立ち寄り憂きを語らん。シテ「梓の弓の音は何處ぞ。ニコ「東屋の母屋の妻戸に居たれども。シテ「姿なければ訪ふ人もなし。シテ「不思議やな誰とも見え

箱根へ人を
る寺なれば。別當お告げんが爲
めなり。

水莖の
筆跡の事。
筆の立てども云々。母の哀しさ
ふ文かく事も出来かねるの意。

別行。特別お祈禱など執行する
百座の護摩。護摩焚く佛事を百
度お誦したる事。

藤波のかゝれる木々の云々。紫
箱の花の用ふる詞なれば。常
兄弟のゆかりの人を討ち来た
る意なるべし。嵐は助宗とも
車。

八日の夜。井手の館へ忍び入り。易々と敵を討ち。御身も即座
に討たれ給ひて候ふ。又御形見の物を持ちて参りて候ふ。是々
御覽候へ。母「祐經を討つ程ならば。何とて落ち延びざりけるぞ。
敵を討つは父が爲め。母をば思はぬ子供の形見。恨めしや。
鬼王「實にく御歎き尤にて候ふ。先づ箱根へ人を御登せ候へ。
母「箱根へと聞けば思ひ出だしたり。先づく久上の寺へ参り候
へ。團三郎「實にく禪師の御事よのう。たどひ御身は捨人なり
ども。母「如何なる目をも。團三郎「水莖の。地「筆の立てども覺は
ねば。涙ながらにかきくれて。久上の寺に送りけり。
シテ詞「是は久上の禪師にて候ふ。我此間別行の子細候ふ間。百
座の護摩を焼かばやと存じ候ふ。
一同一聲「藤波のかゝれる木々の梢をば。嵐や寄せて散らすらん。
ワキ詞「是は伊藤の九郎助宗なり。扱も過ぎに二十八日の夜。

其弟に 曾我兄弟のまた弟なり
其養子として 助宗が養子と實
に受けてなり。 君聞こし召し 曾我の弟を養子
みせし事なり。

とうく
の意。 とくくなり。速み
御名をあげて 久上禪師を討ち
取りたりとの功名を立てさせ申
墨染の下み 僧衣の下みなり

忍辱の鏡 武士の着るべき鏡
法の教もて身を堅むるなり。佛
討つべき様こそ 其威お助宗の
恐れたる様。

曾我兄弟の者。井手の館に忍び入り。親の敵を討ち。其身も即
座に討たれて候ふ。其弟に久上の禪師と申して候ふを。幼少の
時より某養子として出家させ申し候ふを。如何なる者の申し候
ふやらん。君聞こし召し及ばせ給ひ。急ぎ扱め捕つて参らせよ
どの御事にて候ふ程に。唯今久上の寺に押し寄せ候ふ。是は早
久上の寺にて候ふ。まづく案内を請はうするにて候ふ。如何
に案内申し候ふ。伊藤の九郎助宗が参りたり。急いで門を開き
候へ。シテ「助宗は何の爲めに御出でにて候ふぞ。ワキ「鎌倉殿よ
り扱め捕つて参れどの御事なり。とうく出で候へ。シテ「や。
助宗は某が討手の爲めな。よしく尋常に討死し。御名を擧げ
て参らせん。抑是は河津の三郎が末の子に。久上の禪師。地「墨
染の下に忍辱の鏡。悪魔降伏の劔。三尺の長刀指しかざしたり。
討つべき様こそなかりけれ。

髪はけけ 髪を掛けたる様
肩より斜に切る事。法師故に此
切方を用ひたりといふ。此の
たとへば沙門の体として云々
体なりとして正當防禦をせざる
べからざる意。

打物 太刀長刀の類を云ふ。

羅摩の壇上より 祈禱を執行し居
たる場所。 元文の詞。す
なはち此咒文を稱へつゝ自設せ
し事を劍の文字に云ひかけたる
なり。
つなぬかれ 實ぬがれも同じ。
劍ふて身を刺し通す事。
禪盤 祈禱する時登る高座を
云ふ。

前シテ 里女
後シテ 佐保姫
ワキ 藤原俊家
佐保山は奈良の都の東にありて。
其山の神は春をつかさどるよし

地「心得給へ助宗と。城戸を開いて切つて出づれば。手許に近づきあやまちすな。射取れや射取れ梓弓。疋田の小三郎が進んでかゝるを。長刀取り延べ。法師の切るとして袈裟がけなり。南無佛無慙やな。シテ「たとへば沙門の体とて。地「思ひゆるすも事にこそよれ。唯一命の勝負をせんと。狩野の源六其外若武者。我もくどかゝりけれども。禪師は騒がず打物合はせ。こゝやかしてに切り立てられ。門前の外まで引き退けば。是までなりと長刀投げ捨て。護摩の壇上に走り上り。御本尊に向ひて。あびらうんけんにつなぬかれ。禮盤の上より落ちけるを。生捕にせんとて利劍を奪ひ。鎌倉へこそ上せけれ。鎌倉へこそは上せけれ。

佐保山

さほやま

元清作

古來歌によみ來れるに依りて作
れるなり。此巻の初に出だせる
龍田とくちへ見て味ふべし。
立つ旅衣 先づ始めに衣の文字を
出だす。次々に至り衣の文字を
藤原の俊家 大宮右大臣と云は
る。白河天皇の頃の人。古くは
宮右大臣殿上人の時南殿の櫻
かきなる頃。上伏しより未だ裝
束も改めずして御階のもとにて
一人花をながめられたり。霞み
知らず心澄みければ。高欄によ
りかゝりて扇を拍子に打ちて候
人の曲を返す拍子に打ちて候
多政方が陳の宿直つとめて候
に。進み出で、地久破(華子)も
仕うまつりたり。花田の符
衣袴を着たりける。舞ひはて
て入りける時。櫻人を改めて候
山(曲名)をうたはれければ。歌
方また立ちかへりて同じく意
下枝を折りて後をどりて。花の
ひたりけり。いみじくやさし
りける事なり。とあり。これら
の風流なる物語に依りて。此優
美なる佐保姫の相手には撰ばれ
しなるべし。
氏神 春日明神とて祭られ給
ふ。天兒屋根命は藤原氏の遠祖な
れば云ふ。
白雲の衣かりがね 古今集に
「北へ行く雁が鳴くなる白雲の
道行き衣雁(借)金なくなばに夜
を寒み衣雁(借)金なくなばに夜
の下葉もうつろひにけり」など

ワキ次第 立つ旅衣春とてや。心ものげけかるらん。詞「抑是ハ藤原の俊家とは我事なり。扱も和州春日の明神ハ。氏の神にて御座候ふ間。參詣申さばやと存じ。只今和州に下向つかまつり候ふ。道行「天の戸の。明け行く空の朝ぼらけ。霞を分けて白雲の。衣雁金こしかたを。よそに南の都路や。春日の里に着きけり。詞「急ぎ候ふ程に。是ははや春日の社に着きて候ふ。又あの佐保山に何とやらん衣のやうに見えて候ふ。立ち越に見ばやと存じ候ふ。シテツレ一聲「日にみがき。風にさらせる玉衣の。晴るゝ日影もにほふなり。ツレ「佐保山姫の雲の袖。みどりもなびくけしきかな。シテサシ「おもしろや名所はさまぐ多けれども。分けて誓ひも影たかき。二人「天の兒屋根の神代より。誓ひの末も明らかき。月に照りうふ春日山。弘き恵みの有り難さよ。殊更に時もあひ

あるを用ひてつゞけたり。鹿雁
は南より北へ行く事なるに我は
北より南へ行く事なるに我は
よるに南の都路や。南の都は奈
玉衣玉の如く美しき衣の意。
みどりもなびく雲と共山の
月に照りうよ。春日を「はるの
ひ」の意に付けて云ふ。
東を知る鹿島野や。鹿島野は
春日野の異名。春日の日の東より
出づると云ふ。東國常陸の國
の御島に云ひかけたるなり。
緑も同じ。神徳の平等なるを若
草の山。春日山の北に「つゞき
若かり。衣の袖に付きたるツ
露かけて。衣の袖に付きたるツ
玉葛を天より降る露に付けて云
か。林詞とす。年の意を來るに
年の緒。年の長さを緒にたとへ
て云ふ。
霞の衣ぬきうすき云々。ぬきは
横糸なり。古今集に「山姫の霞
の衣ぬきを薄み山風ふこそ亂る
べらなれ」とあり。

あふ春の日の。東を知るも鹿島野や。緑も同じ若草の。山は南
の都の空。曇らぬ神の時代かな。歌「こはとりわき佐保山の。
其山姫の衣ほす。袖白妙の露かけて。玉葛來る年の緒の春毎に。
霞の衣薄き。糸の亂れも天つ日の。のどけき色に染めなして。
猶白衣のうらゝなる。空や雲間にほふらん。
ワキ詞「我佐保山に登り。四方のけしきを詠むる處に。いとなま
めきたる女性。妙なる衣をさらせるけしき見えたり。うも御身
は如何なる人ぞ。シテ詞「さん候ふ是は此佐保山のあたりに住む
女にて候ふ。又これなる衣は所から。よじありてさらせる衣な
り。立ちよりてよくく御覽候へ。ワキ「實に／＼此衣をよりて
見れば。銀色かゝやき異香薫じ。誠に妙なる白衣の。よくく
見れば縫ひめもなし。こはうも如何なる衣やらん。シテ「げによ
く御覽じとがめて候ふ。是は人間の織る衣にあらず。或る歌に。

裁ち縫はぬ衣は誰も着ぬものを。
山姫の布をさとして何みせんと
ならんのか。

裁ち縫はぬ衣は誰も着ぬものを。
山姫の布をさとして何みせんと
ならんのか。

裁ち縫はぬ衣きし人もなき物を。何山姫の布さらすらんと。か
やうに讀みしも此衣なり。ツレ「もとより山に住む人の。人間の
交はりなき故に。かゝる衣も世の常ならず。シテ「然れば仙人の
衣をば。二人「たつこともなく縫ふ事も。なき世のためしは稀に
だに。いさ白衣の羽袖の色。妙なりと御覽候へとよ。ワキ「實に
裁ち縫はぬ衣の事。仙人の衣と聞きとなり。扱は仙境にや入り
ぬらん。然らば御身は仙女にてましますか。シテ「いや仙女まで
はなけれども。所は佐保の山人なれば。もし佐保姫とや申すべ
き。ワキ「不思議や扱は佐保姫の。霞の衣と讀みたれば。此裁ち
縫はぬ薄衣も。もしは霞の衣やらん。シテ「そも裁ち縫はぬ衣な
ればとて。ワキ「霞の衣かと尋ねし。シテ「あら謂なの御言葉や。
地「裁ち縫はぬ。衣ほせばとて佐保姫の。袖も緑の糸はへて。縫
ふ事はなくとも。霞の衣ならば。裁つことはなごかなかるべき。

たが爲めの錦なれば云々
 今集の歌。誰の爲めか秘蔵せる
 錦なれば。秋深ハ佐保山を立ち
 かくして其有處を見せぬならん
 の意。

青よし 奈良の枕詞。「よし
 青よし」と取れて云々。

慈悲万行の 春日明神の佛名を

是は裁ちもせず縫ひもせず。まして糸もて織る事も。嵐不有になび
 く羽衣の。袖もつまもにほやかた。うらゝなる日にとらすなり。
 うらゝなる日にやさらさん。

地クリ 「夫れ天地開闢の昔より。山海草木に至るまで。萬物悉く
 成佛して。皆靈験の神所たり。シテサシ」とりわき四季を司どる
 事。まづ春を守る神といつば。地 此山姫の神徳として。草木森
 羅萬象まで。御影の縁みちみり。然れば所の名にしおふ。佐
 保の山家の恵み深く。千秋萬徳の春を得て。佐保山姫と顯はれ
 給ふ。クセ「たが爲めの。錦なればか秋露の。佐保の山邊を立ち
 かくすらんと。詠めけるも此山の。妙なる秋のけしきなり。か
 やうに治まれる四つの時。いく年々を送りけん。花の春。紅葉
 の秋の夕時雨。古きを守るためしまでも。あふぐや青によし。
 奈良の代々久しき。殊更此山ハ。春の日影もようならで。慈

慈悲萬行大菩薩と云ふ。

いづき 崇敬するの意。
 時つ風 潮の満つる時吹く風
 四海にたつむ 衆み込みて波を
 起させぬの意。
 萬歳をよばふ 三笠山を吹く風
 の音も祝意を表するの意。
 萬山ものどか 佐保山より立ち
 初めたる春色の萬山を及ぼすを
 云ふ。

古歌
 「同事も思ひ捨てたる身や安
 けなむをよむの世なれ
 びて矢を投ぐる間の如く速かな
 るを云へり。但し「」の横線な
 るを「」なりとの説もあり。
 衣手 袖の事。

悲萬行の神徳の。弘き誓ひの海山も。皆安全の國とかや。シテ
 「ともく」蘆原の國の神。地 代々に昔き誓ひにも。御名はこと
 に久堅の。天の兒屋根の其かみ。此秋津洲の主として。皇孫を
 いづき給ひしより。八島に治まる時つ風。四海にたむ波の聲。
 萬歳をよばふ三笠山。御影もさすや川竹の。佐保の山邊の春の
 色。萬山ものどかなりけり。
 ロンギ地 實にや誓ひものどかなる。佐保の山姫あらたなる。言
 葉をかはすうれしきよ。シテ「暫く待たせ給ふべし。とても山路
 のおついでに。佐保の山の神祭。月の夜遊をはじめん。地 月の
 夜遊とさくよりも。東の嶺に光さし。シテ「南を見れば春日野の。
 地 三笠の森に花降りて。シテ「こゝにたなびく。地 山の名の。さ
 保 をなぐるまの夢の夜の。程を待たせ給へやと。夕霞の衣手に。
 立ち隠れつゝ失せよけり。立ち隠れ失せにけるとかや。

佐保山のは、そのみどり
 その紅葉を珍重する木の名。今
 古今集に「秋の今朝の紅葉よ立ち
 ても見ん」佐保山のは、その色
 けりかな」などありて此山に此
 木をよみ合はせたるが多し。見よ
 春日野の飛火の野守いで、見よ
 古今集の歌。飛火野の春日野の
 影さす月の。月の影（雲）とつ
 けたり。「さす」ハ衆の経語。
 藤山 春日野の異名なるべし。
 新古今集に春日山都の南し
 が思ふ北の藤波春み逢ふとハ
 などよめり。
 二月初申 二月と十一月との
 上の申の日を以て春日明神相例
 の祭日と定められし事。自撰儀
 式延喜式等に見ゆ。
 茶とよむまで 籠より舞まで参
 詣人群集して其聲響きわたるま
 での意。
 いたとままつれや 神徳を感
 仰し事。舞の袖を頭みかづく
 意。
 水屋の御影云々 春日山ハ三峰
 より成り立つ。其一を本宮峰と
 云ふ。一名は浮雲の峯。其二を
 水屋峰と云ふ。一名ハ羽負の峯。
 其三を高峯と云ふ。一名ハ香山。
 これなり。「羽の羽袖」と云へる
 へるなりん。
 山かづら 山草などを集み懸く
 る事。舞人などのする事なり。
 月の夜聲 月夜ハ神樂歌をうた

ワキ歌 佐保山の。柞のみどりかたしきて。こゝに假寐の枕より。
 音楽聞こえ花降りて。月春の夜有り難き。
 後シテ 春日野の。飛火の野守いで見よ。影さす月の三笠山。
 薄雲かゝる藤山の。わかむらさきの名にしおふ。木々の梢もの
 どかなる。春の日影ののどげさよ。二月の。初申なれや春日
 山。シテ 峯とよむまで。いたとままつれや佐保姫の。袖もかさ
 しの玉かづら。地 かけて祈る春日野の。シテ 若草の山。水屋
 の御影。地 みどりもめぐみも春たつ雲の。羽袖をかへすや山か
 づら。
 ロンギ地 神樂の鼓春を得て。月の夜聲も澄み渡る。心をのぶる
 有り難や。シテ こや佐保姫の小夜神樂。時の鼓の數々。神歌
 の一節。佐保の歌とや云ひてまし。地 うれの遊女のうたふなる。
 聲も妙なり天少女。シテ 天のさくめがいにしへを。地 思ひ出づ

時の鼓の。神樂の鼓の聲もて時
 刻の数を打つこと。うまて數々
 つとけたり。
 佐保の歌とや 遊女などの舟み
 乗りてうたふ歌を梓の歌と云へ
 る。佐保姫のうたふ歌も同じく
 「さほのうた」と呼びてよからん
 との意。
 聲も妙なり 此句の前ハ「是ハ」
 天のさくめが。天人の名。万葉
 集に「久方の天のさくめが岩舟
 フはてし高津ハあせみけるかも
 月の御舟の。空を海ふけるかも
 みなれを。水みふる。棹の意。
 雨つちくれを動かさて 雨ハ土を
 動かして流さぬほどと通度ふ降りたる事。

るや。シテ 久堅の。地 月の御舟のみなれ棹山姫の袖。かへす霞
 の薄衣。裁ち縫はねども白糸の。來る春なれや永き日に。雨つ
 ちくれを動かさて。世を守る佐保姫の。めでたきためしなるべ
 しや。めでたきためしなるべし。

通盛

みちもり

井阿彌作

前シテ 瀧女
 老女
 平過盛
 小幸相局
 阿波
 一谷の合戦討死せし通盛の亡
 魂。小幸相局と共みちの來
 事を作れり。經文の功ハを頼
 興り深かりし人にて。其討過
 音づれを聞き阿波海に入水し
 終りしこと盛衰引くべし。見
 ゆ。其妻を捕みて引くべし。日
 く。越前の三女通盛ハ小幸相
 つげねと申す女房をが相具相
 ひける。かの局と申すハ故刑部
 卿實賢の女。上西門院の女房
 口時員と云ふものあり。一谷の
 合戦みちもりとされたりけるが

ワキ詞 是ハ阿波の鳴門に一夏を送る僧にて候ふ。扱も此浦ハ平
 家の一門はて給ひたる所なれば痛ハしく存じ。毎夜此磯邊に出
 で、御經を讀み奉り候ふ。唯今も出で、吊らひ申さばやと思
 ひ候ふ。歌 磯山に。暫し岩根の待つ程に。誰が夜舟とは白波に。
 楫音ばかり鳴門の。浦静かなる今宵かな。

頼もしくおぼゆるの意。三つの車。法華經中なる詞。此葉上の註を見るべし。この「願ひも満つ」と「車の足」との小宰相の局こそ「はて給ひたれ」の詞を發して呼びかゝるやうな云ふ。

このころは。淡路島の内と云ひ傳へたり。

通盛 教盛の子にて清盛の甥。

沈むべき身の云々 身の沈まんとする爲め先づ涙の浮むならんとせり。浮沈の文字もてあや西へと問へば 我行くべき西方淨土を尋ねるなり。

にてはて給ひて候ふぞ。委しく御物語り候へ。シテ詞「仰せの如く或は討たれ。又は海にも沈み給ひて候ふ。中にも小宰相の局ころ。や。もろ共に御物語り候へ。」

ツレ「さる程に平家の一門。馬上を改め。海士の小船に乗り移り。月日棹さす時もあり。シテサシ「こゝだれも都の遠き須磨の浦。

二人「思はぬ歌に落とされて。實に名を惜しむ武士の。磯敷蘆島や淡路瀉。阿波の鳴門に着きにけり。ツレ「さる程に小宰相の局乳母を近付け。二人「如何に何とか思ふ。我頼もしき人々へ都に留まり。通盛は討たれぬ。誰を頼みてながらふべき。此海に沈まんとて。主従泣くく手を取り組み舟端に臨み。ツレ「さる程に

兼ねて浮むらん。西はと問へば月の入る。其方も見えす大方の。春の夜や霞むらん。涙も共に曇らん。乳母泣くく取り付き

て。此時の物思ひ。君一人に限らず。思召し止り給へど。御衣の袖に取り付くを。振り切り海に入るを見て。老人も同じ満潮の。底の水屑となりけり。

ワキ歌「此八軸の誓ひにて。一人も洩らさじの。方便品を讀誦する。ツキ「如我昔所願。

後シテ「今者已満足。ワキ「化一切衆生。シテ「皆令入佛道の。地「通盛夫婦。御經に引かれて立ち歸る波の。シテ「あら有り難の御法やな。

ワキ「不思議やなともなまめける御姿の。波に浮びて見に給ふは。いかなる人にてましますぞ。ツレ「名ばかりは。まだ消に果てぬ

仇波の。阿波の鳴門に沈み果てし。小宰相の局の幽霊なり。ワキ「今一人は甲冑を帯し。兵具いみじく見に給ふは。いかなる人にてましますぞ。シテ「是は生田の森の合戦に於て。名を天下

此時の物思ひ云々 乳母の詞なり。今の悲嘆の小宰相一人に限らざる。一門のこゝろ同情なりと云ふ。海に入るを見て云々 入水の様子を物語るも同時多。老女も海に入り老翁も海に入るを云ふ。八軸 法華經八卷を云ふ。一人も洩らさじの 一人も破さず救はんの意。方便品 法華經の卷の名。如我昔所願 今者已満足。化一切衆生 皆令入佛道。すなはち方便品の文句。我わかし所の願の如き今すて満足せり。一切の衆生を化し皆佛道に入らしめたり。の意。通盛夫婦の此世に再び立ち歸る意をかきたり云ふ。

なまめける 優美な品位あるを云ふ。

シテ「是は生田の森の合戦に於て。名を天下

武將たつし 武將たりし小同

に揚げ。武將たつし譽れを。越前の三位通盛。昔を語らん其爲

に。是まで顯はれ出でたるなり。

地サシ「うもく」此一の谷と申すに前ハ海。上は嶮しき鴨越。ま

ことば鳥ならでは翔り難く獸も。足を立つべき地にあらす。

シテ「唯幾度も追手の陣を心もどなきうとて。宗徒の一門とし

遣はさる。通盛も其隨一たりしが。忍んで我陣に歸り。小宰相

の局に向ひ。クセ「既に軍。明日にきこまりぬ。痛はしや御身は。

通盛ならで此浦に。頼むべき人なし。我どもかくもなるならば。

都に歸り念れずば。亡き跡とひてたび給へ。名殘惜しみの御盃

通盛酌を取り。指す盃の宵の間も。うたゝねなりと睦言は。九

とへは唐土の。項羽高祖の攻めを受け。數行虞氏が涙も。是に

はいかで増さるべき。燈闇うして。月の光りにさし向ひ。語り

慰む所れ。シテ「舍弟の能登の守。地「早甲冑をよろひつゝ。通盛

數行虞氏が涙も云々 楚の項羽
漢軍が攻め附されて既敗軍と
決せし時の様を作れる詩み
數行虞氏涙。夜深四面楚歌聲
とあるを用ふ。數行ハ楚の項羽
が愛妾の名。此詩ハ項羽集ふ
能登の守 名ハ數行。

須磨の山のうしろ髪ひかる
須磨山「うしろの山」と云ふ名所
あり。此名ふかけて「ところか
らし」と云ひ「うしろがみ」とつ
けたり。うしろ髪ひかる」と
ハ。跡み心の残りて進まれる聲
なり。

修羅道 合戦ふて終りし人の死
して行く處。

讀誦の聲を云々 此文知すべ
し。葵上も同じ。そこの註を見るべ
し。こゝみん學す。

は何處ぞ。など遅なはり給ふぞと。呼ばりし其聲の。あら恥
づかしや能登の守。我弟といひながら。他人より猶恥づかしや。
暇申してさらばとて。行くも行かれぬ一の谷の。所から須磨の
山の。後髪ぞ引かるゝ。
シテ詞「さる程に合戦も半なりしかば。但馬の守經正も早討たれ
ぬと聞てゆ。ワキ「扱薩摩の守忠度の果てはいかに。マテ「岡部の
六彌太と組んで討たれしかば。あつばれ通盛も名ある侍もかな。
討死せんと待つ所に。すはあれを見よ好き敵に。地「近江の國の
住人に。木村の源五重章が。鞭を上げて驅け來る。通盛少しも
さわがず。抜き設けたる太刀たれば。兜の眞向ちやうと打ち。
返す太刀にてさし違へ。共に修羅道の苦を受くる。隣みを垂れ
給ひ。よく吊らひてたび給へ。
地「讀誦の聲を聞く時は。惡鬼心を和らげ。忍辱慈悲の姿にて。

菩薩もこゝに來迎す。成佛得脱の。身となり行く有り難き。

祇王

作者未詳

シテ 佛御前
ワキレ 瀬尾太郎
平相國清盛一時榮華を極めて
祇王と云ふ白拍子を寵愛し居た
りし事。共々清盛の前にて舞ま
ふ事を作れり。

ワキ詞 是は入道相國に仕へ申す。瀬尾の太郎何某にて候ふ。扱も淨海掌に天下を治め給ひ。榮花の央にて御座候ふ。こゝに祇王御前と申す遊女。唯かりそめに淨海の御目に懸かり給ひしが。御寵愛ならびなし。日夜朝暮の御酒宴申しはかりなく候ふ。又加賀の國より佛御前と申して。是も白拍子にて候ふが。淨海の御目に懸かりたき由を申し出仕申され候へども。淨海の御言には。いかなる神なりとも佛なりとも。祇王があらん程ハ御對面叶ふまじき由仰せ候ふ所に。祇王の御申志には。何れも流れを立つるは同じ事にて候へば。御對面なくては叶ふまじき由たつて御申し候ひて。此四五日は出仕をどゞめ給ひて候ふ。さる間今

佛御前の訴訟 清盛ハ佛を追ひ
歸さんとしし。祇王しきり
同業の情をもて是非とも御對面
今めかしの御事や。今更あらた
めて申さずとも。の事なりとの
意。御参りの上ハ候ふ。佛の参られ
意。たる上ハ訴訟も及ばまじの
意。

願ひの糸の 身に願望ある人ハ
七夕祭に糸を手向くる事あり
之を願ひの糸と云ふ。身の願ひ
を糸に云ひかけ。糸ハ五色を用
ふる故に色の文字につけけた
り。色見ぬ。心の内だけ願ひ居
ても色にあらはれて人に見ぬ
事。闇の罪のたへても。闇夜に錦
の衣を着る壁の如く無益なるを
云ふ。この「たへ」の文字を愛
き身のたへなき意にかけけて云
へり。同じかざしの。佛も祇王も同じ
白拍子なりとの意。

日御對面あるべき由仰せ出だされ候ふ間。此由祇王御前に申さばやと存じ候ふ。いかに案内申し候ふ。淨海の御言にて。祇王御前も佛御前も御参りあれとの御事にて。瀬尾の太郎が参りて候ふ。いかに祇王御前。何とて此間ハ御出仕もなく候ふ。ツレ詞 唯今参り候ふ事も。佛御前の訴訟故候ふよ。ワキ「あら今めかしの御事や候ふ。既に御申しにより。佛御前の御参りの上は候ふ。如何に佛御前。唯今の御出仕めでたう候ふ。シテ「申すに付けて憚り多く。御心の内も恥づかしやさりながら申さで過ぎばいとゞしく。願ひの糸の色見えぬ。闇の錦のたへても。身のはて如何になりぬらん。同じかざしの花髪。斯かる恨みは身ひとりかや。地「さしも名高き御事の。人をえらばせ給ふかや。我方の。越の山風吹くたびに。高嶺に残る天雲の。隠るゝ空も憂き旅の。何に心の急がれん。都人。いかにと問は

を尋ねのぼる事を作れり。

昔在靈山云々 今請誦する經の
文句。此卷菩薩寺の臨み註した
慈眼視衆生 佛の慈悲の眼もて
衆生を觀むた事。

夫れ受けがたき 是より文の詞。

吾と覺めん 我心自身にて迷の
夢を覺めしむ へきを云ふ。
今を捨てずんば 今此時身を捨
て出家せずんばの意。地獄にて火
三途 一ふ火途。地獄にて火
小焼かる、苦界なり。二に火血

申す者にて候ふ。扱も頼み奉る平松殿は。去年の秋空しくなら
せ給ひて候ふ。又春滿殿と申して御子息の御座候ふが。いまだ
幼なくましますにより。某に傳り立て申せとの御遺言よて候ふ
程に。片時も離れ申さず春滿殿を傳り立て申し候ふ。又今日は
平松殿の御忌日にて候ふ間。御寺に參らばやと存じ候ふ。サシ
「昔在靈山名法華。今在西方名阿彌陀。娑婆示現觀世音。三世利
益同一體。實に有り難き悲願かな。地」慈眼視衆生悉く。誓ひ普
ねき日の影の。曇りなき世の御惠み。後の世かけて頼むなり。」
狂言「春滿殿の御文にて候ふ御覽候へ。シテ詞「あら思ひよらずや。
まづく御文を見うするにて候ふ。夫れ受け難き人身を受け。
逢ひ難き如來の教法に逢ふ事。闇夜の燈。渡りの舟待ち得たる
心地して。吾と覺めん夢の世に。今を捨てずんば徒に。又三途に
も歸らん事。歎きても猶餘りあり。此生に此身を浮かめずは。

途。畜生もて肉骨を食とする
苦界なり。三の火途。餓鬼も
て刀杖もて打ち追はる、苦界な
り。
此生は此身を浮かめずば 此人間
界に生まれて居る間。此我身
根を作らばかすはなり。へき善
無爲に入らば 出家する事。

かまひて 必ずと云ふに同じ。
墨衣もひたてども云々 此歌
までが文の文句なり。

三世の契り 君臣主従へ過去現
在未來の三世にわたれる縁ある
を云ふ。

何の時をか頼むべき。然るに一子出家すれば。七世の父母成佛
すと云へり。此身を捨て、無爲に入らば。別れし父母の御事の
みか。生々の親を助けん事。是にしかじと思ひ切りつゝ、家を出
で。修行の道に趣くなり。父母に別れし其後は。唯御事をこつ
ひたすらに。父とも母とも頼みつれ。かくとも申さで別るゝ事。
乳房の恩の父母に。二度別るゝ心地して。名残こつ惜しう候へ。
かまひて尋ね給ふなよ。三年が内には必ずく。身の行くへを
も知らせ申さん。墨衣思ひ立てどもさすが世を。出づる名残の
袖は濡れけり。地「書き残されし言の葉の。若木の花を先立てゝ。
身のなる果は如何ならん。恨めしの御事や。縦ひ世を捨て給ふ
ども。三世の契りなる物を。何處までも御供に。などや伴なひ
給はぬぞ。今は散り行く花守の。頼む木陰も風吹く。行くへや
いづち雲水の。跡を慕ひていづことも。知らぬ道にぞ出でにけ

浮世の夢もさめぬべし。 柏玉集
に「高野山その時の鐘の音も浮
世の夢や先づさめてまじ」とも
高野山 金剛峰寺と云ふ。紀伊
の國伊都郡あり。醍醐天皇の
御時弘法大師の開基なり。

三鈴の松 山内御影堂の前より
る松の名なり。

蘇武が文 漢の蘇武が胡國を四
つたれし時。雁の翼を文を付けて
送りし古事。

陸奥紙 いま檀紙と稱ふる紙。
わかしの手紙を書きお用ひた
り。 呼子鳥 深山にて人呼ぶやうに
鳴く鳥なりと云ふ。故に「誘ひ
れ」の詞をつけたり。古今集
よめるふよりて前の「さほつ
かなの」にさほつを添へて云ふ。
檀紙 檀木に入れて持つ紙。
あさよし 紀の枕詞。
紀の關 和泉の方より紀伊へ入

る。

ワキ次第「浮世の夢も覺めぬべし。 深き御法を頼むなり。 詞「是は
高野山の僧にて候ふ。 又是に御座候ふ幼き人は。 何處とも知ら
ず來り給ひ。 出家の御望みの由にて愚僧を御頼み候へども。 若
し尋ねる人もや候ふらんと。 様々に痛はり日を送り候ふ。 又今
日は三鈴の松に伴なひて。 慰め申さばやと存じ候ふ。

後シテ「薄雲に書く玉章と見ゆるかな。 霞める空に歸る雁の。 翅
に付けしは蘇武が文。 うれは故郷の旅衣。 君を念れぬ心ぞかし。
吾も主君の御行方。 上の空なる御跡を。 尋ねや逢ふと遙々の。

陸奥紙に書き残す。 文こそ君のかたみなれ。 あら覺束なの御身
の行方やな。 呼子鳥。 誘われし花の行方を尋ねつゝ。 地「風狂じ
たる心かな。 シテ「肌身に添ふる此文を。 地「懷紙と人や見ん。 あ
ともよし。 紀の關越にて名に聞きし。 是や高野の山深み。 茂み

る口の處。 我故郷の筑波も
木の茂りたる山なればそれと思
ひ出して云ふ。 猶我主君 故郷の山を思ふにつ
けて又主君の思ひ出さるゝな
根はふ道 根の土を道ひ積り
たる險路を云ふ。

角鐘 釣鐘の事。

の木陰分け行けは。 こゝも筑波の山やらんと。 吾方を思ひ出の。
昔ゆかしき心にも。 猶我主君戀しやと。 夕山松の根はふ道を。
いさや狂ひ上らん。 いさく狂ひ上らん。 立ち上る雲路のこゝ
は何處。 高野山に來て見れば。 貴とやな或は念佛稱名の聲々。
或は覺鐘鈴の聲。 耳に染み心澄みて。 物狂ひの狂ひ覺むる心や。
シテ「いつか扱。 地「いつか扱。 尋ねる人を道のべの。 便りの櫻を折
りあらば。 などか主君に逢はざらんと。 懇に祈念して。 三鈴の
松の下に。 立ち寄りて休まん。 いさ立ち寄りて休まん。

子詞「是なる物狂ひをよくく見候へば。 故郷にて召し使ひし高
師の四郎と申す者にて候ふが。 某を尋ねてかやうに物狂ひとな
りたると思ひ候ふ。 ワキ詞「言語道斷。 さらば御名乗り候へ。 子
や暫く。 思ふ子細の候へば。 先づ知らぬ由にて詞をかけて御覽候
へ。 ワキ「心得申し候ふ。 不思議やな姿を見れば異形なる有様な

八葉の案 高野山の内なる大塔の四方四隅、おめくれるを内の八葉と云ひ、壇場奥院の外に八葉なる外八葉を推し比して名づけたるなり。法性隨縁の月、縁ふ照れて法性の形を色々々照るを、山にあり川によりて月影の照らしかたの異なるに譬ふ。八葉の案の間の谷々を云ふ。奥の院 大師を祭れる處。此佛道縁覺 再びよく思へば、開く基となるの意。佛の物事の縁に照れて悉くさとり、縁とならしむるの意。風常樂の夢覺め 世間はすべ常住にして樂しとのか迷ひ居る心の夢多風が吹きさすの意。

花壇場 壇場の高野山中おもなる西塔まで二町の間の地を云ふ。高野山十八景の内にも壇場春色とて花の名所になりたれば、か云へり。月傳法院紅葉三寶院 傳法院三寶院も山内寺院の名なり。前の花にならべて月紅葉の名所をあげたるなり。花紅葉月野 彼よりも是よりも 花紅葉月野のはかなきものにくちべ見れば

き渡り。法性隨縁の月の影ハ。八つの谷に曇らすして。誠に三會の曉を待つ如くなり。扱ころ即身成佛の相を顯はし。入定の地を示しつゝ。深々たる奥の院。深山鳥の聲澄みて。飛花落葉の嵐まで。無常觀念を勸むる。是どもまた常住の。皆令佛道。縁覺の由をあかすなり。シテ「然れば時移り事去りて。地」四季折折のおのづから。光陰惜しむべし。時人を待たざるに。貴賤群集の雲霞。かゝる高野の山高み。谷嶺の風常樂の夢覺め。法の稱名妙音の。心耳に残り満ちくゝて。稱へ行ふ聞法の。聲は高野にて。靜かなる靈地なりけり。

地「尋ね來し。シテ」霞の奥の高野山。地「時しも春の。シテ」花壇場地「花壇場。月傳法院。紅葉三寶院よりも猶深く。雪は奥の院。彼よりも是よりも。いつも常盤の三結の松蔭に。立ち寄る春の。風狂じたる物狂ひ。あら恐れや。シテ」高野の内にては。地「高野

の意。月ハ多く常住の時に云へど。こゝには益壽陰明のある故に。なほはかなきもの、内に入路ひ狂ハ御制戒。高野山禁制の條中に禁言禁とあるを云ふ。詠ひ舞ふも管絃の内なれば

の内にては。詠ひ狂はぬ御制戒を。怠れて狂ひたり。ゆるさせ給へ御聖。

子詞「やあ如何にあれなるは高師の四郎にてハなきか。何とて是まで來りたるぞ。シテ」や。あれにましますは春滿殿にて御坐候ふか。何とて是まで來たるとは。あら情なの御言葉や。縦ひ御身を捨て給ふとも。いかでか捨てさせ申すべき。御心を靜めて聞こし召せ。平松の御名字を誰かハ繼がせ給ふらん。先づ此度は御歸り有つて。扱其後はともかくも。御意をばなどか背かんと。地「御袖に取り付きて。三世の契り朽ちせねば。是まで尋ね紀の國や。高野の山の陰頼む。主君に逢ふうれしき。かくて有るべきにあらざれば。高野の山を立ち出で。語り慰め故郷に。御供申し歸りつゝ。共に行末榮にけり。是も御法を弘めし。大師の恵みなりけりや。大師の恵みなりけり。

前シテ 横夫 光源氏 藤原 須磨の浦に光源氏の轉住まれし處なれば其國邊よりわかれて昔を語る事を作り。

源氏の大将 須磨に住まれし名木 須磨寺の門前にある松 松の葉に煙に見えし 松の葉に煙に見えし 松の葉に煙に見えし

須磨源氏

すまげんじ

元清作

ワキ次第 八重の汐路の旅の空。九重何くなるらん。詞 抑是は日向の國宮崎の社官。藤原の興範とハ我事なり。扱も我鄙の住居なるに依つて。未だ伊勢太神宮へ参らず候ふ程に。此度思ひ立ち伊勢参宮と志して候ふ。道行 旅衣。思ひ立ちぬる朝霞。彌生の空も半にて。日影のどかに行く舟の。浦々過ぎてはるくど。波の淡路をよそに見て。須磨の浦にも着きにけり。詞 やうく急ぎ候ふ程に。津の國須磨の浦に着きて候ふ。此所は聞き及びたる源氏の大将住み給ひし在所にて候ふ。又承り及びたる若木の櫻をも一見せばやと思ひ候ふ。シテ一聲 浮世のわざにてこりすまの。猶こり果てぬ鹽木かな。松ならで又煙と見ゆる。是や眞柴の陰ならん。サシ 是は須磨の浦

焼かぬ間の 鹽焼く葉のあひだ

雨夜の物語 源氏物語 雨の夜を語りよかし ちよりにて 雨の夜を語りよかし たる事あり。之を云ふ。 思ひ縊りなる意にかけ たるにや。 木綿もて美しく作れる 花。こゝに「言」と「花」の手 向」とつなげたるまでにて意な 折々に 花を折る意と。時々の 意と。

に旦暮に釣を垂れ。焼かぬ間は鹽木をはこび。浮世を渡る者に 候ふなり。詞 又此須磨の山陰に一木の花の候ふ。名におふ若 木の櫻なるべし。古へ光る源氏の御舊跡も。此所にて有りげに 候ふ。歌 我等賤しき身なれども。有りし雨夜の物語。聞くにも 袖をうるほして。山の薪の重きにも。思ひ縊を折りうへて。彼 古墳とゆふ花の。手向の梢折をに。心をはこふばかりなり。 詞 暫く柴を下し花をも詠めばやと思ひ候ふ。ワキ詞 いかれ是なる翁に尋ぬべき事の候ふ。シテ詞 なに事にて 候ふぞ。ワキ 其身ハ賤しき山賤なれども。此花に詠め入り家路を 忘れたる氣色なり。若し此花は故ある木にて候ふか。シテ 賤し き山賤と承り候へども。恐れながらそなたをこそ鄙人とい見奉 りて候へ。さすがに須磨の若木の櫻を。名木かどの御評ねは。 事新らしうこそ候へとよ。ワキ げにく須磨の山櫻。名におふ

關より花にさまるか 須磨の
關所にさまるか 須磨の
の爲めに泊り給ふ心かの意
後の山里 うしろの山 須磨の
名所なり
名をとりくぐの 柴まで須磨の
名物と云ふ名を取るの意と
りくぐさまぐに職業のかはる
意と

うつせみの 世の枕詞。源氏物
語の巻の名を用ひて云へり。
桐壺の夕べの煙 桐壺の巻に光
源氏の母上。桐壺更衣の巻に給
ひしと云ふ。
いとくしと云ふ 桐壺更衣の失
せたる家に勅使の來りし時。更
衣の母君「いとくしと云ふ」の
げき淺茅生に露をさよる雲の
上人とよまれしを引く。常々
も露しげくちひれなる草の屋
に。雲の上人が訪ひ來て更衣の
昔がたりなどせられしかた。一
層の露をさよる深へたるの意。
小萩が本のさびしさまで 帯よ

若木の花ぞとて。はるくこゝに分け入りて。シテ「わざと詠め
の御心ざし。ワキ「日もはや暮れて須磨の浦の。シテ「さらば里に
もお泊りなくて。ワキ「野を分け山に。シテ「來り給ふは。地「關よ
りも。花にさまるか須磨の浦。近き後の山里の。柴と云ふ物ま
で。名をとりくぐのわざなるに。只心なき住居とて。人を賤し
め給ひそよ。

ワキ詞「いかに翁。古へ此所は光る源氏の御舊跡。ことにおこと
は年ふりたる者なれば。源氏の御事物語り候へ。地「リ「念れて
過ぎし古へを。語らば袂やしをれん。我うつせしの空しき世を
案ずるに。桐壺の夕べの煙。絶にぬ思ひの涙をうへ。サシ「いと
どしく虫の音しげき淺茅生の。地「露けき宿に明け暮らし。小萩
が本のさびしさまで。はこくみ給ひし御惠み。いともかじこき
勅により。十二にて初冠。高麗國の相人の。つけたりし始めよ

り更衣の母君のもとに「宮城野
の露吹きむす風の音に小萩が
もとを思ひこそやれ」とよみて
おくり給へるを引く。宮城野の
内裏を指し。小萩の光源氏のま
だ如く祖母君のもとに養はれ
居たるを指す。
十二にて初冠 元服して始めて
高麗國の相人云々 桐壺の巻にあり。
相見にて光源氏の未來を高麗人
に占ひしめし事。おもひ其容貌
の美しきをめで、光る君と名づ
けたる事。同じ巻に見ゆ。
中將 桐壺と帝木の間に任ぜ
られしなれど。此巻に至りば
あて文中に見わたる事なればか
く云へり。十五六歳の時なり。
花正 二十歳の春なり。南都の櫻の御
宴ありし夜。弘徽殿の廊下にて
藤原の端となりて。つひに須磨に
左遷せらるゝに至りしなり。其
時源氏の女にのみかけられたる
入る月のおぼろけならぬ契りと
かと思ふ。又女と取りかへしたる
有明の月の行方を空にまがへ
つてと尋きつけられたり。などの
年廿五と申せしに。須磨の巻に
つぎの春 明石の巻にあり。
問はるがたりの夢をかへ。須磨
の巻に「脱方みなうちやすかた
り。君もいさゝか寐入り給へれ

り。光る源氏と名を呼ばる。簾木の巻に中將。紅葉の賀の巻に
正三位に叙せられ。花の宴の春の夜の。行方も知らで入る月の。
おぼろけならぬ契り故。年廿五と申せしに。津の國須磨の浦。
海士人の歎きを身に積みて。つぎの春。播磨の明石の浦づたひ。
問はず語りの夢をさへ。うつゝにかたる人もなし。去る程に。
天下は奇特の告げ有りしかば。又都にめしかへされ。數の外の
官を経て。シテ「其後うちつゞき。地「みをつくしに内大臣。少女
の巻に太政大臣。藤のうら葉に太上天皇。かく楽しみを極めて。
光る君とは申すなり。
ロンギ地「扱や源氏の舊跡の。分きていつくの程やらん。委しく
教へ給へや。シテ「いつくとも。いと白波のこゝもとは。皆其あ
と夕暮の。月の夜を待ち給ふべし。もしや奇特を御覽せん。
地「うもや奇特を見んぞとは。何をか待たん月影の。シテ「光る源

卷 絹

まきとぬ

清 次 作

ワシテ 男 現
 都の男。勅諭の口限を違へし罪よりて神助を得る事を作れり。神樂を舞ひ移りて繩を解き。奉朝。正の絹を巻きたるを云。三熊野。紀伊の國牟婁郡みまの熊野嶺の事。もと「み」の字を美稱の意にて添へたるが。後ハ熊野三山の意を取りて「三」の字を書く事となりたり。

都のてよりなりとも。てよりハ風俗の事。都の人情風俗を違さからぬ程の近國もてもの意。

朝もよい 紀の枕詞。
 紀伊の入口ふあり。

ワキ詞「そもく是は當今に仕へ奉る臣下なり。扱も我君あらたなる靈夢を蒙り給ひ。千疋の卷絹を三熊野に納め申せとの宣旨に任せ。國々より卷絹を集め候ふ。さる間都より参るべき卷絹遅なはり候ふ。参りて候はゞ神前に納めばやと存じ候ふ。
 男次弟「今を始めの旅衣。紀の路にいさや急がん。サシ都のてぶりなりとて。旅は心の安かるべきか。殊更是は王土の命。重荷をかくる南の國。聞くだに遠き千里の濱邊。山は苔路のさかしきを。いつかは越はん旅の道。休らふ間もなき心かな。是とて。君の恵みにも洩れじ。朝もよい。紀の關越にて遙々と。山又山を其處としも。分けつゝ行けば是ぞこの。今ぞはしめて三熊野の。御山よ早く着きよけり。

思ひ連ねて候ふ。歌をよみたる事のみを云ひて。歌の文句をばまだ語らず。
 先づ君よ仕へ申ん。勅諭を應じて卷絹を持参するを云ふ。

罪の報い 罪人の所刑みあふを云ふ。
 のうく其下人をば。既み天満宮の神懸。かこみ乗り移りて宜ふなり。
 納受れば神心。歌を神慮み納受し給へハ。其下人の心も下人のものならずとの意。神も日み少し涼しき三熱の。神も日み三度熱みて苦しめられ給ふ事あり。佛者の説ふ云へり。歌の徳よりて此神界の苦慮をば

男詞「急ぎ候ふ程よ。三熊野よ着きて候ふ。先々音無の天神へ参らばやと思ひ候ふ。や。冬梅の匂ひの聞て候ふ。何處よか候ふらん。實に是なる梅よて候ふ。此梅を見て何となく思ひ連ねて候ふ。南無天満天神。心中の願をかなへて賜はり候へど。地「神よ祈りの言の葉を。心の中よ手向けつゝ。急ぎ参りて。先づ君よ仕へ申さん。
 男詞「いかゝ案内申し候ふ。都より卷絹を持ちて参りて候ふ。ワキ「何とて遅なはりたるぞ。其爲めよ日數を定め参る中に。汝一人愚なる。地「其身の科はのがれじと。やがていましめあらけなき。苦しみを見せて目のあたり。罪の報いを知らせけり。シテ詞「のうくその下人をば何とていましめ給ふぞ。其者は昨日音無の天神にて。一首の歌を讀み我に手向けし者なれば。納受めれば神心。少し涼しき三熱の。苦しみをまぬかぬうれのみ

人倫心なし 人間の勲を遺へ
 解けや手櫛の亂髪 手もて解け
 と云ふ手櫛の亂髪 手もて解け
 神の受けたり 神の受けたり
 御注連の繩の 御注連の繩の
 此手の松の云々 紀伊の名所な
 れば「結びし」を呼び出さん爲め
 が枝を引き結ばささくあらば
 又かへりこん「岩代の岸の松が
 枝むすびけん」岩代の野中立てる
 一つ松こゝろもとけず古へ思は
 れぬ見事な旅行く人の無事
 小降り來ん事を祈りて。枝を結
 びなどせし風俗のありしなる人
 何とか結びし 轉しかたの殘
 なるを云ふ。

か。人倫心なし。其繩解けとこそ。解けや手櫛の亂髪。地「解け
 や手櫛の亂髪。神は受けずや御注連の繩の。引き立て解かん
 と此手を見れば。心強くも岩代の松の。何とか結びし情なや。
 ワキ詞「是は扱何と申したる御事にて候ふぞ。シテ詞「此者は音無
 の天神よて。一首の歌を讀み我も手向けし者なれば。とくく
 繩を解き給へ。ワキ「是は不思議なる事を承り候ふ物かな。かほ
 ど賤しき者の歌など讀むべき事思ひもよらず。如何様にも疑は
 しき神慮かと存じ候ふよ。シテ「猶も神慮を偽りとや。さあらば
 彼者昨日我に手向けし言の葉の。上の句を彼に問ひ給へ。我又
 下の句をばつゞくべし。ワキ「此上へとかく申すに及ばず。如何
 に汝誠に歌を讀みたらば。其上の句を申すべし。男「今のはどか
 り申すに及ばず。彼音無の山陰に。さも美しき冬梅の。色こと
 なりしを何となく。心も染みてかくばかり。音なしにかつ咲き

正直捨方便 佛の衆生を漸度す
 るの方便の方便を用ふれど
 神の正直明白を主として方便を
 用ひ給ひぬを云ふ。
 心中に隠し歌も云々 心も隠し
 てまた人ふ語りぬ歌も。神
 の通力みて知り得たるの
 意。 浮蕪なる心を云ふ。繩
 打ち解け 疑心の解くると。繩
 を解くと。

總持の義 總持ハ陀羅尼の事を
 云ふ。陀羅尼ハ梵音のまゝに稱
 する經文にて。和歌ハすなはち
 日本の陀羅尼なり。佛者ハ歌ひ
 れり。故に陀羅尼ハ同持の和歌な
 れり。其道もて樂しき世に逢ふ
 を得るの意。
 音葉少なうして理を含み 三十
 一字の内十分の意味を云ひ盡
 すを云ふ。
 三難耳絶えて 地獄道畜生道餓
 鬼道の苦しみを耳を離れ自ら心
 神淨なるを云ふ。
 寂念閑定の床 すべて俗念を
 去つて氣靜まり確定する事。床
 とハ座禪の床を指して此修行を
 する故に云ふ。
 眼途かみ眼を去る 煩惱の迷の
 眼が覺めて悟の道の開くるを云

をむる梅の花。シテ「にほひざりせば誰か知るべきと。讀みしは
 疑ひなきものを。地」もとより正直捨方便の誓ひ。曇らぬ神心。
 直なる故にかくばかり。納受あれば今は早。疑はせ給はで歌人
 を。ゆるさせ給ふべし。または心中に隠し歌も。神の通力と知
 るなれば。實に疑ひの仇心。打ち解け此繩を。疾くくゆるし
 給へや。
 地「それ神は人の敬ふよよつて威を増し。人は神の加護によ
 れり。シテサシ「されば樂しむ世に逢ふ事。是れ又總持の義によ
 れり。地「言葉少なうして理を含み。三難耳絶えて寂念閑定の床
 の上には。眠り遙かに眼を去る。クセ「是によつて。本有の靈光
 忽ちに照らし。自性の月やうやく雲をさまれり。一首を詠すれ
 ば。よろづの惡念を遠ざかり。天を得れば清く。地を得れば安
 しあらかじめ。唯一寶相。唯一金剛とは説かずや。シテ「され

二世を助く 現世と来世と。一萬の文珠菩薩なり。三世の父母たり。過去現在未來三世をわたりて。正覺を得せしむる母親たるの姿。
 三萬の菩薩なり。熊野山内のこの神の護法なり。護法は佛法を守る事。
 十萬の菩薩なり。熊野山内のこの神の護法なり。護法は佛法を守る事。
 彼かんなぎの神の事。神子の事。女も移り附くもの云ふ。
 つくもがたの神の事。神子の事。女も移り附くもの云ふ。
 御幣も亂れて。神子の事。女も移り附くもの云ふ。
 空も飛ぶ鳥の。神子の事。女も移り附くもの云ふ。
 高足下足の。神子の事。女も移り附くもの云ふ。
 又本性ふぞ。神子の事。女も移り附くもの云ふ。

關原與市

せきはらよいち

作者未詳

三人次第「身は定めなきうたかたの。消えぬを恨みなりける。
 シテサシ」是は義朝の末の子。牛若とは我事なり。扱も平家の榮
 には。安藝の守清盛が子供。一寺の賞翫他山のおぼは。立ち交は
 るも憚りなれば。東とかやに下らんと。トモ「忍びて出づる鞍馬
 寺。心盡しの春の夜の。行方も知らぬ旅衣。消にぬ限りは白
 雲の。野山を分けて美濃の國。山中に早く着きにけり。

關原與市と云ふ武者美濃の中川庄
 下り道と云ふ武者美濃の中川庄
 大勢の敵と云ふ武者美濃の中川庄
 身は定めなきうたかたの。消えぬを恨みなりける。
 シテサシ」是は義朝の末の子。牛若とは我事なり。扱も平家の榮
 るも憚りなれば。東とかやに下らんと。トモ「忍びて出づる鞍馬
 寺。心盡しの春の夜の。行方も知らぬ旅衣。消にぬ限りは白
 雲の。野山を分けて美濃の國。山中に早く着きにけり。

子供の中心交りて居らんも遠慮
 なれはの意。牛若の心を盡したる
 事と。春の夜の照りも盡さず
 事と。春の夜の照りも盡さず
 事と。春の夜の照りも盡さず

トモ詞「是より東へは程遠く候ふ程に。御心静かに御下向あれか
 こと存じ候ふ。シテ詞「さらば心静かに下らうするにて候ふ。トモ
 「はい何と申すぞ。關原與市美濃の國中川の庄を賜はり。唯今
 入部仕ると申すか。や。是は一大事の御事にて候ふ間。よくよ
 く御忍びあれか」と存じ候ふ。シテ「さらば深く忍ばうするにて
 有るぞ。此方へ來り候へ。」

山風の云々 威勢の強き事と花
 花しき行装との形容。音ハあら
 しの花の雪ハ花の雪なれば音
 ハ有らじの意。是ハ有る文句を
 用ひしなり。第一卷熊野の文句
 くらべ見るべし。

ワキ詞「そもく是は關原與市とハ我事なり。扱も美濃の國中川
 の庄を賜はり。今日入部仕り候ふ所。在所ノ柵を引き城郭を
 搦ふるよし承り候ふ間。唯今手勢七十騎を以て。彼在所へ押し
 懸け候ふ。扱も當國中川の。其城郭を落さんと。一同歌「まだ夜
 深きに關原の。山の岩角踏み馴らし。駒うち續く武士の。猛き
 心を案内よて。急ぎて行けば程もなく。山中に早く着きにけり。

關原の 關原の事。この文
 句ハ拾遺集の歌ハ「遠坂の關の
 岩角踏み馴らし山立ちしる
 原の駒」となるを用ふ。

トモ詞「是より東へは程遠く候ふ程に。御心静かに御下向あれか
 こと存じ候ふ。シテ詞「さらば心静かに下らうするにて候ふ。トモ
 「はい何と申すぞ。關原與市美濃の國中川の庄を賜はり。唯今
 入部仕ると申すか。や。是は一大事の御事にて候ふ間。よくよ
 く御忍びあれか」と存じ候ふ。シテ「さらば深く忍ばうするにて
 有るぞ。此方へ來り候へ。」

鼠上 はねの事。

冠者 元服せし頃の若者を云ふ。

軍の血祭 出陣の時人を殺して軍神を祭る事。

弓手 左の手。右の手。小鳥稻妻石の火の神速なる聲。 はたしき。

ワキ詞「急ぎ候ふ程よ。是は早山中と申す在所に着きて候ふ。如何に誰かある。ツレ詞「御前に候ふ。ワキ「是より中川へは程遠く候ふ程に。人馬に息をつかせ候へ。ツレ「畏つて候ふ。
シテ詞「不思議や見れば侍なるが。旅の衣に馬の蹴上を懸くる事。存外あまりの振舞なり。いかに與市。其馬乗り得ずは。下りて下人に牽かせ候へ。トモ「如何に申し上げ候ふ。あれなる冠者が申す事は。與市殿の御馬。其馬乗り得ずは。下りて下人に牽かせよと申し候ふ。ワキ「何と申すぞ。急ぎ其冠者討ち取つて。今日軍の血祭にせよと。與市が下知に随つて。地「究竟の兵七十餘騎。切先をそろへて切つて懸ければ。牛若少しも騒がずして。静々と太刀抜きそばめ。敵を手近く待ちかくれば。我もくどかゝる敵を。弓手に切り伏せ馬手に切り伏せ。小鳥稻妻石の火の。見あへぬ程に切り給へば。嵐に木の葉の散るが如く。大勢

手並み 我願前々の意。

飛びちがひ斬り落し 牛若身を飛ばせて與市を斬りおとしたり。駒引きよせて 與市の駒を奪ひ美濃の中道 中山道の事。

前シテ 里女。後シテ 藤の精。ワキ 越中。シテ 越中。越中多胡の浦の古歌よみたる藤の名所なれば。其花の精あらはれて舞ひ遊ぶ事を作れり。

善光寺へ云々 越中を過ぐべき。長江の里 加賀の白山吹きおろす。長江の里 加賀なり。日の長きと三ひかく。砥並の關 砥並山多まり。越中。砥波郡。

は亂れ散つて。四方へばつと逃げたりける。地「其時與市は怒りをなして。物々しあれ程の。小性ひとり。手並にいかで洩らすべきと。駒駈け寄せてえいやと打つ太刀を。飛びちがひ斬り落し。駒引き寄せてゆらりとうち乗り。太刀指しかざし。我は知らずや源の。牛若と名乗り罵り。美濃の中道。東路として下りける。

藤

安清作

ワキ次第 山又山を遙々と。越路の旅に出でうよ。詞「是は都方より出でたる僧よて候ふ。我此程は加賀の國に候ひて。こゝかしこの名所を一見仕りて候ふ。又是より善光寺へ参らばやと思ひ候ふ。道行「雪消ゆる。白山風ものどかにて。日影長江の里も過ぎ。さゝぬ砥並の關越えて。青葉に見ゆる紅葉川。そなたとは

紅葉川 磯波郡なるべし。比美の江 射水郡なり。萬葉集 家持の長歌「松田江の波は比美の江すきて多胡の島ゆきた」と見ゆ。

多胡の浦 射水郡なり。新古今集藤原の歌。藤の花を波に見なして藤波と云ふこと常なるなり。但し二三の句「未葉ぞしをれけり」と原歌あり。多胡の浦や汀の藤の咲きしより波の花さへ色に出でける」とありて少しかれり。やうの歌をも詠し給へて云々か藤を賞美せる歌をパロディすまればしてしをれけりなどの不愉快なる作を吟給ふの意。

花のためは如何ならん 人の聞かずとも花が聞きたらば如何にばかりか不興なる感じを起さん。萬葉集の歌に云々 此歌の作者を萬葉集に「家持」とし。拾遺集には人麿とし。明詠集には阿蘇とせり。波までもかざして行かんとの意を含めたり。今集に「君ならで誰にか見せん梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」とあり。

花の波立つもとに 花の木陰ふの意。

花の跡訪ふ春の風 新古今集藤原の歌に「散りにけりあはれ候みの誰なれ」花の跡と春の山

かり白雲の。比美の江行けば名に聞きし。多胡の浦にも着きよけり。

ワキ詞「是ははや越中の國多胡の浦とかやに着きて候ふ。此所は藤の名所と承り及びたるに。誠にあれなる藤の今を盛と見えて候ふ。立ち寄り見候ふべし。實におもしろく咲きて候ふ。おのが浪も同じ末葉のしをれけり。藤咲く多胡の恨めし的身す。詞「古事の思ひ出でられて候ふ。」

シテ詞「のうくあれなる旅人よ申すべき事の候ふ。ワキ詞「此方の事にて候ふか何事にて候ふぞ。シテ「是は多胡の浦とて藤の名所なり古き歌よ。多胡の浦や汀の藤の咲きしより。波の花さへ色にいでつ。」詞「かやうの歌をも詠し給はで。おのが波に同じ末葉のしをれけりなど口ずさび給ふは。あら心なの旅人やな。ワキ「思ひよらずや人ありとも。知らで吟せし古歌ながら。シテ

「花のためは如何ならん。ワキ「同じ末葉のしをれぬる。シテ恨みならずやうらめしや。彼繩麻呂の歌よ。地「多胡の浦。底さへにほふ藤波を。かざして行かん。見ぬ人のためと讀みたりし。此花を心なく。詠し給ふはうらめしや。實にや思へば咲く花の色をも香をも知る人ぞ。知ると讀みしもことわりや。ロンギ地「不思議や扱もかくばかり。其白露の古事を。語り給ふは誰やらん。シテ「我を誰とか夕日影。紫にほふ花鬘。心にかけてたび給へ。地「心にかけて思へとは。梢にかゝる藤波の。シテ

「多胡の浦わに。地「名にしおふ花の精なりと。夕雲の足はやみ。多胡の浦風うちなびき。花の波立つもとに。寄るかど見えて失せにけり。ワキ歌「かすむ夜の。月は出でようば玉の。よるべ定めぬうかれ鳥。鳴く音も法の聲添へて。花の跡訪ふ春の風。聲物すこき

風一とあり。落花の後のまじし
さを思ひたる意なるを。こゝには
藤の精の消え失せたるまじしを吹
く事に用ひて云ふ。如何なれば
古歌なるべし未だ見落さず。

一味の雨 法華經華嚴經品に。
佛平等如一味雨。佛性生
性一所受不不同。とあり。

異性化身自在不滅 何物も佛力
によりて自在不滅の性を得るを
云ふ。

狂言綺語も云々 たはむれ飾り
たる言語を以て歌うたりなど
るも。佛性を毀美する原因とな
るの意。白氏文集に。願以今生
世俗文字之業。狂言綺語之因。轉
爾爲三寶來世々。佛乘之因。轉
法輪之縁。とあるより來る。
教への外なる。ゆかりの色も縁な
らんと信じたる心を云ふ。

波枕。假寐の夢やとますらん。

後シテ「如何なれば。むなしき空に散る花の。あだなる色に迷ひ
うめけん。ワキ」不思議やな夜も更け過ぐる月影に。あらはれ出
づる姿を見れば。有りつる女人の顔ばせなり。いかさま疑ふ所
もなく。花の精よてましますか。シテ「はづかしながら花の精。
妙なる御法の一味の雨に。開くる花のまみの肩。是まで顯はれ
出でたるなり。ワキ」あら有り難やさりながら。かくしも言葉を
かはす事。何の故にてあるやらん。シテ「異性化身自在不滅の。
縁に引かれてよもすがら。歌舞をなさんと参りたり。ワキ」實に
や元來狂言綺語も。シテ「讚佛乘の因縁。ワキ」隔てはあらじ。
シテ「紫の。地」ゆかりの色も縁ならめと。教への外なる法までも。
今こそ悟りの。ひらくる心の花なれや。されば非情の草も木も。
成佛こゝに荒磯海。深きは法の道ぞかし。

送春不用動三舟車。唯別殘
香與落花。明詠集に出でたる
詩。春を送るとは云へば舟や車
にて送りばく事には非ず。たゞ
落花と別に別る。ばかりすとの
意。
紫藤の露のもとに云々 明詠集
に。紫藤花底發花色。翠竹煙中
暮鳥聲とあり。
致景 けしきに同じ。
奈古の浦 越中の國射水郡。多
胡の浦つゞきなり。

心にかゝる 波のかゝるにかけ
たり。
よるひる 波のよるにかけた
り。
橘の匂ふに云々 古今集に「
五月待つ花たちばなの香をか
け 昔の人の袖の香がする」など
あるより。橘の香は昔もいま
づる種のように云ひ留めしなり。
しるくも月の 秋の來たるけし
きがいちじるしるくの意。

松が枝に云々 斯く四時の移り
かへりの早き中。常磐の松を
頼みて咲きかゝる藤の結がすく
れたりとなり。

地「實にや春を送るに。舟車を動かす事を用ひず。唯殘鶯と
落花とに別る。シテサシ」紫藤の露のもとに殘る花の色。地「實に
れもしろや水の面に。月のかすめる春もはや。紫にほふ花かづ
ら。斯かる致景は又世にも。シテ「奈古の浦も程近く。地」詠め
につゞくけしきかな。クセ」なつかしき。色のゆかりと思ふにも。
心にかゝる藤波の。夜晝わかでいたづらに。送り迎ふる年月の。
春の花散りて青葉に。夏橋のにほふにや。見ぬ世の人ものば
るれ。桐の葉落ちて秋來ぬと。しるくも月の影すむや。浦吹く
風に小夜ふけて。曉と白波。立ちさわぐ村千鳥。友よぶ聲や霜
雪に。冬のけしきの知らるらん。シテ「かやうにうつろふ四つの
時。地」ことわりなれや夏かけて。さかり久しき藤波の。花に立
ち添ふ朝霞。くれゆく春のかたみぞと。惜しむ心も紫の。深く
頼みを松が枝に。斯かる契りぞたのもしき。

ゆたか吹くなる
ゆたかに吹く
ふ同じ。

かへす舞姫 藤の梢の隅よま
を天女に比して。雲の羽袖を
折る柳 折柳曲として唐土にある
音楽の名。落梅曲として唐土
藤生野 山城の名所。藤の縁に
合ふ「大方の春の影のどけ
く時」にうあへる藤生野の花
深みるの 色香の深きと云ひか
英遠の演 此れも多胡の浦つ
づまなり。萬葉集家持の歌に
「さきの浦によする白波のやましに立ち敷き寄せしちゆ(東風)を痛みかき」とあり。陰語に紫の朱(あけ)を奪ふると云ふ詞ありて。常に口なれたればなるべし。

ワキ 小野小町
シテ 勅使
小町 老年の後勅使として鶴返し
の歌よ心を作れり。是は阿保
大内にゆかしげに見物申しける
に。大内の女房たち見物しける
がはてなると云ひ又それには無
きなど、云ひ争ひける。歌をよ
みかへて心を見給へ。小町なら
ば返歌をすべしと云ひければ。

歌をよみかへたるに。小町は
此玉だれの内には住まぬなり。
玉だれの内にはすたれの内な
り。此返しに。もとの身の有
りしうみかにかあらぬもこの
れの内がゆかしき一また寝見
と云ふものにて。中納言頂納言
所より降りて内へ参り給ふ時
局わたりし給ふ女房たち見給
かにはらぬと見し玉だれの内
し。ま。と寄せて投げ出したし
を重納言見給ひ。をりふし向
より小松の大臣來給ひしかば
返しに及ばず。燈籠の火のかき
あげ木のほしにて。やの字を
ちて。かと云ふ字を傍に寄せて
返し通り給ひしとぞん「など
るを取り合はせ作り替へつ。是
一つ物語にせしむるべし。是も
若女ものとて能にては甚だ崇敬
する曲なり。

謡曲通解

第六卷 鷓鴣小町

八十一

シテ「おもごころや。ゆたかに吹くなる春風に。地「誘はれつゝも千代
をとなふる。シテ「松にかゝりて咲く藤の。地「薄紫の雲の羽袖を
かへす舞姫。シテ「うたへやうたへ折る柳落つる梅。地「あるひは
花の。シテ「藤生野も。地「隔てぬ色も匂ひも深海松の。英遠の演
風多胡の浦むれ。吹きよすも音さゆる。波も綾どる舞の袂。月
にひるがへす。影もうつるや紫の。階にかをりて。たなびく霞
に入りけり。

鷓鴣小町

あうひごまら

作者未詳

ワキ詞「是は陽成院に仕へ奉る新大納言行家にて候ふ。叔も我君
敷島の道に御心を懸けられ。普く歌を撰ぜられ候へども。叙慮

に叶ふ歌なし。こゝに出羽の國小野の良實が娘に小野の小町。
彼はならびなき歌の上手にて候ふが。今は百年の姥となつて。
關寺邊に在る由聞こし召し及ばれ。帝より御憐みの御歌を下さ
れ候ふ。其返歌により。重ねて題を下すべきとの宣旨に任せ。
唯今關寺邊小野の小町が方へと急ぎ候ふ。
シテ一聲「身は一人。我は誰をか松坂や。四の宮河原四つの辻。
五「又六つの巻ならん。昔は芙蓉の花たりし身なれども。
今は藜藿の草となる。顔ばせは憔悴と衰へ。肌へ凍梨の梨の如
し。杖つくならでハ力もなし。人を恨み身をかこち。泣いつ笑
うつ安からねば。物狂ひと人はいふ。歌「さりとは。捨てぬ命
の身に添ひて。面影に九十九髪。斯かゝらざりせばかゝらじと。
昔を戀ふる忍び音の。夢は寐覺の長き夜を。あきはてたりな我
心。

松風も匂ひ云々 實隆家集云「
 散りかゝる花の白波吹きよせて
 幸風ふはふ志賀の辛船」とありて
 身の類ひなるものを 自身の孤
 立せしむるを云ふ。 長橋の危く
 つれなき命の云々 長橋の危く
 懸かれる如く。いつ落つるか知
 れぬ身の上を譬ふ。

ワキ詞 如何に是なるは小町にてあるか。 シテ詞 見奉れば雲の上
 人にてましますが。 小町と承り候ふかや何事にて候ふぞ。 ワキ
 「扱此程は何處を住家と定めけるぞ。 シテ 誰留むるとはなけれ
 ども。 唯關寺邊に日數を送り候ふ。 ワキ 實に關寺は。 さす
 ばに都遠からで。 閑居には面白き所なり。 シテ 前には牛馬の通
 路有りて。 貴きも行き賤しきも過ぐ。 ワキ 後には靈験の山高う
 して。 シテ いかも道もなく。 ワキ 春ハ。 シテ 春霞。 地 立ち出で
 見れば深山邊の。 梢にかゝる白雲は。 花かと思えて面白や。 松
 風も匂ひ枕に花散りて。 それとばかりに白雲の。 色香おもしろ
 き氣色かな。 北に出づれば湖の。 志賀辛崎の二つ松は。 身の類
 ひなる物を。 東に向へば有り難や。 石山の觀世音。 瀬田の長橋
 は狂人の。 つれなき命の。 かゝるためしなるべし。
 シテ詞 かくて都の戀しき時は。 柴の巷に暫し留むべき友もなけ

梨の杖 梨の木もて作れる杖。
 涙の關寺 涙のせきまへへ出る
 意の意。 百家仙洞の交はり 若かりに
 て多くの人々に交はり。 院の御
 所に仕して名譽をかやかし
 たる時を云ふ。 前の「一の松」
 の句と反映す。 花薄穂に出で初めて 古今集の
 序に「花すき穂に出たすへき」
 とある詞を用ひて。 秋の末にな
 れる我身をよそへたり。

れば。 便梨の杖にすがり。 都路に出で、物を乞ふ。 詞 乞ひ得ぬ
 時は涙の。 關寺に歸り候ふ。 ワキ詞 如何に小町。 扱今も歌を讀
 み候ふべきか。 シテ 我いにしへ百家仙洞の交はりたりと時こそ。
 ことによそへて歌をも讀みしが。 今は花薄穂に出で初めて。 霜
 のかゝれる有様にて。 浮世にながらふるばかりにて候ふ。 ワキ
 實に尤道理なり。 帝より御憐みの御歌を下されて候ふ是々見候
 へ。 シテ 何と帝より御憐みの御歌を下されたと候ふや。 あら
 有り難や候ふ。 老眼と申し文字もさだかに見はわかず候ふ。 そ
 れにて遊ばされ候へ。 ワキ さらば聞き候へ。 シテ 如何にも高ら
 かに遊ばされ候へ。 ワキ 雲の上は。 シテ 雲の上は。 ワキ 雲の
 上は。 有りし昔にかはらねど。 見し玉だれの内やゆかしき。
 シテ詞 あら面白の御歌や候ふ。 悲しやな古き流れを汲んで。 水
 上を正すとすれど。 歌讀むべしと思はれず。 又申さぬ時は恐

しめどもついにいづもさゆくは
るは海ゆともついにいづもさゆくは
代々の集めの歌人の 其業集に
来代々の歌集に入れる作者を云
歌のましまへ女にて 古今集の
序に「つよからぬは女の歌なれ
はなるべし」とあり
和歌の六巻 古今集漢文の序に
は「和歌有六巻一曰風二曰雅
三曰比四曰興五曰哀六曰怨」
六曰頌とあるを假名の序には
一つにはほへ歌二つにはほへ
歌三つにはほへ歌四つにはほ
へ歌五つにはほへ歌六つには
ほへ歌六つにはほへ歌の六つに
分てり
小町が歌をたゞこと歌の云々
たゞこと歌とは唯見るもの聞
くもの有りを云ふにやめるを
云ふ。小町の歌の買案なるを此
例に叶へるを云ふなるべし
余情の花 小町が容貌の美しさ
を譽めたる詞
紫等なほ動きはこり 紫等はむ
ちさき色に竹の子の始めて生ひ
たるを云ふ。白氏文集にて青瑣
新などありて是も美人の形容
に用ふ
梨花は名のみなりしかど 梨の花
に雲へて見られたれど 實は梨
と云ふ名ばかりにてそれより
まだ夜をこめて 夜の明けぬ内
まひ出立するなり 夜の明けぬ内
和歌山上 京師のはづれにあり
和歌吹上 紀伊にありすなは

体疲瘁する。小町ぞあはれなりけり。
ワキ詞 如何に小町。業平玉津島にて法樂の舞をまなび候へ。
シテ詞 扱も業平玉津島に参り給ふと聞こえしかば。我も同じく
参らんと。都をばまだ夜をこめて稻荷山。葛葉の里も浦近く。
和歌吹上よさしかり。地 玉津島よ参りつゝ。業平の舞の袖。
思ひめぐらす信夫摺。木賊色の狩衣よ。大紋の袴のそばを取り。
風折鳥帽子召されつゝ。シテ 和光の光り玉津島。地 めぐらす袖
や波かへり。シテ 和歌の浦に。汝満ち来ればかたを浪の。地 海
邊をさして田鶴鳴き渡る。シテ 田津
立つ名もよしなや忍び音の。月にはめでし。シテ これぞこの。
地 積もれば人の。シテ 老となる物を。地 かはどに早き光りの
陰の。時人を待たぬ習ひとは。白波の。シテ 知ら戀しの昔やな。
地 かくて此日も暮れ行くまゝよ。さらばと云ひて。行家都に歸

信夫玉津島の土産。
若たる事見えたれや云々。陸奥
信夫郡の産物にて。刃草を木賊
色に摺りつけたる狩衣なるべ
大紋の袴 藤の紋を大きく染め
和光の光り 神の人間に交はり給ふ光りを云ふ。光の文字より玉とつゞけたり。
波かへり 波のやうに袖の隨ふ事。葛葉集にある山部赤人の歌。三の句は「瀧を無き」にて干瀧が無くならたる故にの意なるを。片妻のまふ後人の
和歌の浦に汝満ち来れば云々 葛葉集にある山部赤人の歌。三の句は「瀧を無き」にて干瀧が無くならたる故にの意なるを。片妻のまふ後人の
立つ名もよしや云々 忍び音なりしに名が世に立たばそれなりといふ程の意。戀のころなり。
月にはめでしや云々 古今集業平の歌に「大方は月をめでしは是ぞ此つもれば人の老となるもの」とあり。月の出で入る數が積れば人を老いませ
る年月になるものなれば。面白と云ふ。かきつらきやうなしの意。
光の陰の光陰の文字を和訳して云ふ。
時人を待たぬ 年月は人が留まらんと云うても。待ちて呉れぬの意。幽淵明の詩に。歲月不待人とあり。
袖の涙も關守の 前云ひし如く。涙もせきさへ口の意にかたり。

りければ。シテ「小町も今は是までなりと。地 杖にすがりてよろ
よろと。立ち別れ行く。袖の涙も關守の。柴の巷に歸りけり。

松の山家の女。いまだ見たる事な
が。うれふ我影のうつるを見て
母かと思ひかなしむ物語を作れ
り。

ワキ詞 「是は越後の國松の山家に住居する者にて候ふ。さても某
久しく添ひ馴れし妻におくれ。昨日今日とは存じ候へども。は
や三年になりて候ふ。又忘れ形見に姫を一人持ちて候ふが。あ
まりに母が事を歎き候ふ程に。對の屋を作り傍に置き候ふ。
又今日ハ彼が母の命日にて候ふ程に。持佛堂より立ち出で。焼香

松山鏡

まつやまかどみ 作者未詳

勢の屋 中古の家の建方へ。中
央に庭ありて主人の住む處と
し。其東西に相對せる家ありて
妻を對するは東の對西の對
なり。呼ぶなり。

松の山家の女。いまだ見たる事な
が。うれふ我影のうつるを見て
母かと思ひかなしむ物語を作れ
り。

彼母 願母を願て云ふ。

雲となり雨となる云々 楚の襄王陽臺と云ふ處を行幸ありし時。夢み神女來つて會合したるが。別れし時云ひけるやう。我の巫山の南ありて。朝ふら雲となり暮ふら雨とならん。習ひたると見て夢さめぬ。よりて神女の廟を立て、巫女廟と名づけたり。花と散り雪と消え云々 晋の石崇金谷と云ふ處の別館ありて。綠珠と云ふ美人を寵しつて。遊び居たるが。趙王倫を懼れ、緑珠を樓下へ投死し。崇は東市に斬られたり。

せばやと思ひ候ふ。

姫サシ「雲となり雨となる。陽臺の時とよめがたく。花と散り雪と消に。金谷の春ゆくへもなし。月日の道に關守なければ。母御に離れて今年のはや。既に三年の其日なり。

ワキ詞「あら無慙や。何事やらん姫が獨言を申し候ふ。いかん姫が有るか。父が來りたるぞ。持佛堂をあげ候へ。あら不思議や。何やらん物を立ちかくすやう候ふ。如何に姫。さても汝が母におくれし時。元結切り遁世せばやと存じ候ひつれども。一族どもの諫めにより。今まで浮世の住居たり。汝男子ならば父と一所に有るべけれども。女子なれば對の屋を作り置くなり。それ父が來りて姫よと呼ば。さもうれしげにて立ち迎ふべきにさはなくして。何やらん物を立ち隠すけしきの見にて候ふ。さてハ人の申すも誠に候ひけるや。實に汝は今の母を木像に

呪咀 禍多しむるやう祈る事。

おことも同じ蓮の縁と 姫も念佛の功德もて。死後母と同所へ往生すべとの言。浮ぶべき 極樂へ往生すべきの奈落 地獄の事。

宿若やきて 生前よりも若やかなる姿にての意。うつるは姫の顔なればなり。 添ひ添はれんと 母へ姫を添ひ姫の母を添ふの意。 鏡山立ち寄り給へ 古今集黒玉の歌み 鏡山いざ立ち寄りて見ゆかん 年經ぬる身は老いやしぬるといふを引く。近江の名所なり。

作り。 明暮呪咀するといふは誠か。何とて左様にあさましき心をば持ちて有るぞ。母を戀しく思は。 經念佛し用らひてこそ。死したる母も成佛し。おことも同じ蓮の縁となるべきにさはなくして。さやうに恐ろしき事をたくまば。正しく浮ぶべき母も奈落に沈み。おことも同じ罪に沈むべき事にあさましきよ。何とて物をば申さぬぞ。 姫 さやうに御しかり候は。かくとす申し候ふべし。いたはしや母御前。今を限りの御時。此鏡を和御前に取らするなり。母が姿を殘す形見なり。戀しき時は見るべしと。おほせ候ひし程に。ある時此鏡を見れば。母の面だてうつりしより。猶若やきて見給へば。地 さらはなからん跡までも。添ひ添はれんと面影を。殘させ給ひける。母御の慈悲ぞ有り難き。不審に思し召されば。見せ參らせん鏡山。立ち寄り給へ父御前。

三日月の影さす
宵とつゞけたり。三日月の影さす
あらぬ妹背の 新夫婦となりた
るを云ふ。妹背の川とつゞけ云
へるハ。玉座の流れての川は昔
の山の中を流るる吉野の川のよ
しや世の中とあるふよりよ
るべし。
半月の山の端み これも破鏡の
うちかたむいて 月の傾くと。
泣かんとして頭垂る事と。

もとの如くふなりふけり 再び
全面の鏡となりたるを云ふ。
名をみかく 名譽をかやかす
の意。

如何に罪人 母の幽靈此世にあ
り長居するを呼び来たるな
らば 罪人の佛法上の罪人にてす
なはち母を指す。
冥官 地獄の官人。
俱生神 罪人を責め苦しむる神
の名。
眼赤の燃わたつ 怒の強きを烈
火と譬へて熱鐵の詞とつゞけ云
ふ。
しんと 罪人を打つ杖。
玻璃の鏡の 囚籠の端みすあ
るを云ふ。破鏡の詞とつゞけ云
ふ。哀し見見る鏡。

の主となり。あらぬ妹背の川波の。立ち歸るべきやうもなし。
さては逢ふ事も。形見の鏡我ひとり。涙ながらに影見れば。半
月の山の端に。うちかたむいて泣くならで。せんかたもなき折
節に。母「いづくよりも知らざりし。地」鵲ひとつ飛び來り。陳
氏が眉に羽を休め。飛びめぐり飛びさがり。舞ふよと見しが不
思議やな。有りし鏡の破となり。故の如くになりけり。満月
の山を出で。碧天を照らす如くなり。是や賢女の。名をみかく
鏡なるべし。

後シテ「如何に罪人何とて遅きぞ。詞」片時の暇といひつるに 冥
官怒りをなし給へば。俱生神急ぎ苦患を見せよとの仰せを蒙り。
眼赤の燃わたつ熱鐵のしもとを振り上げて。地」空蟬の殻ハ婆
にやとまるらん。魂ハ冥途にもぬけの衣の。玻璃の鏡のいさぎ
よき。面前に引つとげ引き向け。あれ見よ婆にての罪科よ。

孝子の布らふ功力によつて 姫
の行ふ佛事よりなり。
頭玉座 是より母の成佛せし
座を云ふ。玉座ハ佛の座に給ふ
座の金色 佛の身体は金色なれ
ば云ふ。
兩臂をかみて ひちを折りま
する事。合掌のさなり。
御空に花降り虚空に音楽 佛來
迎のさまなり。
聞かざる見せず 聞くの文字ハ
音楽の聞こゆると。かゝる奇特
ハまだ聞かぬの意とを飛ねた
るべからず。
ハや地獄に歸るぞとて 俱生
神ハ罪人を召しつれ來りしな
るが。罪人たちが佛に變じ
たれば。今ハ用なしとて地獄に
歸るなり。
大地をかつばと 地獄ハ地下み
ある世界なれば云ふ。

太平記の文意を用ひて祝言能ふ仕
組みたるなり。よりてこゝに先
づ全文を示しおし。曰く。或時
かし周の穆王の時。云々。或時
西天十萬里の山川を一時を越
て。中天竺の金剛國に至り給ふ。
時少釋尊靈山より法華を説
き給ふ。穆王馬より下りて。會
坐し。穆王は。佛の身を禮し奉
りて。思ひて。一面を座へ移し奉
りて。問うて。汝ハ何れの
國の人か。穆王答へて云ふ。吾
ハ是れ震旦國の王なり。佛重ね
て宣はく。善い哉。今此會場に來

シテ「こゝ如何に 思議やな。地」こゝは如何に不思議やな。孝子の
吊らふ功力によつて。鏡の影をよくく見れば。頭玉座膚は
金色。兩臂をかみみて手を合はすれば。さながら菩薩の座像か
ど。御空に花降り虚空に音楽。聞かざる見もせぬ冥途の奇特。す
はや地獄に歸るぞとて。大地をかつばと踏み鳴らし。大地をか
つばと踏み破つて。奈落の底にぞ入りける。

枕慈童 まくらじどう 一名菊慈童 作者未詳

ワキ次第 山より山の奥までも。道あるや時代なるらん。詞 是ハ
魏の文帝に仕へ奉る臣下なり。扱も我君の宣旨には。關縣山の
麓より樂の水涌き出でたり。其水上を見て參れとの宣旨を蒙り。
唯今山路に赴き候ふ。急ぎ候ふ程に。是は早鬮縣山に着きて候
ふ。是に菴の見えて候ふ。まづ此あたりに徘徊し。事の子細を

たみ身を知る雨の降りぞまされ
 枕言葉 常ふ口くせふ言ひし
 しが恨めしきよしを口くせふ言ひ
 野干 加の異名。
 二句の例 佛とハ世語を漢文に
 具一切功德云々 佛ハ一切の功
 徳を具へ。慈悲の眼も衆生を
 觀。福壽ハ海の如く量りなし。
 この故み頂禮して尊び仕ふべし
 の意。
 謂ともなるや 拾遺集ハ「我佛
 の菊の白露けふ毎お幾世つもり
 て涙となるらん」とあるより來
 れる詞。したゞりの落ちつもり
 泉ハもとより酒なれり。 養老の
 古歌ふより云へり。
 敷くと云ひかけたり。手折り伏せ
 花を庭ふ 花を庭ふ代用して其
 上ふ臥すなり。 慈童が身ふ得
 たる七百歳を御譲り申すなり。

陰の水の。所は酈縣の。山のしたゞり菊水の流れ。泉はもとよ
 り酒なれば。酌みては勧めすくひては施し。我身も飲むなり飲
 むなりや。月も宵の間其身も酔ひに。引かれてよろ／＼よろ
 よろと。たゞよひ寄りて。枕を取り上げ載き奉り。實にも有り
 難き君の聖徳ど。岩根の菊を手折り伏せ手折り伏せ。敷妙の袖
 枕。花を庭ふ臥したりけり。 シテ元來藥の酒なれば。 地元來藥
 の酒なれば。酔ひにも犯されず其身も變はらぬ。七百歳を保ち
 ぬるも。此御枕の故なれば。如何にも久しき千秋の帝。萬歳の
 我君ど。祈る慈童が七百歳を。我君に授け置き。所は酈縣の山
 路の菊水。汲めやむすべや飲むとも飲むとも。盡きせじや盡き
 せじと。菊かき分けて山路の仙家に。そのまゝ慈童は入りけ
 り。

ウシテ 佐藤忠信
 ワキハ 源義経
 大和 伊勢三郎

佐藤忠信主君別れて唯一人吉野
 山み路みとせり。法師武者を
 引受け。空腹切つて落ち失す
 衆徒。吉野山の法師武者を云
 野干ハ。是までハ控方な
 りし。急ふ敵となりたるを云
 ふ。

忠信

たゞのぶ

古名 空腹 元清作

ワキ詞「是は判官殿の御内に。伊勢の三郎義盛にて候ふ。扱も我
 君判官殿は。此吉野を頼み御座候ふ處に。衆徒の詮議かはり。
 今夜夜討うつべき事一定のやうに申し候ふ間。此事申し上げば
 やと存じ候ふ。如何に申し上げ候ふ。義盛が参りて候ふ。 判官
 「此方へ來り候へ。 ワキ畏つて候ふ。 判官扱唯今は何の爲めに來
 りて有るぞ。 ワキさん候ふ唯今参る事餘の儀にあらず。當山の
 者ども心がはりし。今夜夜討を討つべき事一定のやうに申し候
 ふ間。此事申し上ぐべき爲めに参りて候ふ。 判官「是は誠に有
 るか。 ワキ「さん候ふ。 ワキ口惜しや我幾ばくの難を逃れ。命を
 重んずる事も。朝敵の虚名を晴らさん其爲めなり。うれに當山
 の衆徒夜討すべきを告げ知らする條。是れ偏へに天の御加護な

此所を開くべし。落つると云ふ
を思ひて開くと云へる。當時武
者の常態なり。

路次にて追つ付く。ちとより途
中にて就經み追ひ付くを云ふ。

夜討すべき事。初め「夜討す
べき」と云ひ。次「夜討す
べき」と云ひ。こゝに「夜
討すべき」と云ふ。筆を換へたる
法ある事を見るべし。

り。とにかくに我は夜に入り此所を開くべし。誰か一人留まり
防ぎ矢を射。其後命を全うして。路次にて追つ付くべき者やあ
る。義盛はからひ候へ。ワキ「御証畏つて承り儼然きりながら。
某を始め皆いづくまでも御供どこぞ存じ候ふべはれ。恐れなが
ら誰にても召し出だされて。直に仰せ付けられよかこと存じ候
ふ。判官「うれこそ我等が思ふ所なれ。さらば佐藤忠信を此方へ
と申し候へ。ワキ「畏つて候ふ。

ワキ詞「如何に此家の内に忠信の渡り候ふか。シテ詞「誰にて渡り
候ふぞ。ワキ「君よりの御使に義盛が参して候ふ。少し御用の事
候へば。御参りあれどの御事にて候ふ。シテ「畏つて候ふ。ワキ

「忠信参りて候ふ。判官「いかに忠信。當山の者ども心ざはりし。
今夜夜討すべき事一定のやうに申し候ふ。とにかくに我は夜に
入り此所を開くべし。汝一人留まり防ぎ矢を射。其後命を全う

皆人々御名残こそ。討死せん
も知る人からされ云ふ。

間道 ぬけみちなり。

かまへて 必ずの意。是より
詰の詞。

して。路次にてやがて追つ付き候へ。シテ「御証畏つて承り候ふ
さりながら。某が事は何處までも御供に召し具せられ候ひて。
餘人に仰せ付けられ候へ。若し辭し申す者あらば。其時御意を
ば背き申すまじく候ふ。判官「いや汝を頼む上は。とかくの事は
あるまじく候ふ。シテ「御意をばいかで背くべき。しかも一人撰
まれ申し。防ぎ矢仕れどの御証。弓矢取つての面目なれば。忝
なうこそ候へとよさりながら。我君を始め奉り。皆人々に御名
残こそ惜しう候へ。地「不覺の涙をおさへて御前を立つ。皆あは
れにぞ覺ゆる。

地「かくては時刻移るとて。我君を始め奉り。門前を出で、間道
より。ひそかに忍び出で給へば。シテ「忠信暫しは御供し。地「御
暇申し留まれば。かまへて命を全うして。御供に参らずは。不
忠なるべし心得よと。涙を流させ給へば。忝なと忠信は。唯

坊中。寺中経の宿りたれば云
わりなく 餘儀なくの意。

中さし 腹の真中さして負ひ
打ち番ひ 弓ふかくるを云ふ。
よつびいて よく引きての意。

刀を抜き持ちて 忠信がなり。
弓手 右の方。

ひとり留まる心の。便も涙なるらん。
法師武者一聲 吉野川。水のまじく騒ぎ來て。波打ち寄する嵐か
な。詞「いかに此坊中へ案内申し候ふ。シテ詞「今は夜更け人静ま
るに。案内申さんとは如何なる者ぞ。法師「わりなく頼朝よりの
仰せに隨ひ。當山の者ども判官殿の御迎へに参りたり。どう
どう出でさせ給ふべし。シテ「あらはかぐしや忝なくも。我君
に思ひかゝらんとや。よし先軍のこゝろみれ。此矢一筋受けて
見よと。地「高櫓に走り上り。中さし取つて打ち番ひ。よつ引い
て放つ矢に。眞先かけたる武者數多。一矢にどうとこころべは。
目を驚かし肝を消して。一度にどつとぞほめたりける。
地「刀を抜き放ちて。弓手の脇より馬手の脇へ。一文字に切ると
ぞ見じしが。空腹切つて櫓より。後の谷にころび落つ。敵の
兵これを見て。よれや者共首を取れと。一度にばつと寄り。打

地「伏しかくれ 経の跡をなり。
走りかゝつて身をかくすなり。
敵の忠信切つて見じしが。
眞向破れたるなり。
打つ太刀を 敵の切りかゝるな
受け流し 忠信が之を防ぐな
諸膝かけて云々 敵の兩膝を切
り放してうこを通り抜くるな
都をさして 義經の行方を尋
ねるためなり。義經記云「佐藤四
郎兵衛十月二十三日吉野に
よりて。夜中入り。判官の御ゆ
へを尋ねけり」とあり。

ち破り亂れ入り。をめき叫んで震動すれば。シテ「其隙に忠信は。
地「其隙に忠信は。かねて用意の小太刀おつ取り。ひそかに忍び
出で。茨からたち分けつくゞりつ慕ひ行くを。怪しむる者有り
て。あれは如何にと呼ばゝりかくれば。地に伏し隠れ。闇きを
便に忍ばんとするを。遁すまじとて走りかゝつて。拂ふと見え
しが眞向破れて二つになれば。つゞく兵大太刀かざし。打つ太
刀を受け流し。諸膝かけて切り放し通つて。今はかうよと遙か
の谷を。蝶鳥の如くに飛び翔つて。都をさしてぞ急ぎける。

吉野静

よしのしづか

清次作

狂言「シカぐ。ワキ詞「是は都道者にて候ふ。衆會の御座敷とも存
せず候ふ御免あらうするにて候ふ。狂言「さては都人にて候ふか。
判官殿の御行方を何と申し候ふぞ。ワキ「上は御一躰なれば。

ども打ち寄り語り合ひて居たる
度み。ワキの突然入り來たるを
見て「いや、な。かたじけなく
も吉野の茶會の座敷を何者なく
六浦れ草鞋で出たが」など云ふ
詞ありてワキの詞となるなり。
都道者 京都より吉野の御座敷
參詣する人を云ふ。
茶會の御座敷 茶徒茶會の座敷
云ふ。
上御座敷 賴朝の御座敷と兄弟
一體の中なるを云ふ。
御寺 吉野の御寺。
宿坊 參詣人の泊る寺。

御はからひ吉野山 御はから
ひ任せ給ふがよきの意みかけ
て云ふ。
後のとがめ 中なほりて後。義
經のとがめをも受けんものぞと
云ふ。
其契約を 忠信の請の供して吉
野を立ちのく約束を指す。
是の都道者ふて候ふが 茶徒の
聞かん事を傳りてなほ 作り云
法樂の舞 神佛に奉納する舞を
云ふ。
下向道 吉野山より歸路に向ふ
を云ふ。

終には御中なほらせ給ふべき由申し候ふ。 狂言「さていかやうに
て御落ち有りたると申し候ふ。 ワキ「十二騎とて承つて候へ。
狂言」十二騎ならば追つかけ討ちどめ申さう。 ワキ「暫く。十二騎
と申すども。餘の勢百騎二百騎にもむかふべし。かやうに申す
は都の者。當山を信じ參る上は。いかにも御寺も宿坊も。難な
くおはしませかじと。思へばかやうに申すなり。此上はともか
くも。 地「御はからひを吉野山。 吉よしなき申し事。洩れ聞こはな
ば判官の。後のとがめもおそろしや。御暇申し候はん。
シテ「とても靜は忠信が。其契約を達へじと。舞の裝束ひきつく
ろひ。忠信遅しと待ち居たり。 ワキ「是は都道者よて候ふが。
法樂の舞の由承り。下向道を念れて候ふ。はやく舞を始め給
ふべし。 シテ「都の人と聞けばなつかしや。判官御道せばき事。
世上の聞こはいかなるぞ。都人こゝ知るべけれ。 ワキ「終には

かつて知らずな 勝手の社みか
けて云ふ。此神前ふて舞を奉納
するなり。

げふ此御代も靜が舞 御代も靜
かみ治まる意みかけて云ふ。

舞くうつりちつししし 神の御
影を袖みうつし給ふ事。八幡の
行敷和尚みける如き例あり。
巴月八幡など見るべし。

謔言の水上 義經をあしきまふ
申しなしたる原因を云ふ。

御中なほらせ給ふべしと。聞くより人々先非を悔いて。皆々恐
れ申すなり。 シテ「さてはうれしやくはしくも。知らせ給ふか都
人。 ワキ「あまりに事のび時うつりぬ。心得給へ舞の袖。 シテ
「げにのう言葉多き者は品すくなし。かやうに我等言の葉過ぎ
ば。なか／＼人もあやしめて。もしもそれとか三吉野の。 見かつて
知らずな。 一「靜かに離せや靜が舞に。 地「衆徒も時刻や移すら
ん。 シテ「神こそ納受ましますらめ。 地「げに此御代も靜が舞。
シテ「然るに彼判官は。神道を重んじ朝家をうやまひ。 地「ひ
とへに忠勤をぬきんで、私の心さらになし。 シテ「人は譏し申す
ども。 地「神は正直の頭に宿り給ふなれば。靜が舞の袖に。暫く
うつりおはしませ。我君を守り給へと。祈るうあはれなりける。
クセ「そもく景時が。うの謔言の水上を。思へば渡邊や。流るゝ
水に滿汐の。逆櫓たてんと浮船の。梶原が申し事。よも順義に

すい治めし。正直を本として
世を治むるの意。
きこしめし直され。義經の罪な
き由を聞き入れ思ひ直す事。
執節の勅。天皇の御代理として
節を持し天下を治めよとの勅
命。
分國。義經の分業して治むべき
國を云ふ。
さあらの當山の。吉野の落陽の
西南なれば義經の配下となるべ
きの意。
歸依。神佛を信じ敬ふ如く
義經の從ひ仕ふる事。
御答の候はじ。頼朝より答めら
る事。はじの意。此一言。あて
申信。あてにされたるなり。
片岡増尾。義經の指の耶
麻。安宅藤持などくらへみるべ
し。

て候はじ。されば義經は。すぐに治めし三吉野の。神のちかひ
の眞あらば。頼朝も聞こしめし直され。義經執節の勅を受け。
洛陽の西南は。是れ分國となるべし。さあらは當山の。衆徒と
どくく參洛し。歸依渴仰の御袖に。めぐみをいただき給ふべし。
あなかしこ。不忠なき給ふな。御答は候はじ。シテ「但し衆生中
に。獨いきどほり深うして。地」進みて追つかけ給ふとも。其名
きこゆる人々を。討ちとゞめ申さんは。片岡増尾鷲の尾。さて忠
信はならびなき。精兵よ人々に。防ぎ矢射られ給ふなど。か
たればげには衆徒中に。すむ人こうなかりけれ。
シテ「つづやつづ。賤の芋環くり返し。地」昔を今になすよこもか
な。あまりに舞のおもしろさ。時刻をうつして進まぬもあり
けり。又は判官の武勇に恐れて。よし義經をばおとし申せと。
詮議を加ふる衆徒も有りけり。さるほどに時うつつて。主君も

しづやつづ云々。舞が舞曲中の
歌なり。次の二人静ふくはしく
云ふべし。

心しづかふ願成就して。靜の名
を含みて云ふ。法衆の舞を神の
納受して。義經を守り給へるの
意。

ワツシテ
花摘女
大和神職
靜の亡魂。花摘の女。乗り移りて昔
を語り。亡魂。形をあらわし
て二人共。舞をよす事を作れり。
前の吉野靜。現在の靜をあらわ
し。この二人。解の過去の靜をあ
らわしたる。作と知るべし。
勝手の御前。吉野山王堂より
少のぼりたる。處あり。今の
山口神社と云ふ。
茶摘川。又茶摘川とも書く。吉野
川の上あり。

見渡せば松の葉白き吉野山。い
つもりし雪。かきさるらん。
深山は松の雪だに消えなく。都
の野邊の若菜摘む。頃
し。深山と都の時の相違。
木の芽春雨。木の芽の張り出づ
る。意。かきさるらん。とあ
り。吉野の花も今やさくらん」とあ
り。

今は。忠信が謀にて。難なく遙かに落とさし申しつ。心しづかに
願成就して。都へとてこそ歸りけれ。

二人静

元清作

ワキ詞「是は三吉野勝手の御前に仕へ申す者よて候ふ。扱も當社
におき御神事さまく御座候ふ中にも。正月七日ハ茶摘川より
若菜を摘ませ御前に備へ申し候ふ。今日に相當りて候ふ程に。
女どもに申し付け。茶摘川へ遣はさばやと存じ候ふ。どうく
女どもに茶摘川へ出でよと申し候へ。
ツレ一聲「見渡せば。松の葉白き吉野山。幾世積りし雪ならん。
サシ「深山には松の雪だに消えなく。都ハ野邊の若菜摘む。頃
にも今やなりぬらん。思ひやるこそゆかしけれ。歌「木の芽春雨
降るとても。猶消に難き此野邊の。雪の下なる若菜をば。今幾

今哉日ありて 古今集ふ「春日野の飛火の野守出で、見よ今哉日ありて若菜つみし」とあり。春立つと云ふはかりふや三吉野の山も霞みてふ朝の見ゆらん。拾遺集悲吟の歌なり。春の立つと聞きたるのみにてはや吉野山の霞みて見ゆる心地するの意。「白雪の」とつゞけたるは新古今集ふ「三吉野の山も霞みて白雪のふりにし里に春は来ふけり」とあるふよりなり。

經書いて 經文を尋さしるす法なり。死者の冥福を祈る最第一の法なり。

かまひて 必ずの意。

水莖 手師の事。

日有りて摘まゝし。春立つと。云ふばかりにや三吉野の。山も霞みて白雪の。消はし跡こら道となれ。

シテ詞「のうくあれなる人に申すべき事の候ふ。ツレ詞「如何なる人にて候ふぞ。シテ「三吉野へ御歸り候はゞ言傳て申し候はん。

ツレ「何事にて候ふぞ。シテ「三吉野にてハ社家の人。其外の人々

にも言傳て申し候ふ。あまりに妾が罪業の程悲しく候へば。一

日經書いて我跡吊ひてたび給へと。よくく仰せ候へ。ツレ「あ

ら恐ろこの事を仰せ候ふや。言傳てをば申すべしさりながら。

御名をば誰と申すべきぞ。シテ「まづく此由仰せ候ひて。もし

も疑ふ人あらば。其時妾御事につきて。委しく名をば名乗るべ

し。かまひてよくく届け給へと。地言「夕風迷ふあだ雲の。憂き

水莖の筆の跡。かき消すやうに失せにけり。

ツレ詞「かゝる恐ろしき事こそ候はね。急ぎ歸り此由を申さばや

と思ひ候ふ。如何に申し候ふ。唯今歸りて候ふ。ワキ詞「何とて遅

く歸りたるぞ。ツレ「不思議なる事の候ひて。遅く歸りて候ふ。

ワキ「扱いかやうなる事ぞ。ツレ「菜摘川の邊にて。何處ともなく

女の來り候ひて。あまりに罪業の程悲しく候へば。一日經書い

て跡吊ひて賜はれど。三吉野の人。取り分け社家の人々に申せ

どは候ひつれども。誠しからず候ふ程に。申さじとは思へども。

なに誠しからずとや。うたてやなさしも頼みしかひもなく。誠

しからずとや。唯よそにてころ三吉野の。花をも雲と思ふべけ

れ。近く來ぬれば雲と見し。櫻は花も顯はるゝ物を。あら恨め

この疑ひやな。ワキ詞「言語道斷。不思議なる事の候ふ物かな。狂氣して候ふは

如何に。扱如何やうなる人の付き添ひたるぞ名を名乗り給へ。

跡をば懇に吊ひて參らせ候ふべし。ツレ「何をか包み參らせ候ふ

申さじと思へども 以上菜摘

女の正氣まで云ふ詞。 以上菜摘

なふ誠しからずとや 此れより

さしも頼みし 菜摘川ひてあれ

ほと傳言を頼みたるふの意。

櫻の花も顯はるゝ物を 詞花集

頼政の歌ふ「深山木の其梢にも

見えずりし櫻の花もあらはれふ

けり」とあるを引く。疑なき身

つゝまじながら 耻づかしなが
らうの意。袖ふて包むの意ふか
けて云ふ。
静か申さん 名の文字を暗
示す。

袴の精好 精好の袴を指して。
縦を少し太く縫ひたるもの。
水干 上着の装束。紗またハ
生絹などよて作る。

べき。判官殿に仕へ申せし者なり。ワキ「判官殿の御内の人は多
き中にも。殊に衣河の御最期まで御供申したりし十郎權頭。ッ
兼房は判官殿の御死骸。心静かに取りをさあ。腹切り焔に飛
んで入り。殊にあはれなりし忠の者。されどもうれにはなき物
を。誠は我は女なりしが。此山までは御供申し。こゝにて捨て
られ参らせて。絶にぬ思ひの涙の袖。地「つゝまじながら我名を
ば。静かに申さん恥づかしや。
ワキ詞「扱は静御前にてましますかや。静にて渡り候はゞ。かく
れなき舞の上手にて有りしかば。舞をまうて御見せ候へ。跡を
ば懇に吊ひ申し候ふべし。ッ「我着し舞の装束をば。勝手の御
前に納めしなり。ワキ「扱舞の衣裳は何色ぞ。ッ「袴の精好。ワ
キ「水干ハ。ッ「世を秋の野の花づくし。キワ詞「是ハ不思議の事
なりとて。寶藏を開き見れば。實にく疑ふ所もなく。舞の衣

茶摘の女と思ふなよ 今ハ静御
前ハ山陰の云々 新古今集
川近山陰の云々 新古今集
吉野なる山陰の川近山陰
の歌なり。もといハ万葉集
の歌なり。
渡津の國西成郡。
神崎 同國河邊郡。

科なかりしも科ありけるかと
我思ふハ全く罪なけれど。天命
ふよりて瀆きもとされしかと思
へハ。何かの罪業ふよりてなら
んと心細きの意。
のどかならざる 心のすうつか
らふかけて云ふ。花の散るを見て
寐もせぬ夢と 現在の夢の世を感じるの意。

裳の候ふ。是を召されてとくく御舞ひ候へ。静御前の舞を御
まひ有るぞ。皆々寄りて御覽候へ。ッ「實に恥づかしや我なが
ら。昔念れぬ心とて。ワキ「ともなつかしく思ひ出での。ッ「時
も來にけり。ワキ「静の舞。
ッ「今三吉野の河の名の。後シテ「茶摘の女と思ふなよ。川淀
近き山陰の。香もなつかしき袂かな。二人「扱も義經兎徒に準せ
られ。既に討手向ふと聞てはしかば。小船に取れり。渡邊神
崎より。押し渡らんとせしに。海路心に任せず難風吹いて。も
どの地に着きし事。天命かと思へば科なかりしも。地「科有りけ
るかど。身を恨むるばかりなり。クセ「さる程に。女弟々々道
せばき。御身となりて此山に。分け入り給ふ頃ハ春。所ハ三吉
野の。花に宿かる下臥も。長閑ならざる夜嵐に。寐もせぬ夢と
花も散り。まこと一榮一落。まのあたりなる憂き世とて。又

男神子云。男ふて神慮をうか
歌占。歌よりて占ふ事。
如何に渡り候ふか。子方を誘ひ
出す詞。

引くも白木の。引くも若き意
手束弓。振りの處を大きく作り
陰陽の二神云々。伊弉諾伊弉册
の二神が夫婦の道を始め給ふと
て。女神まづ「あなまやしむを
とこそ「唱へよ。男神」「あな
みやしえをとめを」と答へ給ひ
し事。古事記にも見ゆ。是れ
歌の始なる由古今集の序其他の
ものにも云へり。

占を引き候ふが。けしからず正しき由を申し候ふ程に。今日ま
かり出で占を引かばやと存じ候ふ。如何に渡り候ふか。歌占の
御所望にて候はゞ御供申さうするよて候ふ。

シテ一聲「神心種とてころなれ歌占の。引くも白木の手束弓。サシ

「夫れ歌は天地ひらけし始めより。陰陽の二神天の巷より行きあ

ひの。小夜の手統結び定めし。世をまなび國を治めて。今も道

ある妙文たり。歌占問はせ給へや。歌占問はせ給へや。神風や。

伊勢の濱荻名をかへて。葎といふも葎と云ふも。同じ草なりと

聞く物を。所は伊勢の神子なりと。何はの事も問ひ給へ。人心

引けバひかる、梓弓。伊勢や日向の事も問ひ給へ。

ツレ詞「如何に申すべき事の候ふ。シテ詞「何事にて候ふ。ツレ

「扱御身は何くの人にて渡り候ふ。見申せば若き人にて候ふ

が。何とて白髪とはなり給ひて候ふ。シテ「實にく、普く人の

すこたりを申して候ふ。神職を
捨て、旅分出でたる罪を謝する
事。

短冊の歌を遊ばされ候へ。詞み
上げ給へる意。

何々。詞み起す詞。
北の山々。紫式部の歌な
り。蘇命路の山、須彌山と云ふ
想像界の山。

是ハ父の事を。歌よりて判断
する詞。

邊涯一片の風。かたはらより一
吹き吹き来る風の意。かりうめ
の風邪を云ふ。

御不審にて候ふ。是は伊勢の國二見の浦の神職なるが。我一見

のために國々を廻る。或時俄に頓死す。又三日と申すよみみ

一る。うれよりかやうに白髪となりて候ふ。是も神の御咎めと

存じ候ふ程に。當年中に歸國すべきとおこたりに申して候ふ。

ツレ「扱は其謂よて候ふな。さらば歌占を引き申し候ふべし。

シテ「やすき間の事一番に手に當りたる短冊の歌を遊ばされ候

へ。考へて参らせ候ふべし。ツレ「承り候ふ。教へにまかせ短冊

を取り上げ見れば。何々北は黄に。南は青く東白。西くれなぬ

の蘇命路の山。かやうに見えて候ふ。シテ「須彌山を讀みたる歌

にて候ふ。是ハ父の事を御尋ね候ふな。ツレ「さん候ふ親にて候

ふ者此程所勞仕り候ふ間。生死の境を尋ね申し候ふ。シテ「心得

申し候ふ。委しう判じて聞かせ申さう。夫れ今度の所勞を尋ね

るに。邊涯一片の風より起つて。水金二輪の重結は顯はる。夫

水金二輪の重結。大千世界の
輪と云ふ地層が重なり結びつ
たるなりと。佛書に見ゆ。風邪
おもふて他病を引き出した
るの意。
四州常樂の波うかび。須彌山
の四方の四つの世界ありて東
南西北。南閻浮提。西閻浮提。東
閻浮提。北閻浮提。その四州の永
なる樂しみの中央に須彌の屹立
せるを云ふ。
金銀云々。佛書に須彌の事を説
きて。東面は黄金。南面は瑠璃
。西面は白銀。北面は水晶。南
面は五色の雲。五色の雲の意。
命期六交。命ハ六十を一期とす
る事。草木の潤み枯る。時ハ赤
くなる故に。人間老衰の期を譬
へて云ふ。

れ須彌は金輪より長じて。其丈十六萬由旬のいきほひ。四州常
樂の波にうかび。金銀碧瑠璃玻璃加寶の影。五重色空の雲に移
る。されば須彌の影うつるによつて。南瞻部州の草木みどりな
りと云へり。扱ころ南は青しとは讀みたれ。こゝに又父の恩の
高き事。高山千丈の雲も及びがたし。されば父は山。染色とは
風病の身色。しかも生老病死の次第を取れば。西くれなゐと見
わたるは。命期六交の滅色なれば。あう是は既に難義の所勞な
れども。こゝに又染色とは。聲を借りたる色どりにて。文字に
は蘇命路なり。よみがへる命の路と書きたれば。誠に命期の路
なれども。又染色よ却來して。二度こゝに蘇生の壽命の。種と
なるべき歌占の詞。頼もしく思召され候へ。ツト「あらうれし
や。扱は苦しかるまじく候ふか。シテ」中々の事御心安く思召
され候へ。ツト「近頃祝着申して候ふ。又是なる幼き人も占の所

雲のかひこの中の云々。萬葉集
の長歌「雲のかひこの中。時
鳥ひと生れし。しが父ふ似
ての鳴かず。とあるを少しく替へ
かす云々」とあるを少しく替へ
て一首の短歌とせしなり。雲の
中ひと生れし。しが父ふ似ての
鳴かず。とあるを少しく替へし
あるなり。かひこの中の事し
は「已れ時鳥の」の意。こゝに
「や逢はねばこそ。父ふ未だ逢
はねばこそ。占の未だ合はねばこそ」
の意。當面黄舌の轉り。當面はまのあ
たり。黄舌はまた音聲の若
き事。

望にて候ふ。ツテ扱はおことも占の所望にて候ふか。以前の如
く一番に手に當りたる短冊の歌を御讀み候へ。子「鶯のかひこの
中の時鳥。しやが父に似てしやが父よ似ず。シテ」是も父の事を
御尋ね候ふな。子「さん候ふ父を失ひて尋ね申し候ふ。シテ」是ハ
はや合ひたる占にて候ふ物を。子「いや逢はねばこそ尋ね申し候
へ。シテ」とりとては占に偽りよもあらじ。鶯に逢ふ言葉の縁あ
り。又かひこの中の時鳥とも云へり。時も卯月程時もありあ
ひたり。や。今鳴くは時鳥にて候ふか。子「さん候ふ時鳥にて候
ふ。シテ」おもころしく。當面黄舌の轉り。鶯の子は子なりけ
り子なりけり。不思議や御身は何處の人乎。子「伊勢の國の者。
シテ」在所は。子「二見の浦。シテ」父の名字は。子「二見の太夫度會
の何某。シテ」扱其父は。子「別れて今年八ヶ年。シテ」扱おことの
幼名は。子「幸菊丸と申すなり。シテ」こはそも神の引き合はせか。

蜀と子の二見 二人の意みかけ

君が住む越の白山知らねども(雪のまに(跡は尋ねん) 古今集の歌
四鳥の別れ むかし所士の桓山と云ふ山に鳥ありて四子を生かしたるが、羽獲すてお成りて四海を飛びわかれんとするを、蜀鳥の悲しむたる古事家言に出づ。白氏文集にも、四分分飛の句あり。

神氣が添うて 神が乗り移りて正氣を失ふ事。

是ころ父の何某よ。子「不思議や父にてましますかど。云はんとすれば白髪不の。シテ「身は白雪不の面はすれ。子「されども見れば我父の。シテ「子は子なりけり。子「時鳥地の。程経て今う廻りあふ。占も合逢ひたり親と子の。二見の占方浦の。正ましき親子なりける。實にや君が住む。越の白山白知らねども。ふりにし人のゆくへとて。四鳥ての別れ親と子に。二度逢たふう不思議なる。

ツレ詞「かゝる不思議なる事こそ候はね。扱は御子息にて候ふかシテ詞「さん候まふ疑ひもなき我が子にて候ふ。是も神の御引き合はせと存じ候ふ程に。やがて伴なひ歸國せうするにて候ふ。ツレ「近頃めでたき御事にて候ふものかな。又人の申され候ふは。地獄の有様を曲舞くまに作りて御うたひある由承り及びて候ふ。とても事の謠うて御聞かせ候へ。シテ「やすき御事にて候へども。此一曲を狂言すれば。神氣かみけが添うて現まなくなり候へども。よし

月のゆふへの云々 死ぬる際ふ往生の妨になるの意なるべし。後世是より曲舞の文句。人問界の無常が無常の虎の聲。人問界の無常が身おしよするを。恐るべき虎身みへて云々。雪山は釋迦如來の修行せし山なれば。この鶴聲が迷の夢を覚ます心なるべし。

須臾に しばらくの間を云ふ。

利那に 一念と譯す。瞬間の意。釋迦大師の云々。此世みて佛教の背しと云々。來世にて地獄の閻魔法王の云々。名譽利益を助くれども。名譽利益を現世の身を助くれども。北印の煙を免かれず。此世の英雄ゆうゆうも死を免かれぬ。此世の英意いも北印の煙けむりの火葬くわいなり。誰か黄泉の責めはさる。生前の恩愛の奴隷ことなれども。死生

よし歸國の事なれば。面々名残の一曲に。現まなき有様見せ申さん。

地次第「月のゆふへの浮雲は。後の世夜の迷ひなるべし。シテクサ「きのふもいたづらに過ぎ。今日も空しく暮れなんとす。地「無常の虎の聲肝きんに銘じ。雪山の鳥鳴いて思ひを痛ましむ。シテサシ「一生は唯夢の如し。誰か百年の齡を期せん。地「萬事は皆空し。いづれか常住の思ひをなさん。シテ「命は水上の泡。地「風に隨つて經めぐるが如し。シテ「魂は籠中の鳥の。地「開くを待ちて去るに同じ。消ゆる物は二度見た見えず。去るものは重ねて來らず。クセ「須臾しゆんに生滅しやうめつし。利那に離散す。恨めしきかなや。釋迦大師の慙あは懃んの教を忘れ。悲しきかなや。閻魔法王の呵責かの言葉ことばを聞く。名利身を助くれども。いまだ北印の煙を免かれず。恩愛心おんあいこころを惱なませども。誰か黄泉の責めに隨はさる。是が爲めに馳走す。所得

して地獄の阿鼻を受くる時まで
 はがめめ此世かぞりの恩恵のた
 めか。奔走し身を苦しめたりと
 て何の利益かあらん人の意。此
 を離れ得ぬ為め。親を尋ね子
 を深き迷ひある。其しわが
 今なれば。佛法を對して執着心の罪人が
 違き例み非ず。目前の境界が
 人となり我行く。他人の生を
 誰か又常ならん。誰一人として
 常住不滅のものなし。ことごとく
 三界無安猶如火宅。法華經變
 品の文句。迷の世界を三つに分
 ちて欲界色界無色界とせり。人
 間界は此内み含まる。なり。故
 お此世に住みて一日片時も安心
 出来ぬさま。火の燃ゆに付した
 天の仙向し死苦の身なり。天人も
 死の苦痛をば免かれぬ身とな
 いはんや下劣貧賤の報に於てを
 天罰なは然り。ましてや下劣た
 り人問みたるの惡報を受け得たる
 死の苦しみを受け得ぬ。又地獄
 の苦痛を取ぬるを云ふ。又地獄
 業の苦しみを指添ふる。生前の作
 業また阿鼻の苦しみを加ふるを

いくばくの利がや。是によつて追求す。所作多罪なり。暫く目
 を塞いで往事を思へば。舊友皆亡す。指を折つて故人をかろふ
 れば。親疎多くかくれぬ。時移り事去つて。今なんぞ渺茫たら
 んや。人となり我行く。誰か又常ならん。シテ「三界無安猶如
 火宅。地」天仙向し死苦の身なり。いはんや下劣貧賤の報に於て
 をや。なか其罪かろからん。死に苦しみを受け重ね。業に悲
 しみ猶添ふる。さんす地獄の苦しみは。春播りて身を斬る事。
 截斷して血狼籍たり。一日の其内に。萬死萬生たり。劔樹地獄
 の苦しみは。手に劔の樹をよどれば。百節零落す。足に刀山踏
 む時は。劔樹共し解すとかや。石割地獄の苦しみは。兩崖の大
 石もろくの罪人をくだく。次の火煩地獄は。かうべに火燄を
 いたゞけば。百節の骨頭より。燄々たる火を出だす。或る時は
 焦熱大焦熱の焰にむせび。或る時ハ紅蓮大紅蓮の氷に閉ぢられ。

云ふ。
 鐵釘頭をくだき。火燥あなうらを焼く。シテ「飢にては鐵丸を呑
 み。地」渴しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり。
 餓鬼の苦しみも無邊なり。畜生修羅の悲しみも。我等にいかで
 増さるべき。身より出だせる科なれば。心の鬼の身を責めて。
 かやうに苦をば受くるなり。月の夕べの浮雲は。後の世の迷ひ
 なるべし。シテ「後の世の闇をば何と照らすらん。地」胸の鏡よ心
 にひすな。
 シテ詞「あら悲しや唯今参りて候ふに。是程はなどや御責め有る
 ぞ。あら悲しや。ツレ」不思議や又彼人の神氣とて。面色變は
 りとも現なき其有様。シテ「五体さながら苦しめて。ツレ」白髪は
 亂れ逆髪の。シテ「雪を散らせる如くにて。ツレ」天に叫び。シテ
 「地に倒れて。地」神風の一採もんで。時しも卯の花くせしの。五
 月雨も降るやとばかり。面には白汗を流して。袂には露の繁玉。

鐵釘頭をくだき。火燥あなうらを焼く。シテ「飢にては鐵丸を呑
 み。地」渴しては銅汁を飲むとかや。地獄の苦しみは無量なり。
 餓鬼の苦しみも無邊なり。畜生修羅の悲しみも。我等にいかで
 増さるべき。身より出だせる科なれば。心の鬼の身を責めて。
 かやうに苦をば受くるなり。月の夕べの浮雲は。後の世の迷ひ
 なるべし。シテ「後の世の闇をば何と照らすらん。地」胸の鏡よ心
 にひすな。
 シテ詞「あら悲しや唯今参りて候ふに。是程はなどや御責め有る
 ぞ。あら悲しや。ツレ」不思議や又彼人の神氣とて。面色變は
 りとも現なき其有様。シテ「五体さながら苦しめて。ツレ」白髪は
 亂れ逆髪の。シテ「雪を散らせる如くにて。ツレ」天に叫び。シテ
 「地に倒れて。地」神風の一採もんで。時しも卯の花くせしの。五
 月雨も降るやとばかり。面には白汗を流して。袂には露の繁玉。

千木もゆがまず。千木の屋根の上も形をなして。高き差し出かたもさうす。かたそす。二木の木もて行きちがはせたる云ふ。一本の方を取り離して用ふる事おほし。そらす。そりかへり曲らぬの意。
 正直方便の云々。神の佛と違ひて。衆生を濟度する方便を用ひず。正直を主とし給ふが故み立てるの意。上は對して菩提の道を求め給ふが故。其神慮を表して古松老樹が天をさほふまを繁茂せるの意。菩提のさとりを得る事ふて佛道の極處なり。神佛混合の時代の思想なりと知るべし。
 神風も心安くぞまかせつる櫻の宮の花(の盛)。經古今集西行の歌なり。神風の事ゆゑ狼狽ふの吹かせたるの意。櫻の宮の内宮をまかせたるの意。木葉開耶姫を祭の近くふあり。
 月讀の森。内宮七別宮の一つなり。月讀尊を祭る。佛が偈ふ神とあらり。和光同塵。佛が偈ふ神とあらり。佛の命。垂仁天皇の皇女みて。伊勢の齋宮たりし御方なり。官居の御命。大神宮の御座あるべき土地を尋ね給ふなり。此事後醍醐命世記に本しく見ゆ。婆娑のけがれ給ひしを云々。倭姫命世記に「五十鈴の川上へ天照大御神を(遷幸なし奉る時)。河原にして倭姫命。御姿の長くけがれ侍りけるを洗い給へり。それより御姿置かずして柱の根を土を掘り立つる建築法なれ云云。地下の岩根までの敷みて堅固なるを祝ふことなり。月讀尊にて大神宮の御座なり。

さまなり。ワキ「其時解脱合掌して。地」其時解脱合掌して。觀念をなしければ。不思議や天つ空よりも。素蓋鳴顯はれ出で給へり。
 地「即ち素蓋鳴顯はれ給へば。さしもに猛き六天なれども。恐れをなして見えたりける。素蓋鳴なほも怒り給ひ。地素蓋鳴なほも怒り給ひて。寶捧を取り直し打たんとせしに。飛び違ひ須彌に。上らんとするを引きとめ。大地に打ち伏せて。忽ち散々に苦を見せ給へば。今より此土に來るまじと。誓ひをなせば。尊は雲居に上らせ給ひ。魔王は通力盡き果て。虚空に跡なく失せにけり。

皇子素蓋鳴。共に伊非諾諾の御子にて御兄弟なれば。枝を連ねると云ふ。木結四手に神葉添へ。今は御行ひの妨なるべければ。後列御中におうはれ來んとたり。御法の曉。念佛三昧經の大地の震動も六種ある事三へり。一は動揺等震動。二は震響等震動。三は雷響等震動。四は吼響等震動。五は起震等震動。六は起震等震動。これなり。第六天。打ちこらす爲めに御手お持ち給ふ打杖を云ふ。須彌山。須彌山のぼりて天に歸らんとするなり。

ワキ次第「山又山の行く末や。雲路のしるべなるらん。詞「是は三熊野より出でたる客僧にて候ふ。我は未だ松島平泉を見ず候ふ程に。此春思ひ立ち松島平泉へと急ぎ候ふ。道行「幾瀬渡りの野洲の川。彼織女の契り待つ。年に一夜はあだ夢の。醒が井の宿を過ぎ。膽吹おろしの音にのみ。月の霞むや美濃尾張。老を知れどの心かな。詞「急ぎ候ふ間。是は早上野の國佐野と申す所に着きて候ふ。此所にて宿を借らばやと存じ候ふ。シテツレ一聲「法に依る。道すと作る舟橋は。後の世かくる頼みか

船橋

ふなばし

古名

佐野船橋

元清作

萬葉集の歌を里人の痴情も迷ひて。中の一は上つたの巻上野國歌。はなはしとありて。佐野の舟橋。如くは。別々の舟を繋ぎ合はせ作れる事。あはれ。我は決して遠ざかる。松島平泉。共に陸奥の名所。まづ上野を過ぐる由來を示すなり。國領守山と所宿の間あり。都より道の中を云へるなり。新都探果ふ「道かななる三上の嶽を。目みかけて幾瀬わたりのやすの川波「さもあるを天上にありと云ふ。安の川の安の川に古事記な。どに見えて。八百方の神の集川。給ふ處なるを。七夕の天の集川。の一名として歌ふよみ習はし。

屋が井の宿。馬場より一里ほど
 向ふにあり。夢の醒むると云ひ
 明けたり。藤吹山は近江美濃
 の境なり。西行の歌に「あはつ
 かないなきあつらしの風先朝妻
 舟は逢ひやしらん」とあり。朝妻
 舟は逢ひやしらん二十町ほど東に
 あり。高崎より二十町ほど東に
 あり。
 法に依る道がと作る云々。因果
 廻り「今の身で善くして善く
 造りて人を善くするものは所
 生の處七層具足し。衆人敬慕し
 て善くせしと云ふと云ふ」とた
 正法を説く。善くして善くして
 河津に於て船橋を造り。善心を
 以て衆生を度し。衆生を作さ
 五欲樂を受け。人中おして王
 衆となる。などありて功德とす
 る事なれば云ふ。但し徳文の
 舟もて作れる橋の事云ひかけ
 たり。
 往事渺茫として云々。白氏文集
 あり。往事渺茫と云ふは過去を
 用ひて夢の文字を呼ぶ。出だした
 り。往事の過去を呼ぶ。出だした
 かみ道なき云々。吉野の事な
 り。吉野の事な。吉野の事な。吉
 野の事な。吉野の事な。吉野の
 事な。吉野の事な。吉野の事な。
 今も経へべきはかなき世の譬
 と見るべし。片はしから経へぬ
 猶敷添へて。知らず猪舟の敷添ふるの
 舟はよ堀江の川の水際に（來お

な。シテサシ「往事渺茫として何事も。見残す夢の浮橋に。二人「猶
 敷添へて舟きほふ。堀江の川の水際に。寄るべ定めぬあだ波の。
 浮世に歸る六つの道。遁れかねたる心かな。戀しき物をいに
 しへの。跡はるくと思ひやる。前の世の。報いのまゝに生ま
 れ来て。心にかげばとても身の。生死の海を渡るべき。船橋をつ
 くらばや。二河の流れはありながら。科は十の道多し。誠の橋
 を渡さばや。
 シテ詞「如何に客僧。橋の勤めに入りて御通り候へ。ワキ詞「見申
 せば俗体の身として。橋興立の志し。返すくも優しうこそ候
 へ。シテ「是は仰せとも覺にぬ物かな。必ず出家にあらねばとて。
 志しのあるまじきにて候はず。まづ勤めに入りて御通り候へ。
 ワキ「勤めには参り候ふべし。扱此橋はいつの御宇より渡された
 る橋にて候ふぞ。シテ「萬葉集の歌に。東路の佐野の船橋取りは

つ、鳴く（部鳥か） 萬葉集
 の歌。舟はよ堀江の川の水際に
 舟を渡りて上り下りする事。
 堀江の川は難波堀江と云ふ。
 六つの道。冥途の六道として地
 獄。餓鬼。畜生。修羅。人。天の世
 界を云ふ。迷ひある身。此六道
 をめぐりくするなり。
 報の果報として迷へる世界を生
 まれしを云ふ。
 心みかけは。善く心をはか
 てハの意。すなはち無常の心が
 成佛を妨ぐるなり。
 生死の海をわたるべき。生死の
 迷ひある人間界を去りて。恒り
 二河の流れありながら。二河
 の岸を渡りぬかんの意。
 合受水にて成れる水河と云ふ。
 其はとりみの白道ありて人此
 道をかき。道のなたる人あり
 りて追ふたれと云ひ。向ひの
 岸も火の二河を恐れ渡れと
 呼ぶ。水火の二河を恐れ渡れと
 相違なく善所に至り。疑ひを
 りて時踏すれ六賊の難み多
 の疎み云へり。こなたの人の難
 難。向ひの人の阿彌陀。六賊の
 眼耳鼻舌身意の六根より起る欲
 の等。一流れのありながら。二
 所。至るべき道はあれども。九
 十の道。十羅刹同じ。一か殺
 生。二か偽善。三か邪淫。四か
 口。七か。八か。九か。十か。

なしと。讀める歌の心をば知ろし召し候はずや。ツレ「いや左様
 に申せば恥づかしや。身のいにしへも淺間山。シテ詞「漕がれ沈
 みし此河の。二人「さのみは申さじさなきだに。苦しみ多き三瀬
 川に。浮かふ便りの舟橋を。渡してたばせ給へとよ。ワキ詞「げ
 にく親しとくればの物語。扱はふりにし船橋の。主を助けん
 其爲めか。シテ詞「殊更是は山伏の。橋をバ渡し給ふべし。ワキ
 そも山伏の身なればとて。取り分け橋を渡すべきか。シテ「さの
 みな争ひ給ひそとよ。役の優婆塞葛城や。祈りし久米路の橋は
 如何に。ツレ「たどふべき身にあらねども。我も女の葛城の神。
 シテ「一言葉にて止むまじや。唯幾度も岩橋の。ツレ「など御心に
 かけ給はぬ。二人「さりながらよろにて聞くも葛城や。夜作るな
 る岩橋ならば。渡らん事も難かるべし。地「是は長き春の日の。
 長閑けき水の舟橋に。さして柱も入るまじや。徒に朽ち果てん

おのづから十少の橋を云ふ。假初の渡しは非。眞實の衆生を救ひ。佛所非。渡さん橋を作りたき意。佛所非。橋の勤進を云ふ。身の上はしへも渡山。過去の身を思へば渡山。意をかこけて沈みし。渡山。火山。寶の燈に焦がると云ひかけたり。三瀬川。萬葉集の川。親の御心かけ給ひ。岩橋を夜作る。意にかけ云。夜作る。岩橋の神の形の見みくさを耻じて。夜中の分田ではたき給ひしと云へり。所は同じ名の云々。新古今集定家の歌に「野の渡り雪の夕暮」云々。大和にて同名の夕暮。山伏の衣の名。

を。作り給へ山伏。所は同じ名の。佐野の渡りの夕暮に。袖打ち拂ひて。御通りあるか篠懸の。頃も春なり川風の。花吹き渡せ舟橋の。法に往來の。道作り給へ山伏。峯々廻り給ふとも。渡りを通らでは。何處へ行かせ給ふべき。ワキ詞「扱々萬葉集の歌に。東路の佐野の船橋取り放し。又鳥は無しと二流に讀まれたるは。何と申したる謂にて候ふ。シテ詞「さん候ふうれに付いて物語の候ふ語つて聞かせ申し候ふべし。昔し此所に住みける者。忍び妻にあこがれ。所は川を隔てたれば。此船橋を道として夜なく通ひけるに。二親此事を深く厭ひ。橋の板を取り放す。うれをば夢にも知らずして。かけて頼みし橋の上より。かつばと落ちて空しくなる。倭執と云ひ因果と云ひ。其まゝ三途に沈みはて。紅蓮大紅蓮の水に閉ぢられ。地「浮かぶ世もなき苦しみの。海こうあらめ川橋や。磐石に

法ふゆきの。修行為の爲めの往來を云ふ。是は讀み誤りなれど。當時の説のありしなるへ。空執と云ひ。殘念と思ふ心の世因果と云ひ。作りし罪より此紅蓮大紅蓮。共み地獄の名。寒氷に閉ぢつけらる。苦界なり。苦しみの海より多し。常の苦しみは海のみみ限らずとの意。磐石に押され。邪淫の罪を犯したるもの。地獄に落ちて大石の上を隠れ。又隣にて押しつけらる。苦しきなり。心は無形の鬼の心。苦しきなり。身は阿彌の心。苦しきなり。中有の道。死して後。また地獄にも再入する。迷ひ居る間を云ふ。空も別れ。二人の跡の消え失するのみならず。今日の日も別れ。法の名。山伏の御道も兼ねた五道の罪。六道の内の修羅を除きて云ふ。

押され苦しきを受くる。クセ「さらば沈みも果てずして。魂は身を責むる。心の鬼となり變はり。猶戀草の言茂く。邪婦の思ひに焦がれ行く。船橋もふるき物語。誠は身の上なり。我跡吊ひてたび給へ。シテ「夕日漸く傾きて。霞の空もかきくらし。雲となり雨となる。中有の道も近付くか。橋と見れしも中絶にぬ。こゝは正しく東路の。佐野の船橋鳥はなし。鐘こそ響け夕暮の。空も別れになりけり。ワキ歌「ふりにし跡を改めて。三寶加持の行ひに。五道の罪も消にぬべき。法のカチ有り難き。ツレ「如何に行者有り難や。徒に三途に沈みし身なれども。法のカか船橋の。浮かぶ身となる有り難さよ。後シテ「如何に行者我は尙し。此倭執の故により。浮かびかねたる橋柱の。重き苦患

罪多き女の身が男子に變成し。遂に成佛するを得。八歳の女が此結果を得て南方無垢世界と云ふ佛國に生まれし事。法華經の海の八千度かなしき流るる(水の歸り來ぬ事)。古今集の歌を引く。浮世の迷ひも依りてこぼす涙なり。四大海。須彌山の四方を圍める。開法隨喜の爲め。佛の御法を聞き歡びて信心を起すたれども。少しも涙を流さぬ凡夫のあさましさを云ふ。衆聖如霜露日(能消除)觀音菩薩の文句。もろく(の罪の露)の如く。日光の照みふらひぬを消え失するの意。取日(佛力)の登り。調達。提婆とも云へり。初め佛法の不信者なりし大惡徒の名。五逆の因。一。父を殺し。二。母を殺し。三。阿羅漢を殺し。四。佛身より血を出だし。五。和合僧を破るの五大罪を犯したる原因の意。阿鼻。地獄の名。法華經を聞き法華の益を受ず。提婆の如く。惡人も佛樂の遊ばふ生まれかへりしを云ふ。況んや受持し云々。佛の教を給ふを聞きてさへ此(の如く)の況んや自ら受持請誦せ。其功德は無量なるべし。結縁。法華經の縁を結ぶの意。即ち今此地(法華經)の縁を結ぶる。

しいにしへの。身を知れば先だぬ。悔の八千度悲しきは。流るゝよろこびの汗涙。身の毛もよだちて扱も我。かゝる御法に逢ふ事よ。上人の御前に。涕泣するずあはれなる。地クリ「實にや恩愛愛執の涙は。四大海より深し。開法隨喜の其爲めなり。一滴も落とす事なし。シテサシ「有り難や。衆罪如霜露。惠日の光りて。消けて即身成佛たり。地「彼調達が五逆の因に。沈みはてにし阿鼻の苦しき。終に法儀の臺に變ず。シテ「況んや受持し讀誦せんをや。地「唯一時も結縁せば。うれしう即ち佛心なれ。ノセ「歸命妙法蓮華經。一部八卷四七品。文々悉く。神力を示し述べ給ふ。濁亂の衆生なれば。此經は保ち難し。暫くも保つ者は。我即ち觀喜して。諸佛も然なりと。一乘の妙文なる物を。深着虚空法。堅受不可捨う悲しき。シテ「始め華嚴の御法より。地「般若に及ぶ四十餘年。未顯眞實の方便。成佛のまこと

命を云ふ。佛に歸依して一心に信ずるの意。ハキミヤウと讀めど妙の字と同意かざる故に殊更ハキミヤウと讀まざり。四七品。法華經八卷の。第一序品。第二方便品。第三譬喻品。第四信解品。第五譬喩品。第六授記品。第七化城喻品。第八五百弟子受記品。第九授學無學人記品。第十法師品。第十一見寶品。第十二授記品。第十三妙莊嚴品。第十四安樂行品。第十五從地涌出品。第十六如來變品。第十七分別功德品。第十八稱讚功德品。第十九法華師子吼品。第二十常不輕菩薩品。第二十一如來神力品。第二十二觀音品。第二十三普賢菩薩品。第二十四普賢菩薩品。第二十五觀世音菩薩普門品。第二十六妙莊嚴品。第二十七妙莊嚴品。第二十八普賢菩薩摩訶薩品。第二十九普賢菩薩摩訶薩品。第三十普賢菩薩摩訶薩品。第三十一普賢菩薩摩訶薩品。第三十二普賢菩薩摩訶薩品。第三十三普賢菩薩摩訶薩品。第三十四普賢菩薩摩訶薩品。第三十五普賢菩薩摩訶薩品。第三十六普賢菩薩摩訶薩品。第三十七普賢菩薩摩訶薩品。第三十八普賢菩薩摩訶薩品。第三十九普賢菩薩摩訶薩品。第四十普賢菩薩摩訶薩品。奇特なる功力の御力を示し。一乘の妙文。外に比類なき唯一の妙文の意。深着虚空受不可捨。深く虚空の法を心に染めて。その迷ひが容易みおけざるの意。始め華嚴の縁を結ぶたれ。華嚴の次も阿含。般若の二經ありて其次も般若經を説きたり。未顯眞實の方便。以上四經にて未だ十分眞の方便をあらはさざるを云ふ。故に法華經を説かれしなり。正直捨方便。方便を用ひずして正直明白の教なるを云ふ。

あらはれて。妙法蓮華經うかし。正直捨方便。無上の道に至るべし。實に有り難や此經に。逢ふ事難き優曇華の。花待ち得たり。うれしこの今の機縁や。シテ「面白や妙なる法の花の袖。地「夕日や連れて廻らん。シテ「報謝の舞の袖の上。地「紫雲たなびき光りさし。千草にすたく虫の音までも。妙法蓮華の稱へかな。地「實に有り難き法の道。末闍からぬ燈の。永き闇路を照らしつゝ。三つの絆も悉く。得脱成佛の御法なり。實に有り難や頼もしや。シテ「御法の御聲も時過ぎて。地「御法の御聲も時過ぎて。既に此日も入相の。鐘ひゞき月出で。實にも妙なる法の場。身延の山の風の音。水の御聲もおのづから。諸法實相とひゞきつゝ。草木國土皆。成佛の靈地なりけり。

たきは假も鬼のすだくなりけり。とあるを引く。是ハ或る宮腹の女どもの事を背男のよめるなり。「うれたき」ハ「うせき」ハ「氣味わるき」など云はんが如し。「すたき」ハ「染まる事」を假かゝるを云ふ。女人の身を假かゝるを云ふ。松山ハ陸奥の名所。後拾遺集云「契りなきかたみお能をしほりつ。未の松山波こそじとは一どありて。此末の松山を波が越すまでも登ほらじと。決して未來ふもあまじき事實をかくて誓ふ立てし心をよめり。故めてお波の越ゆると作れるハ。浪のおびたしき形容なりと知るべし。引歌身越ふ云ハ悔いの八千度。引歌身越ふ云ハ佛の御法の言の葉さへ。女ハ非深くて成佛せられぬ者と佛の御味法の言の葉さへ。行きたらぬ方なき佛法の大意を雨ふ壁へ味法交珠の教へて云々。文殊菩薩の法華經を説きたるお依りて。波瀾王の女八歳なるお成佛せしを云ふ。授受品お見えたなり。故郷の秋。朱臣買が錦の衣を着て故郷の秋。説く唐糸の「説くからむ」の意おかけて云ふ。唐糸ハ唐土より舶來の糸。一筋おつゞけ云へるなり。經えず苦しき三熱の。龍の口日々三度熱く苦しめらる。事あるよし長谷阿闍梨などお見ゆ。

は須臾に法を得て。此世ながらの身を捨てず。本の悟りの故郷に。立ち歸る有様や。錦の袂なるならん。ロンギ地「此妙典の理を。説く唐糸の一筋に。仰きて保ち給へや。シテ「有り難の御事や。扱ハ妾も隔てなき。御法の水を手じ結び。絶に苦しき三熱の。焔を早くまぬかれん。地「そも三熱の苦しみを。まぬかるべしと宣ふは。扱ハ御身の靈神の。假に女となりたるや。シテ「今ハ何をか包むべき。我は七面の池に。澄む月並の數知らね。年經たる蛇身なり。地「さらば懺悔の其爲めに。本の姿を見せ給へ。シテ「恥づかしながら報恩に。有りし姿を顯はさんと。地「夕風も烈しく。立つや黒雲の。行方も早き雨の足踏みとゞろかし鳴神の。稻光して冷ましき。音にまぎれて失せにけり。ワキ歌「かゝる不思議に逢ふ事も。唯是れ法の力ぞと。心をすま

七面山の神靈の意。七面山の池。身延山の本院より三里西の方入りて深山あり。七面山と云ふ。この山の守護神七面明神を祭れる社ハ山の七分ありて。こゝより二十町のばれ。八咫の池と云ふあり。神靈のまつまる所なりと云ふ。月並。年月の事。

於須臾便成正覺。法華經授受品の文句。しばしありて即ち正覺成佛をなさんと。文殊の詔女お説かれたる詞なり。但し頂の字ハ原書お頭とあり。文字も音も似たるお依りて誤れるならん。さればキヤウベンと改むべし。如我等無異。我等と異なるなきの意。我とハ佛のつから云ハれたる詞なり。四種の花降り。愛敬羅羅。摩訶沙華を四種の花と云ふ。佛のあらはる。時のさまなり。宜禰が鼓。七面明神の神主の打つ神樂太鼓を云ふ。同じ調子お響き通たふ意。神樂舞ふ時お手お執る鈴の音。神樂舞ふ時お手お執る白和幣。白色の御幣なり。月霜の色おかけて云ふ。麗上再拜。みこの神樂舞ふ時お神拜する詞。是より拙女ハ成佛して優美なる女体となり。故郷の報謝の神樂を舞ふなり。能ひて

こひたぶるに。讀誦をなして待ち居たり。地「あら不思議やな今までは。妙に優なる女人と見はつるが。さも冷ましき大蛇となつて。日月の如くなる眼を開き。上人の高座を幾重ともなく。くるくくと引き纏ひ。慙愧懺悔の姿を顯はし。高座へ頭を差し上げて。瞻仰してこゝろ居たりけれ。ワキ「其時上人御經を取り上げ。地「其時上人御經を取り上げ。於須臾頂便成正覺と。高らかに稱へ給へば。忽ち蛇身を變じつ。如我等無異の身となれば。空には紫雲たなびき。四種の花降り。虚空に音樂聞こえて來て。宜禰が鼓にたぐふなる。報謝の舞の袂も。異香薫じて吹き送る。松の風颯々の。鈴の音も更け行く夜半の。月も霜も白和幣。振り上げて聲すむや。シテ「謹上。地「再拜。シテ「驚の山。いかに澄みける月なれば。地「入りての後も世を照らすらん。シテ「うれしや妙經信受の功力。地「うれしや妙經信受

此前みて龍の面を神女の面
 入りての世も照らすらん
 釋尊涅槃の世も遺教の世を照らす
 三身圓滿 頭と身と手足とを具
 足せるの意。蛇体が人体に變成
 せるを云ふ。佛が光を和らげて假
 和光同塵 佛が光を和らげて假
 神とあらわれ。人世の塵に交
 はりて衆生を救ふを云ふ。すな
 はち神姿を爲りたる事。すな
 垂跡示現 七面明神とあらわれ
 給ふ事。七寶の如き福徳が即
 座に生ずるを云ふ。七寶の經文
 に依りて指すもの同じからず。
 た。七種の珍寶と知るべし。昔信心
 の願を叶へ給ふと云へるなりん。

の功力。三身圓滿の妙体を受けて。和光同塵結縁の姿を顯はし。
 垂跡示現して此山の。鎮守となつて火難水難、もろくの難を
 のろき。七福則生の願を満みてしめ。世々を重ねて衆生を廣く
 濟度せんと。約諾かたく申しつゝ。行方も白雲に立ちまされて。
 虚空に上らせ給ひけり。

七福則生 七寶の如き福徳が即座に生ずるを云ふ。七寶の經文に依りて指すもの同じからず。た。七種の珍寶と知るべし。昔信心の願を叶へ給ふと云へるなりん。

鷺

元清作

大臣一聲「久かたの。月の都のあきらけき。光りも君の恵みかな。
 サシ「夫れ明君の御代の志るし。萬機の政すなほにして。四季を
 りくの御遊までも。捨て給はざる敬慮とかや。王「夫れ青陽の
 春になれば。大臣「どころくの花見の御幸。王「秋は時雨の紅葉

ツツシテ 大蔵人王
 ツツシテ 大蔵人王
 醍醐天皇 神泉苑に御幸ありける
 時。鶴の刺を奉せしを御感あつ
 て。それを捕へし藏人と共み五
 位を賜はる事を作れり。出處の
 盛宣記十七の巻に出づ。出處の
 久かたの 天の枕詞なるを。こ
 こみ月冠らしたり。

青陽 春の風名。

松の此方の前芝を云々 よそか
 小車 御幸のさまを云
 同し雲井の 神泉苑に内裏の内
 の御死なれば云々

三千世界眼前 十二因縁の虚空
 竹生島明神の御作と云ひ傳へた
 る詩を引く。たと池水のひろび
 るとせしを湖水ふ比して云へる
 たり。

松のよるゝなりて立
 てる事。
 翠あやをなす 曲水の字につけ
 なれば。曲水の曲の字につけ
 て云ふ。曲水の曲の字につけ
 曲水の云々 三月上旬の曲水宴
 まつさへさるの朝詠の詩の詞
 を用ふ。詩はまだ出来ぬ手か
 先づ盃を酌れらるの意。
 洲崎 御地の中の洲崎を云ふ。
 地名ふ非ず。

狩。大臣「日數もつもる雪見の行幸。王「寒暑時をたがへされば。
 大臣「御遊のをりも。王「時を得て。地「今は夏夕と夕涼み。松の此
 方の道芝を。誰踏み馴らし通ふらん。是は妙なる御幸とて。小
 車の。すぐなる道を廻らすも。同じ雲井の大内や。神泉苑に着
 きにけり。
 王「おもしろや孤島うばだつて波悠々たるよろほひ。誠に湖水の
 波の上。三千世界は眼の前に盡きぬ。十二因縁は心の裏にむな
 し。げにおもしろさけしきかな。地「鷺のおる。池の汀に松ふり
 て。都にも似ぬ住居はおのづから。實にめづらかなおもしろや。
 或ひは詩歌の舟を浮べ。又糸竹の。聲あやをなす曲水の。手
 まづさへさる。盃も浮ぶなり。あらおももしろの池水やな。
 王詞「いかし誰かある。大臣詞「御前に候ふ。王「あの洲崎の鷺をりか
 ら面白う候ふ。誰にても取りて参れと申し候へ。大臣「畏つて候

春の西王母とくらへ見るべし。
出處ハ漢武内傳あり。
承華殿 漢の代の御殿の名。
七寶の臺 見事なる宮殿の形

喜見城 天上の都の名。

五日の風や十日の雨 風雨の程よくありて天地和合する事。

逢ふ瀬を急ぐ 「生まれあふ」の詞を受けて「逢ふ」の文字を出た
秋來ぬと云々 古今集「秋來ぬと目ふりさやかみ見えぬも風の音ふか驚かれぬる」とあり。藤原の君ふなびく意を含む。
千年の秋の 千年かけて懸かき賣のるべき前兆を示すの意。

初秋の七日七夕の。星の祭を急ぐなり。ツレ「帝の御殿は承華殿。ワキ」さながら花の袖を連ね。ツレ「七寶の臺金銀の床に。君を始め奉り。ワキ」官軍おのく。ツレ「並み居つゝ。地」御遊をなしていろくくの。樂しみ盡きぬ其氣色。音に聞く喜見城も。是にはいかで勝るべき。唯是れ君の御威光。廣き恵みは有り難や。シテツレ「聲」治まれる。御代の光りに數ならぬ。身までも安き住居かな。ツレ「恵みも廣き此君の。二人」御影を頼むばかりなり。シテサシ「うれ賢王の御代のしるし 五日の風や十日の雨。二人」濕ふ四方の草木まで。靡き隨ふ此時に。生まれあふ身は頼もしや。歌「時しも今日は織女の。逢ふ瀬を急ぐ頃なれや。秋來ぬと。目に見ぬ空はおのづから。音かへて吹く風の。袖も涼しき夕暮。靡く稻葉の色までも。千年の秋の始めかな。シテ詞「如何に奏聞申すべき事の候ふ。ワキツレ」奏聞申さんとは

悉達太子 釋迦如來の事。
仙人に仕へ 雪山にて仙人を師として難行せしむる事。
採葉汲水 是れ難行の種類なり。

如何なる者ぞ。シテ「是は此國の傍に住む者にて候ふが。申し上げたき子細候ひて參内申して候ふ。ワキツレ」さうらば此方へ参り候へ。シテ「是は此國の傍に住む者にて候ふが。めでたき瑞相の御座候ひて参りて候ふ。此程三足の青鳥御殿の上を飛び廻り候ふ。是れ西王母が寵愛の鳥にて候ふ。即ち西王母此君へ參禮申すべし。此事奏聞申さん爲めに参りて候ふ。ワキ」かゝるめでたき事ころ候はぬ。猶々仙人の謂懸に物語り候へ。地「うれ仙郷といつば。人間に交はらず。松の葉をすすき苔を身に着て。年は経れども樂しみ盡きず。飛行自在の通を得る。シテサシ「かたしけなくも悉達太子は。仙人に仕へおはしまし。地」採葉汲水年を経て。終に成道し給ひて。大聖世尊となり給ふ。クセ「然るに仙人の其數限りも知らぬ中にも。西王母と聞こえしは。西方極樂無量壽佛の化現なれば。はかりなき命の。仙人と

歸る波の 波の字が「かへる」と
「波」のつなぐも音より。

西の空 極樂居士の方向なり。

なるがめでたき。されば園生に植うる桃の。三千年に一度。花
咲き實なる此木の。仙薬となるが不思議なる。シテ「今は包まじ
我ころは。地其名も世々に隠れなき。東方朔と聞こはしは。此
老翁が事なり。君桃實をきこし召さば。御壽命長遠に。御身も
息災なるべし。急ぎ王母を伴なひ。重ねて參内申さんと。庭上
を立つて歸る波の。聲ばかり残りつ。形は雲に入りけり。
後シテ「うもく是は。仙郷に入つて年久しき。東方朔とは我事
なり。扱も我西王母が桃實を。度々服せし其故に。壽命既に九
千歳に及べり。彼桃實を君に捧げ申さんとの誓ひあり。如何に
やいかに西王母。とくく參内申すべし。地「不思議や西の空よ
りも。白雲一村くだると見はしが。三足の青鳥。翅をならべて
飛び廻り。姿も妙なる王母の出で立ち。光りもかゝやく衣冠を
着し。白龍に乗じて顯はれ給ふ。まのあたりなる奇特かな。

琵琶 さらば色の龍をぶふ。

平忠度 藤原俊成
俊成從者 岡部六彌太
ワツシ 京都
トモ キレテ
岡部六彌太は忠度を討ちてのち自
筆の短冊を見出でしかば。之を
届けんとて俊成の許に至りし
に。中度もあらはれ出で、千載
集に作者を尋かれざりし家誠を
述べてまた修羅道の苦患を見す
る事を作れり。道具。
尻箱 矢を入る、道具。

王母「王母は庭上に歩み出で。地王母は庭上に歩み出で。彼桃
實を捧げ持つて。上覽に供へ奉れば。帝王御感の餘りや。糸
竹の調べ數を盡し。皆一同にかなで給ふ。舞樂の秘曲は面白や。
地舞樂も漸く時過ぎて。夕陽西に傾きければ。各君に御暇申
し。歸らんとせしに。帝王名殘を惜しみ給ひ。重ねて參内申す
べしと。宣言を蒙り。二人は伴なひ出でけるが。王母は斑龍に
ゆらりと打ち乗り。遙かの雲路に攀ち上りて。又天上に歸り
ける。

俊成忠度 古名五條忠度 内藤左衛門作

ワキ詞「かやうに候ふ者は。武藏の國の住人。岡邊の六彌太忠澄
にて候ふ。扱も今度西海の合戦に。薩摩の守忠度をば。某が手
に懸け失ひ申して候ふ。御最期の後尻籠を見奉れば。短冊の御

御直遇 師弟の縁あるを云ふ。

座候ふ。又承り候へば。五條の三位俊成卿と。和歌の御直遇の由申し候ふ間。此短冊を持ちて参り。俊成卿の御目にかけばやと存じ候ふ。如何に案内申し候ふ。トモ「誰にて渡り候ふぞ。ワキ「岡邊の六彌太忠澄が参りたる由御申し候へ。トモ「心得申し候ふ。如何に申し上げ候ふ。俊成「何事にて有るぞ。トモ「岡部の六彌太忠澄の伺候申されて候ふ。俊成「此方へと申し候へ。トモ「畏つて候ふ。此方へ御参り候へ。ワキ「心得申し候ふ。俊成「いかに忠澄。扱唯今は何の爲めに來り給ひて候ふぞ。ワキ「さん候ふ唯今参る事餘の儀にあらざ。西海の合戦に薩摩の守忠度をば。某が手に懸け失ひ申して候ふ。御最期の後尻籠を見候へば短冊の御座候ふ。承り候へば。忠度とは淺からぬ和歌の御直遇の由承り候ふ間。御目懸けばやと存じ。唯今持ちて参りて候ふ。俊成「此方へ賜はり候へ。實にや弓馬の道ならぬぞ。

行を替れて云々 花を主人として木陰に一泊するの意。
破戒無慙の 佛法の戒を破る如き暴逆を云ふ。

船を得て 佛の導きを得ての意。
彼岸の 悟りの道に入りて成佛する事。極楽の蓮華を云ふ。
前途程遠し 前途程遠し。別れ度生前より俊成の許を訪ひ。別れを波の底に沈め骨を山野にさらすとも思ふ事なして。馬に乗る古詩を。前途程遠し。三思於雁山之暮雲。後會期無三。雁山之曉。と打ちあげ。く。詠じつ。南をさして。落ちゆく。きける。とある。依りて。落ちゆく。土の都より胡の地に。雁山とは。雁の山の名。雁門とも云へり。共に詠めし。むかし俊成と忠度命。たゞ心に叶ふ云々。古今集し。未句は。うれしからまし。とあり。命さへ心のまににて死なず。に居らる。ものならは。難別と云ふ事。哀しむに及ばじの意。此事は第二

いつしか世よ名を残し置き給ふ事のあはれさよ。何々旅宿の花と云ふ題にて。行き暮れて木の下陰を宿とせば。花や今宵の主ならまし。地「痛はしや忠度は。破戒無慙の罪を恐れ。仁義禮智信。五つの道も正しくて。歌道は達者なり。弓矢よ名をあげ給へば。文武二道の忠度の。船を得て彼岸の。臺に至り給へや。シテサシ「前途程遠し。思ひを雁山の夕べの雲に馳す。八重の汐路に沈みし身なれども。猶九重の春に引かれ。共に詠めし花の色。我面影や見えつらん。命唯心よ叶ふものならば。何か別れの物憂かるべき。如何に俊成卿。忠度こそ是まで参りて候へ。俊成「不思議やな夢現ども分かざるよ。薩摩の守の御姿。顯はれ給ふ不思議さよ。シテ詞「扱も千載集よ。一首の歌を入れさせ給ふ御志しはうれしけれども。讀人知らずと書かれし事心にかゝり候ふ。俊成「尤うれはさる事なれども。朝歌の御名を顯へさん

とすなれば。それを烈火小唄
荒磯の 焔の荒きにかけて云
波の打物 波の打つと云ひかけ
たり。打物ハ刀劍の事。
火車 車輪の如き火の意。

梵天感 梵天の王も許し給ふと云ふ。
背 燈共憐れ夜月。踏花同惜少年
春 白氏文集の詩を引く。

鷓鴣の山 本朝文粹。僕夫侍
鷓鴣の山。鷓鴣の山。鷓鴣の山。
木がくれて 右の山の木の間に
かかれて 消え失する意にかけて
云ふ。

宿主(女) 宿主(女)。
後シテ 宿主(女)。
ワキ 宿主(女)。
ツレ 宿主(女)。
富士と云ふ 樂人非命の最期を説
したため。其妻浮びやらずして此

の。波の打物抜いて。切つてかゝれば敵人は。矛を揃へてかゝ
り給へば。忠度あひ向つて打ち拂へば。うのまゝ見えす。敵を
失ひあきれて立てば。天よりは火車降りかゝり。地よりは鐵刀
足を貫ぬき。立つも立たれず居るもおられぬ。修羅王の責め。こ
は如何にあさましや。シテ「やゝ有つてさゝ波や。地」やゝ有つて
さゝ波や。志賀の都はあれにしを。昔ながらの山櫻かなど。梵
天感し給ひしより。劍の責めを免かれて。くら闇となりしかば。
燈を背けては。共に憐む深夜の月。花を踏んでは同じく惜しむ。
少年の春の夜も。早白々と明け渡れば。有りつる姿ハ消えく
と。有りつる姿は鷓鴣の山。木隠れて失せにけり。跡木隠れて
失せにけり。

梅枝

うめがね

元清作

世に執心の残りしが。法華經の
功徳を仰がんとて旅僧一宿を
與へ。鷓鴣の樂舞を伴ひて。鷓
第三卷に出だせる富士太鼓の妻
の現在をあらはし。この梅枝ハ
其幽怨をあらはしたるなり。僧と
捨てしめぐる世の中ハ。僧と
廻國修行するハ世の中の内ぞと
なり。
心の隔て 心ハ自他の隔ある故
なりと。全く世ハ用難し難き事
を棄下して云へるなり。
身延山 身延山を委しく出づ。
沙門 僧ハ同し。
縁の衆生 佛法ハ衆ある人々を
云ふ。
雲水の身 行脚僧を云ふ。
我衣手や住の江の 羅漢の衣の
意にかけて云ふ。住の江ハ羅漢
の國住吉の古名。住の江ハ羅漢
あら笑止や ち困つた事かな
の意。

草壁の宿 草をもて壁としたる
正木のかづら かげらをくりよ
集意信の歌 旅僧の宿の
山もちりれて正木のかづら來
る人もなしとあり。
無縁の沙門 はじめて訪ひたる
故云ふ。
一宿ハ利益 僧一宿を興ふれ
ハ功徳多き事賢愚經に見ゆ。

ワキ次第 捨てしめぐる世の中は。心の隔てなりけり。詞「是は
甲斐の國身延山より出でたる沙門にて候ふ。我縁の衆生を濟度
せんと。多年の望みにて候ふ程に。此度思ひ立ち廻國に趣き候
ふ。道行何處にも。住みははつき雲水の。身ははて知らぬ旅
の空。月日程なく移り來て。所を問へば世を厭ふ。我衣手や住
の江の。里にも早く着きにけり。詞「急ぎ候ふ程に。是は早津の
國住吉に着きて候ふ。あら笑止や。俄に村雨の降り候ふ。是な
る巷に宿を借らばやと思ひ候ふ。如何に此屋の内へ案内申し候
ふ。
シテ「實にや松風草壁の宿に通ふといへども。正木の葛來る人も
なく。心も澄める折節に。事問ふ人は誰やらん。ワキ詞「是は無
縁の沙門にて候ふ。一夜の宿を御借し候へ。シテ詞「實にく出
家の御事。一宿は利益なるべけれど。さながら傾く軒の草。

殖生の小屋。賤しき家を云ふ。板敷なども無くてもわづかみ。土の上敷きたる家を云ふ。

舞の宿のうれたくとも。伊勢物語。く「生ひて荒れたる宿のうれたくは假にも鬼のすたくなりけり」とあるを用ひて云ふ。

松吹く風も心して云々。明詠集に。松葉風は旅人夢とあるを用ひて云ふ。

伶人 唯樂を業とする人。

殖生の小家のいふせくて。何と御身を置かるべき。ワキ「よこよし内はいふせくとも。降りくる雨に立ち寄る方なし。唯ざりては借し給へ。シテ「實にや雨降り日も吳竹の。一夜を明かさせ給へどて。地「早此方へと夕露の。葎の宿はうれたくとも。袖をかたしきて。御泊りあれや旅人。西北に雲起りて。東南に來る雨の足。早くも吹き晴れて。月にならんうれしや。所は住吉の。松吹く風も心して。旅人の夢を覺ますなよ。ワキ詞「如何に主に申すべき事の候ふ。シテ詞「何事にて候ふぞ。ワキ「是に飾りたる太鼓。同じく舞の衣裳の候ふ不審にこそ候へ。シテ「實によく御不審候ふ物かな。是は人の形見にて候ふ。是に付きあはれなる物語の候ふ語つて聞かせ申し候ふべし。ワキ「さらば御物語り候へ。シテ「昔し當國天王寺に。淺間といひし伶人あり。同じく此住吉にも富士と申す伶人有りしが。其頃内裏に

管絃の役を争ひ。富士と淺間とが互に當日の當役を競争するなり。あやまつて討たせぬ。非道にも殺させたりの意。

逆縁ながら。序ながらと云ふ程の意。はじめより相らふつもり。ふて宿りしならは順縁。其反對は逆縁なりと知るべし。

太鼓の朽ちず苦むして云々。明詠集に。鼓音深き不し驚とあるを用ひて云ふ。むかし博士の代に。鼓の音を朝廷に備へ置きて。民の厭ふる時。之を打つて知らする定めなりしに。明王の代には。民の厭ふれば。之を打つ必要なく。自然お苦むして。鳥も其邊に馴れ遊ぶの意。故に

管絃の役を争ひ。互に都に上りしに。富士此役を賜はるによつて。淺間安からずし思ひ。富士をあやまつて討たせぬ。其後富士が妻夫の別れを悲しみ。常は太鼓を打つて慰み候ひしが。うれも終に空しくなりて候ふ。逆縁ながら申らひて給り候へ。ワキ「かやうに委しく承り候ふ。其古への富士が妻の。ゆかりの人にてましますか。シテ「いやとよろれ遙かの古へ。思ふも遠き世語の。ゆかりといふ事あるべからず。ワキ「さらば何とて此物語。深き思ひの色に出で。涙を流し給ふぞや。シテ「のう何れも女は思ひ深し。殊に戀慕の涙に沈むを。などかあはれと御覽せざらん。ワキ「猶も不審の殘るなり。形見の太鼓形見の衣。こゝには殘し給ふらん。シテ「主は昔になり行けども。太鼓は朽ちず苦むして。ワキ「鳥驚かぬ。シテ「此御代に。地「住むもかひなき池水の。怠れて年を経し物を。又立ち歸る執心を。助け給へ

此御代つゞけたり。池水の忘れ。忘れ水と云ふ詞ある故云ひかけたり。法華は是れ最第一。法華經提婆品。佛告諸比丘。我所説諸經。而於此經中。法華最第一。三世の諸佛の云々。過去現在未來の三世の諸佛が。世々々々々世々出で、説法して給ふ本は。唯佛乘の法華經を説きては。直道み衆生を成佛せしめん爲めなりとの意。一者不得作梵天王云々。法華經提婆品。諸女の成佛を不審して。釋尊の門弟舍利弗と云ふ人が女の五陰の罪を並べあげたる文句なり。女の罪深き證據は。第一に梵天王と爲られず。第二に帝釋と爲られず。第三に轉輪聖王と爲られず。第四に轉輪聖王と爲られず。第五に佛身と爲られず。何は速に成佛して速に成佛するを得ん。舍利弗は疑ひ申す。是は速に成佛して疑ひ申すの意。速に成佛の句は提婆品のつゞきなり。何疑ひか。用ひたり。故に二人の語を打ちより切り放して。地に説はし文句なり。若し開法者無一不成佛。法華經方便品の文句。下に此文意を説して。一度此經を云々」と云へり。碧玉塵難脱。明詠集の詩なり。庭の夢を出したる時は青

といひ捨て。かき消す如くに失せにけり。ワキ「うれ佛法さまぐなりと申せども。法華は是れ最第一。ツレ三世の諸佛の出世の本懐。衆生成佛の直道なり。ワキ「中んづく女人成佛疑ひあるべからず。二人「一者不得作梵天王。二者帝釋三者魔王。四者轉輪聖王。五者佛身云何女身。地速得成佛何疑ひか荒磯海の。深き執心を晴らして。浮かび給へや。或ひは若有聞法者。無一不成佛と説き。一度此經を聞く人。成佛せずといふ事なし。唯頼め頼もしや。吊らふ燈の影よりも。化したる人の來りたり。夢か現か見たりともなき姿かな。ワキ「不思議やな見れば女性の姿なるが。舞の衣裳を着し。さながら夫の姿なり。詞「扱は有りつる富士が妻の。其幽靈よてましますか。シテ「實はや碧玉の寒き蘆。雖脱すとは。今身の上よ知られさむふや。とりながら妙なる法の受持よ逢は。變

碧玉に似たれば碧玉と云ひ。其芽立の若蘆が水の中よりあらはれたるは。蘆の中より蘆の先のさし出でたるが如しとの意。こゝには唯地たる我姿の見聞はされざる壁に用ひしなり。妙なる法の受持。妙法蓮華經の教を身に受持す。男子女子が成佛して男子に身成せし提婆品の古事。羅刹。地獄畜生餓鬼の三惡道をゆひかひなく。いひかひなく。纏衣つきの。衣のつまと云ひかけたり。一念のおこるは云々。一たび惡念の發するは病なれども。二念と纏纏せざるは藥なりとの意。佛前より出でたる詞なり。

成男子の姿とは。なや御覽じ給はぬや。然らば御吊らひの力にて。地「憂かりし身の昔を。懺悔し語り申さん。さるよても我ながら。よしなき戀路よ侵されて。長く惡趣よ墮しけるよ。さればよや女心の亂れ髪。ゆひかひなくも戀衣の。妻の形見を戴き。此狩衣を着しつ。常は打ちし此太鼓の。寐もせず起きもせず。涙敷妙の枕上に。残る執心を晴らしつ。佛前に至るべし。うれしの今の教へや。シテ「思ひ出でたる一念の。地「起るは病ふとなりつ。繼がざるは是藥なりと。古人の教へなれば。思はじく。戀忘れ草も住吉の。岸に生ふてふ花なれば。手折りやせまし我心。契り麻衣の片思ひ。執心を助け給へや。ロンギ地「實に面白や同じくは。懺悔の舞をかなで。愛着の心を捨て給へ。シテ「いさくさらば安執の。雲霧をはらふ夜の。月も半なる。夜半樂をかなでん。地「心も共に住吉の。松のひま

